
俺の日常非日常

ポンジュニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の日常非日常

【Nコード】

N7592W

【作者名】

ポンジュニア

【あらすじ】

個性豊かな登場人物たち！！

主人公！親友！妹！ガキンチョ！少女！宇宙人！メガネ！変人！変態！オタク！天然！ドジッ娘！影薄いぞお前！あ、いたのかお前！お前は誰だっけか？！また俺喋ってたのか！なんだその鋭いツッコミは！これは俺の元気の源だ！超能力だと！？うわっ逃げる！あいつがキレ出した！方向音痴！ただの音痴！理系と文系の間！発明家！あー、はいはい！うるせえな！ム、虫がああ！！！ゴメンナサイ！あんちゃん！山下！ちよ、おいうそだろ！やめるやめてくれええ

！何で俺がこんな目に！誰が呼んだか二次マスター！このプリンは俺のだ！辛い辛いいい！フッフ、すげーだろ？！俺に心理戦で来るか！まだまだ甘いなあ！なんで空から！？うわああ！落ち着け！いたよ！ずつといたよ！ここにいたよ！フリーズ君！じゃんけんぽん！見た目は無敵！頭脳は無限！萌え！僕は変態ではない！全力でミスツた！なんヨ！え！？いいの？これでいいの？ねえ！？いいの！帰れ！ややこしい！いかさまだと！？俺は頭を使っただけだ！！へへすげーだろ。堂々と見てやつたぜ！！不法侵入！俺の朝飯い！俺の昼飯い！俺の夕飯い！！絵は得意なんだー！リアルの妹なんて所詮：！親友じゃない！？！ノリで！マイシスター！典型的な食いしん坊発言！人見知り激しいな！あいつ、すっかり汚染されちまいやがって！あ、可愛い！ボケの神様もビックリだ！歯をくいしばれええ！おお！マイPCがああ！！お前何キャラだよ！なんだこれ！こんなに簡単に毒を作る方法があつたなんて：ガクツ！ハバネ口に毒をもられたあ！おい誤解だ！何でお前がいるんだよ！俺の家なのに！芋でも焼くのか？！breakfast！くそっ！この癖なおんねえかなあ！

これは死ぬる！パネエ！ノリツツコミ！お前空気になるぞ！この口リコン野郎！無言怖い！おい、もう帰ろうぜええ！ビビリすぎだろ！なんでやねん！かの有名な織田信長でさえも…！しつこい！俺の扱ひひどくね？現行犯！

こんなあらずじ見たことない！壮大なネタバレを含んでおります！だが気にしない！気にしたら負け！！俺はそういう男だ！深く考えずに読もうね！

それらをすべて凝縮させた作品が今ここに。

下らないけど面白い！

クソみたいだが笑えちゃう。

第一話から最新話までの作者の成長記録！！
結構変化してると思う。書き方が。

作者の変化っぷりもお楽しみください。

初めに俺日！登場人物紹介（前書き）

はじめに（最終更新：2011/10/16/00:32）

設定ですので、今後変更・追加するかも。

他に、知りたいこと、書き忘れなどがございましたらお申し付けください。

ちなみに、wiki風になっております。

ネタバレを含むので、嫌な人は見ない事をお勧めします。

初めに〜俺日！登場人物紹介〜

〜登場人物紹介〜

【名前】 ヤマゾラ 山空 カイ 海

【性別】 男

【年齢】 17歳 高校生

【登場】 第一話〜

キャラ情報

この物語の主人公。
現在一人暮らしだったが、十話目以降からエメリィヌと同居することになる。

生活費は親負担。

ピンチになると定期的にバイトもする。

両親は仕事で外国にいて、ちょっと名の知れた有名人。

料理はそこそこできる。

そしてなぜかいつも、非日常的な出来事に巻き込まれる。

物語は基本、海の語りで進められる。

く性格く

自己中心的で、その場の勢いで何でもしよつとする。
そのせいで、悪い事が起こることもしばしば。後から後悔するタイプ。

人の目はあまり気にしない。

好きなものは飲食料系の新商品で、見ると所構わず買ってしまふ。
やはりそれで、失敗をすることもある。

彼が言うには、流行に定評があるらしい。

つまり、流行には敏感と言う事だ。

く呼び方く

自分の事は【俺】と言う。

同学年、後輩などは名前やあだ名で呼ぶ。

親友の秋、その妹の琴音、宇宙人のエメリー又は、すべて名前で呼ぶ。

父は、父さん。

母は、母さんと呼ぶ。

〈容姿〉

ご想像にお任せします。

〈服装〉

普段はTシャツやジーパンなどを好み、非常にシンプル。

ファッションセンスはなく、人の目をあまり気にしないがために、だらしない恰好をしている。

学校に通う時は、制服を着るが前を開けたりとか、寝癖があったりだとかで、やはり決まらない。

〈特徴〉

考えている事を、無意識に喋ってしまうと言う癖がある。

最初は治したいと思っていたが、最近は慣れてしまい、どうでもいいと思いはじめている。

いつもだらしく、その性格のためか、あまり人は寄り付かない。

琴音によると、いきなりどうでもいいような事を言いだしたりと、一緒にいて飽きない存在らしい。

〈家柄・人物関係〉

父・母・海の三大家族。

母は、外国でファッションデザイナーをしている。

父は、映画監督なので、実は軽くお坊ちゃん。

学校では両親のことが知れ渡っており、
金銭面的に、よく思っている人があまりいない。

だが両親は金銭面にうるさく、必要最低限の生活費と少しばかりの小遣いしか貰ってははいない。
なので、実際は普通の学生と変わりはない。

一人暮らしだったが、とある事情でエメリイヌと暮らすことになる。

立ち位置的には基本ボケ。だが、ツッコむ時もある。

〈登場人物紹介〉

【名前】

竹田 秋

【性別】男

【年齢】17歳 高校生

【登場】第一話

キャラ情報

竹田家長男で、主人公（以降から海と表記）の親友。

よく、妹の琴音をつれて、三人一緒に遊んだりしている。

性格

マイペースで、何者にも流されないタイプだが、すごく怖がり。

こういう性格のためか、張り詰めた雰囲気は苦手らしい。

呼び方

自分の事は、【俺】と呼ぶ

海同様に、皆を名前で呼んでいる。

父は、親父。

母は、お袋と呼ぶ。

〈容姿〉

ご想像にお任せします。

〈服装〉

海同様にあまり気にしないため、親に買ってきてもらったのを適当に着ているが、最近では、妹の琴音にしつこく言われるため、仕方なく色合いなどを考えて着ている。

意外と、センスはいい。

制服は、ちゃんと着ている。

〈特徴〉

まず、オカルト、ホラー系がだめで、遊園地のお化け屋敷でも怖がるほど。

だが、自分の部屋は安心できるため、暗くても平気らしい。

よく皆から忘れられる事があり、妹にも忘れられたりする。

そして、実はかなり気にしている。

陰が薄いためか、本編ではあまりしゃべらず、ショックを受けては

良く固まるため、のちに、海にフリーズ君と名付けられる。

自分よりも人の事になると、力を発揮するタイプ。

だが妹の事になると、冷静さを失い、空回りすることが多い。

冷静を取り戻すきっかけは、やはり誰かの言葉。

一度冷静さを取り戻せば、驚異的な冴えを見せる。

〈家柄・人物関係〉

父親は仕事で帰らない事が多く、

基本は母と、妹の琴音、そして秋と、三人で暮らしている。

学校では海といるため、やはり良いようには思われていない。

だが本人は、

『下らない事で誰かを忌み嫌っている奴らとは分かりあえそうにな
い。』

と、きつぱりと言いつつ放った。

立ち位置的には、ボケくツッコミ。

〈登場人物紹介〉

【名前】タケダ竹田 コトネ琴音

【性別】女

【年齢】13歳 中学生

【登場】第三話

キャラ情報

秋の妹で、竹田家の長女。

とても家族を大事にしており、家族が大好き。

よく秋について行く。

〈性格〉

天然で、ちよっぴりドジな所もあるが、とても冷静で優しい心を持つ。

相手の事をいつも真剣になって考えたりするので、細かい所とかにも良く気づく。

だが、人見知りがすごく、自分より年上の相手とは上手く話せない。心を許した人間となら普通に話せる。海もその一人。

しかし、自分より年下にはお姉さんぶりたがる。

素は、恥ずかしがりやで、寂しがりやだが、怒ると怖い。

よく、いろいろ理由をくつつけてその場を乗り切ろうとしたりする。

く呼び方く

自分より年上（親しい）の人には、名前の後にく兄い、く姉えをつけることが多い。

それ以外の年上の人には、くさんと呼ぶ。

自分より年下、または同じ年の人には、くちゃんやあだ名で呼ぶ事が多い。

自分の事は【私^{わたし}】と呼ぶ。

そしてそれぞれは、秋兄い、海兄い、エメリィちゃんと呼んでいる。

く容姿く

髪の色はこげ茶色で、ショートの左サイドテールにしている。

茶色い瞳に、黒目で、その外見から幼く見られがち。

本人はその事を結構気にしている。

〈服装〉

スカートやワンピースよりも、デニムやズボン、キュロットなど動きやすい服装を好む。

だが、買い物に行くだけの時や家にいるだけの時なんかは、着たりもする。

いつも使っている髪止めは、茶色。髪止めにはあまり気を配っていない様子。

結構可愛い系の物が多く、そしておしゃれに着こなす。

ファッションセンスは抜群。

学校の制服は、ちゃんと着ている。

〈特徴〉

特技は絵を描く事で、小学校の絵のコンクールで毎年金賞を貰っていたほど。

だがしかし本人はその凄さに気づいていない。

虫が大の苦手で、蚊やハエ、蟻なども触れないほど。

蝶ぐらいの大きさの虫だと、パニックを起こす。

絵のほかに料理や家事も得意で、母がいない時なんかは琴音が代わりにやる。

琴音、秋の母は、若いころ格闘技が好きで、空手、柔道、ボクシングなど、色々な格闘術をマスターしている。

それを、琴音にも教えているらしく、琴音も意外と強い。

でも、母には勝てない。

〈家柄・人物関係〉

家族構成は秋と同じ。

秋の妹。

海とは、小学生のころ、秋に誘われて遊びに行った先で出会った。

当初は人見知りせいでぎこちなかったが、海の優しい振る舞いのおかげもあり、今は普通に接している。そして、容赦もなく殴ったりしている。

昔は学校の友達もいたが、キレた時に、母に教え込まれた技を発動し、周りに避けられる始末となった。だが性格のためか、本人はあ

まり気にしてはいない。

昔からの友達は、事情を知っているので変わらず接してくれている。立ち位置的には天然のボケ。だが、兄の影響もあり時折ツッコんだりもする。

↳登場人物紹介↳

【名前】 エメリーヌ・ジヨセフ

【性別】 女

【年齢】 7歳

【登場】 第六話↳

キャラ情報

宇宙の何処かにあると言われている、コツカコラ星から来た、コツカ星の力星人

だが、なぜか日本語ペラペラ。自分の名前のジヨセフがおじさんのように、嫌っている。

なので、その名前で呼ぶと怒る。

〜性格〜

かなりのマイペースで、よくまわりを振りまわす。

言葉をオブラートに包むなんてことは一切せず、思った事をキツパリと言い放つ。

馬鹿にされても、逆に相手に立ち向かう相当のつわもので、嫌な事があっても、全く気にしない性格。いわゆる元気っ子。

それでも、ふざけちゃいけない雰囲気は分かっており、大事な場面ではビシッと決めてくれる。

でも所詮は子供なので、下らない事でキレたりする。

〜呼び方〜

自分の事は【ウチ】と呼ぶ。

年上だろうがなんだろうが、呼び捨てで呼び、呼ぶ際はカタカナ表記。

それぞれは、カイ、シュウ、コトネと呼ぶ。

母は、母上。

父は、父上と呼ぶ。

〈容姿〉

見た目はとても美しく、いわゆる美少女。お金持ちのお嬢様のような感じだが、中身は正反対。田舎の子供のように活発で元気。

髪型は、肩までである、ウェーブのかかった金色の髪。

目の色はエメラルドグリーン。

はたから見れば、とても上品。中身はただのガキンチョ。

〈服装〉

全身緑色で、とても目に優しい色合いだが、一緒にいると目だつという理由で、海が地球の服を買い、着せている。なので、たまにか着ていない。

初登場時は、丈が膝までの、緑色のワンピース（イメージ的にはノースリーブに近い）。

先の尖っている緑色の靴。

緑色の手袋。

サンタが被っているような緑色の帽子。

と、曲芸師のような奇抜なファッションだ。

〈特徴〉

首に勾玉をかけており、その勾玉のおかげで超能力が使える。

なお、コツカコラ星では、勾玉がなくても使える。

でも、コツカコラ星の時は、超能力がまともに使えなかったため、エメリイー又は落ちこぼれと言われている。

地球では、超能力の波長を狂わし、コツカコラ星とはケタ違いのパワーが出て、エメリイーでも使えるようになった。

普段は関西弁口調でしゃべるものの、中途半端なので、海にエセ関西人と言われている。

語尾に「なんヨ」と言ったように、特徴がある。

〈家柄・人物関係〉

今現在では、エメリイー又の家族関係は明らかにされていない（考えていない）。

コツカコラ星には幼馴染のルブと言われる少年がいる。

海たちに会ったのは家出して、偶然とされているが……………。

まだまだ謎に包まれたキャラである。

現在は、海カイの家に居候中。

立ち位置的にはツッコミとボケを両立させているキャラクター！。

初めに俺日！登場人物紹介（後書き）

全部読んでくれた方、大変お疲れ様でした。

読んでくれてありがとうございます。

それと、最初に言いました通り、話を書いてく上で不都合な設定があつたら変更します。

なお、今後、新たな設定を追加するかも。

これからも、俺日！こと、俺の日常非日常をよろしくお願いします。

第一話〜いつもの俺と恐怖の親友〜（前書き）

どうも、はじめまして。

ポンジュニアです。

今作品が初小説になります。

自作小説歴二週間弱の超初心者ですが、温かい目で見守ってください。

文章力がないのが最近の悩みです。

読みづらいかもしれませんが、よろしくお願いします。

第一話　いつもの俺と恐怖の親友

俺は普通の高校二年。

名前は…フツ名乗るほどでもないぞ。

……山空ヤマソラ 海デスカイ

第一話

「いつもの俺と恐怖の親友」

キュイイン

ゴ—

チュドン

謎の物体から赤い光線がでてきた。

「やべえ!!」

光線は俺の腹を直撃する。

「ぐあああ!!」

やべえ、死ん…だ…

……リリリ

……

ジリリリリリリ！！！

……あれっ？

「もしかして……夢か？」
夢だった。

「……まあそりゃそうだよな」

ふああ……

今日はいい天気だ………

「……って10時じゃねえか！」

実は今日、俺は親友の家に遊びに行く約束をしていた……9時に。

「しまった……完全に寝坊だ」

携帯をしてみる。

「やっぱメール来てる」

……しかし18件で。

ピッ

『お前今どこ？』

ピッ

『お前何やってるんだ？』

ピッ

『遅いぞ』

ピッ

『約束忘れてね?』

ピッ

『まだ寝てんのか?』

ピッ

『おーい』

ピッ

『お前どんだけ待たせんだ!』

「あいつ、すげえ怒ってんな」

あとで謝らなくては。

……しかし……あいつは電話と言つ言葉をしらんのか。

俺は着信履歴に電話がかかって
来ていないのを確認しながら呟いた。

寝坊してるので一応急ぎつつ面白いのでメールの続きを確認した。

ピッ

『貴様』

ピッ

『早く来い』

『……………』
ピッ

『……………』
ピッ

『……………』
ピッ

どうしたんだ？

『……………』
ピッ

……………
あれっ？

『……………』

ピッ
『……………』
ピッ

『貴様……………』
ピッ

おいおい、口が悪くなってるぞ。

『殺すぞ』

ピッ

「…………何なんだあいつは」

俺は無言電話ならぬ無言メールを見ながら、
お出かけ前の牛乳を口に含んだ直後だった。

ピッ

『呪ってやる』

ブホッ

不覚にも、

口に含んだ牛乳が俺の携帯にかかった
瞬間だった。

しかし何故それぐらいで？と思ったことだろう。

実はそのメールと一緒になんとも

リアルな口裂け女の画像が送られて来たのだ。

ケホッケホッ！

俺は少しむせながら慌てて牛乳まみれの無惨な携帯電話を拭いた。

「俺の携帯が……………」

クソッ覚えてやがれ！

寝坊した俺が悪いのだが、

そんなこと今はどうでもよかった。

一応

『俺の牛乳返せ』
とメールを送り、
家を出た。

ガチャ

「よし」

家を出て、鍵
をかけたことを確認し、

(ちなみに俺は一人暮らしだ)

自転車にまたがり、俺は全力で待ち合わせ場所にむかった。

……俺の天才的な自転車技術の才能が発揮されたのか、
運がよかったのか、普通なら20分弱かかる所を10分で着いた。

「よお！ 親友！」

「殺す」

いきなり危ない発言をしてきたこいつが、
俺の親友だ。

「どうしたんだよ、

おまえ、殺気が滲み出てるぞ」

「死ね」

死ねと来たよコイツ

「まあいいや、それより……」

「まあいいやだと！？ 貴様俺に言うことがあるんじゃないのか？」

「あ、そうだった」

危ない危ない、忘れるとこだったぜ。

「お前！ 俺の牛乳ときれいな携帯返せ」

「あ”ア”（怒）」

「寝坊してゴメンナサイ」

親友の豹変した顔に恐怖を覚え、素直に謝った。

第一話
完

第一話〜いつもの俺と恐怖の親友〜（後書き）

こんな作品を読んただきありがとうございます。

これからも頑張っていきますので、どうか見捨てないでください。

第二話〜空腹戦争〜

そついえば俺の親友の名前を話してなかったぜ。
俺としたことが。

第二話

〜空腹戦争〜

では改めて…こいつ（親友）の名前を紹介しよう。

こいつ（親友）の名前は

山空^{ヤマソラ}海^{カイ}

だ。

嘘だ。

山空海は俺の名前。

親友の本当の名前は

竹田^{タケタ}秋^{シユウ}

中学から一緒のいまじゃ親友。

そしてこれから親友の家にお邪魔しマース。

というわけで

「家まで案内してくれ」

そう、何故だか親友の家に一度も遊びに行ったことがなかったのだ。

「こっちだ」

3分ぐらいで着いた

全く、こんなに近いなら俺が寝坊した時家で待ってればよかったのに。

「さあ、あがれ」

「おう」

.....

ガチャ

「あゝ楽しかった、ただいま」

秋もとい親友の家の紹介は、あいつの

(さあ、あがれ)

のみだった。

…そうだ、夕飯作らなきゃハラペコだ。

秋もとい親友の家で食ってこいよ。

と思っているだろうが。

食って来なかったのだから仕方がない。
グリュユルル
空腹。

「飯だ飯だ」

パカッ

冷蔵庫を開けた。

………ボタン

よし、そのまま、落ち着け俺。

スウーハアー

スウーハアー

大きく深呼吸して、いざ！！

パカッ

………

「まじかよ」

冷蔵庫の中には牛乳しか無かった。

この俺に牛乳で何をしろと？

「しゃーない」

買い物に行くか。

って雨降ってる

…残念。

ハア―

テレビでも見ながら、

やむまで待つかあ

ピッ

《とても強い台風が近づいているので外出には注意しましょう。》

なにこれ…

何だよこの定番のお約束な感じ。

今そんなのいらねエ。

そーだ

ピポパピポパ

プルル…ガチャ

「もしもし」

「秋もとい親友よ！我に食料を持ってくるのだ！」

これでなんとか…

「アホか」

ガチャッ

プープープー

ちよつとふざけすぎたか…

ピポパピポパ

プルル

「もしもし」

「あの、大変申し訳ないのですが」

「どしたの」

「食べ物がない」

「買いに行けよ」

「察しろ」

「台風か」

「ああ」

「はい良い子のみんなー！考えてみよー！」

急に何だあいつは、もしかして……

「お前馬鹿だろ」

「俺が誰にで分かるように説明しようとしてるんだ。君が台風で出掛けられないなら俺も同じだよ」

「大丈夫。考えてある」

「何だよ」

「気合いで頑張れ」

「お前がな」

ガチャツ

プープープープー

俺は、あいつに心底ガツカリした。

やっぱ人に頼るのが間違이었다。

信じるのは己の肉体のみ。

……その頃のおれは気づいていなかった……

まさかあんな事になるなんて

バン

俺は勢いよくドアを開け、チャリにのり、雨ガツパ姿で走り出した。

5分後…

「へッ

大丈夫じゃねーか」

俺はスーパーの中に入って行った。

スーパー内食品売場にて……

空腹時は質より量……！！！！

シュバババ

目にも留まらぬ早さで

買い物カゴに色々詰めこむ俺……

「8340円です」

…

ちよつくら詰め込みすぎてしまったようだ。

「まあいいか」

とにかく腹が減っていたのであまり気にならなかった。

「帰って一人

パーティーだぜ」

《ありがとうございます。》

……どうしよう

「チャリのカゴに入りきらねー」

俺はつい買い過ぎたことにイラッとしたが、すぐに解決策を見つけた。

その作戦とは……

歩いて帰って晴れたらチャリも取りに来ると言つもの。

家近くてよかった。

(よく漫画とかだとどぶに落としたりするんだけど…)

俺はそんなにドジじゃない。

やっと空腹が満たせる喜びでスキップでかえった。

ガチャ

「疲れた」

まあいいや飯だ飯

………嘘だろ袋が破けてる………

絶望にたたき付けられた俺は半場やけくそで自転車取りに行くついでに探すことにした。

だが外は大雨で見つけることが出来たのは三つだけだった。
ガツカリしながら苦勞の末に見つけた、ふがし三本をひたすら食べていた。

もちろんそんなもので空腹が満たされるわけもなく

生死の境をさ迷いかけた時

俺は台所の上の棚の1番奥にある牛丼を見つけ、俺はそれにかぶりついた………

…と言ったような

そんなつまみ話があるわけもなく俺は深い眠りについた。

第二話 完

第三話 今世紀最大の災難

今日は俺の家で、

親友の秋と

遊ぶ約束をしていた。

第三話

今世紀最大の災難

ピンポーン

お、きたか。

！

そうだ。

「ちょっと脅かしてやるっ」

ニヤッ

俺はテーブルの上においてあった、
緑色した気持ち悪いモンスターの
おめんをかぶった。

ただ、

被ると前が見えなくなるのが問題だが……

ガチャ

「うおおお!!!!」

俺は手探りで玄関まで行き、
なるべく恐ろしい声とともに姿を表した。

「……………」

あれ？

声がしないな。

「お前、そんなに驚いたのか？」

シーーン…

「……………ビビりだなア。アハハ」

少しおかしいと思いつつも、

俺は笑いながらおめんをとった……………

……………

「どあっはははー!」

あー腹痛てー…

俺の話しを聞いて、大爆笑する親友。

「うるせーな！ そんなに笑わなくてもいいだろ！」

「そんな下らないことしようとしたから バチが当たったんだよ。
プッ
」

こいつ、まだ笑ってやがる。

俺は下らないことを思い付いたことを、とても後悔していた

.....

「.....ビビリだなア。ハハハ」
ガバッ

おめんをとった時に、
その異変に気付いた。

し・ん・ゆ・う・じゃ・な・い

そう、

そこにいたのは...

母の仕送りを持ってきてくれた、
配達のおじさんだった。

「あ……………」

「……………」

続く沈黙。

「……………えっと、その……………」

何かを喋らなきゃいけないと思いつつも、
上手く言葉が出ない。

この妙な沈黙の中、おじさんが言った。

「えと……………ココに名前をお願いします……………」

「……………ハイ」

スラスラ

紙に名前を書く。

「……………書けました」

「それでは」

ガチャ！ バタン！

おじさんがトラックに乗り込んだ。

ブロロロ・・・

おじさんが出発したと同時に、
親友の秋到着。

俺は

とりあえず親友を家にあげ、
階段を上がり、

丁度左側にある

俺の部屋へと案内
して、

さっきの出来事をはなし、

んでこーなる。

「プツ
」

「いつまで笑ってんだよ!!」

「そーだよ秋兄い……………」

「そうだ、お前も妹を見習え」

俺を庇ってくれたのは、

親友、
秋の妹の琴音。コトネ

歳は
13歳で

中学1年生。

容姿は

少し茶髪で、
サイドテール

服装も、
女の子らしさがよくでていると思う。

そしてあいつの妹には勿体ないほどに、
いい子だ。

琴音は、
とても兄が好きらしく、
昔から
親友と遊ぶ時に、

いつもついて来ていた。

でも 迷惑だと思ったこともなく、

どっちかというの大歓迎だ。

昔から3人でいるので
3人揃っては、
いまじゃ当たり前。

最初は

変な感じになつてもいたが、

今はそんなことはなく、

むしろ家族みたいな感じた。

……家族は言い過ぎか？

まあいいか。

「……………クスッ」

つて、コイツまだ笑ってやがる。

「秋、お前笑いすぎだ」

まったく……、どんだけ笑えば気が済むんだ。

「え？ もう俺笑ってねーぞ？」

「ん？ でもさっき……」

………
クスクスッ

「え？」

秋とは違つところから声が聞こえ、

俺は声のしたほうに目をむけた。

そこには………

「………クスクスッ」

琴音がいた。

いや、正確には………

琴音が”笑つて”いた。

「琴音………笑つてるのか？」

「わ、笑つてないです………クスッ」

否定こそしているが、

100%笑つていやがる。

……だがまで、
問題は何で笑っているかだ。

思い出し笑いかもしれないし、

くすぐられているのかもしれない。

俺の事を笑っていると決め付けるのは、まだ早い。

「くすぐられてるって、誰にだよ……」

「そんな的確なツツコミいらん」

……って、ちょっと待て。

あいつは超能力でも持っているのか？

俺は一言も……

「全部声に出てるぞ」

「マジかよ……」

これはいかん。

これからは気をつけなくては。

……と、そんなことより、

何で笑ってるのか聞かなければ。

俺が聞こうとしたとき……

「海兄い、何でそんな小学生見たいな事を……クスッ」

「やっぱりそれかあ……！」

さっきは庇ってクレタノ……

「ハッハッハ、まあいいじゃねえか（＾　＾）」

「よくねえよ……！」

秋には馬鹿にされ慣れてるが、

基本いい子の琴音にまで笑われたとなると、

恥ずかしさが10倍、いや100倍にも膨れ上がる！

まじかよ！

くそっ、穴があったら入りたい……

いや、いつそ殺せ……！！！！

「死ぬのはやめとけ」

「人の心の中を読むのはやめろ！……！」

「いや、おもいつきり喋ってたぞ」

「うん、喋ってた」

まじか！

くそっ、なんて軽いんだ俺の口は……！！

プライバシーのカケラもねえじゃねエか！

この口が憎い。

「もうお前と内緒話できねえな」

誰かこの口を取り替えてくれええ……！！

「そんな物好きな奴いないだろ」

「いちいちきいてんじゃねええ！……！」

「無理言つな」

……今日の教訓。

《軽はずみな行動は 災いを呼び込む》

《口には気をつけろ》
だった。

第三話 完

第四話 一家に一人、鬼女 (前書き)

第四話です。

この小説はギャグ小説です。

第四話 一家に一人、鬼女

目の前には鬼が居る。

でもそれは、人の皮を被った鬼だ。

普段は人に見えるので、誰も不審に思ったりしない。

でもそれはあるとき急に牙を剥く。

ほんの些細な事で牙を剥く。

ほら、またどこかで鬼が現れた。

また誰かが犠牲になった。

あなたが信用している人間は、
本当ににんげんか？

油断してると、鬼になる。

些細な事で鬼になる。

ほら、あなたの隣にも……………。

第四話

（一家に一人、鬼女）

ピンポーン

俺は、

親友の秋の家のインターホンを押した。

「どちら様ですかー？」

インターホンのスピーカーの所から、よく聞き慣れた親友の声が聞こえる。

「俺だよ。」

俺は、ごく平凡に答えた。

「……誰だ？」

「俺だよ、俺。」

インターホンのところに、
カメラがついているので、

わからない わけがない事から、わざと言っているのが伺える。

それを証拠に、スピーカー越しの親友の声が少々わざとらしい。

と言いつつ俺も、

その下らない遊びに付き合っているのだが……。

俺は、

ずっと「俺だ」で、通すことにした。

「どなたですかー？」

と、親友。

「だから俺だって。」
と、俺。

「俺と言われても……」

「俺だって言ってるだろ！！！！」

……いつまで続くんか……コレ？
予想以上につまらないな。

俺は、
長くなりそうなのでそろそろやめようと思った時、
親友も同じ事を
思ったらしく、
締め言葉の言葉を言ってきた。

「俺だ俺だって、オレオレ訪問詐欺か！！！！」

お！？ナイスツッコミ。
……ってか、オレオレ訪問詐欺って何だよ。

……オレオレ訪問詐欺がとても気になったのだが、
すぐに考えるのを止め、俺は素直に名前をつげた。

「俺だよ、俺。海だよ。」

「え？ 誰？」

「今、終わる絶好のタイミングだろ！？」

また長くなりそうなネタを振ってきた親友に、渾身のツッコミを入れた。

「ハハッ、ナイスツッコミ」

「早くドア開けてくれ。」

「了解」

ふう……。

まだ家にも上がってないのに、疲れちまったぜ。

そうそう。

秋の家は一軒家で、父、母、秋、コトネ琴音の4人家族。

だけど

父親は仕事で帰って来ないことが多いらしい。
そんなわけで、
実質家にいるのは、母、秋、琴音の3人と言っわけだ。

「俺ん家の紹介ごころうさん」

「お、いたのか」

いつの間にか、隣に親友がいた。

そして……

「俺、また喋ってた？」

「バツチリ」

自分では気づかない内に、考えてる事が口にでていいるらしい。

全く自覚がないのだが……。

「……っと、そんなことより、秋」

「なんだい」

「最後に、をつけるのやめろ」

ずっと気になってたんだ。

「なんでだい」

秋が物凄いキラキラした笑顔で、問い掛けてくる。

「何でって、そりやお前……」

なんでそんな事聞くんだけ？

分かりきっている事じゃないか。

そう、答えはただ一つしかない。

「キモいからに決まってるんだろ」

「えっ！？」

「てか、そんなことよりお前……って、オーイもしもしー？」

……あれ？ 反応がない。
なんか固まってしまったぞ？

何故だ？

わからん。

すっかり硬直してしまった親友。

……こころなしか、プルプルと震えているようにも見えるが……。

まあいいか。

俺は、ゴチャゴチャ考えるのは好きじゃないんだ。

楽にいこうぜ

やべっ、 がうつった。

ガチャ

「二人とも、朝から何騒いでるの？」

と、琴音が 玄関の黒いドアの隙間から顔をだし、俺達に注意してきた。

ちなみに、今は10時だ。

「お、オツス」

「オツスじゃないよ。早く家上がって」

「おう」

俺は、琴音に挨拶したあと、玄関に向かった。

そうそう。

俺は今日、秋と琴音と俺、三人でサイクリングをする為に来たのだ。

何故にサイクリングかと言うと、

昨日、俺が恥を晒したあと（第三話参照）

琴音が、夏休みの絵の宿題（何かの風景の絵を描くらしい）が出来ていないというので、サイクリングついでに 絵を描くのに良い場所を探そう。

という流れでこうなった。

まとめると、

『サイクリングついでに、

絵を描くのに良い場所を探そう大作戦』

……と言つわけだ。

しかし、我ながらひどいネーミングセンスだ。

悲しくなってきた。

そうそう、

言ってなかったが俺達は今、夏休み中なのだ。

なので、

学校はどうした！ とか、

なんで昼間家にいるの！ とか思ってた君達。

けして、サボっていたわけじゃないのだ。

えっへん。

とまあ、こんな感じだ。

長くなってしまったが、本編に戻るとしよつ。

「お邪魔しまーす。」

外で固まっている親友を放置し、俺は琴音に言われるがままにお邪魔した。

「先に、秋兄いの部屋に行つてて」

「わかった。ついでにおばさんにも挨拶して来るわ」

実はおばさん……

秋と琴音のお母さんに、昼に食べる弁当を作ってもらっている。

最初は、作ってもらうのは悪いなと思ったが、

秋によると、

なにかと世話をやくのが好きで、

弁当も好きで作っている所もあるみたいだから、

あまり気にしなくていいよ。らしい。

こういつ時に遠慮すると逆に失礼だと思い、感謝しながら、有り難くその好意にあまえることにした。

「えと、お母さん、台所にいると思うよ」

琴音がおばさんの場所を教えてくださいました。

俺は、「おう！」と返事をして、おばさんのいる台所に歩きはじめた。

「あと、お母さんのまえでおばさんって言わな……」

正直 その時は聞いてはいなかった……
……琴音が何か言っているが、

俺は、玄関から廊下へと進み、

突き当たりを左折し、

4、5歩進んで、

右手側にある部屋の前に着いた。

そここそが、台所だ。

俺はドアの左側にある、昔ながらの丸形のドアノブへと手を伸ばし、掴んで右に回しながらドアを前方へと押した。

すると、ドアノブを回した時に発する、ドア特有の『ガチャリ』という音と共に、ドアが開いた。

「あら、海ちゃん」

「あ、お邪魔してます。それと弁当、ありがとうございます。」

俺は 弁当を風呂敷につつんでくれているおばさんに、かるく頭を下げながら、お礼の言葉をつげた。

「気にしないでくれていいわよ。それより、はいこれ。」

おばさんは俺に、まだ作ったばかりの温かい弁当を差し出し、俺はそれを受け取った。

「そつだ、あと、怪我した時のために……」

「あ、絆創膏とかなら、俺持ってきてますよ」

弁当まで作ってくれたのに、そこまで色々してもらっちゃ、さすがに悪いからな。

「あら、そうなの、じゃあいいわ。」

優しいお母さんだなあ。羨ましいぞー！

「本当にありがとうございます。おばさん」

頭を下げ、部屋を出ようと後ろを向いた時だった。

「ねえ、今、何て言ったのかしら？」

「え？」

俺は、急に声のトーンが変わったことに驚き、おばさんの方を振り向いた。

……気のせいだろうか？

おばさんのまわりに黒くまがまがましいオーラが……

「今、何て言ったって聞いているのよ」

「あ、ありがとうございます……」

「そのあとね」

！？ そのあとと言った事は……まさか……

……おばね……。

……その時俺は、琴音が言っていた事が頭をよぎった。

(あと、おばさんのまえでおばさんって言わな……)

おばさんのまえでおばさんって言わな……

おばさんのまえでおばさんって……

まえでおばさんって……

おばさん……

……ああそうか。

そうだったんだ。

今思えば、琴音は必死で俺を守ろうと……

……悪い琴音。

これから何が起こるか分からないが、これだけは言える。

サイクリング……………いけなくて、ゴメンな……………。

「……」
あ
あ
あ
あ
あ
あ

おばさん、いやお母様の膝が、俺の みぞおちに綺麗に入る。

「っがは！！」

足の力が抜け、あまりの威力に息が出来ず、床にうずくまる俺。

「海ちゃんん。失礼な事を言う子は、お仕置きしなくちゃいけませんね。」

「ぐっ、っっ、っめっ」

俺はすぐに謝ろうとしたが、痛みと苦しみで声が出ない。

「出来れば、アタシもこんな事はしたくないのよ。海ちゃんが謝れば全て済むのに、謝らないんだもの」

「し、ごめっ、ゲホッ」

恐怖で涙目の俺。

痛みで悲鳴をあげている俺の体。

二つ合わさり、体のあちこちがガタガタと震え出す。

もう俺は、
心、体、共に限界だった。

しかし、麗しきお母様は、そんなにあまくはなかった。

「その体に、常識の二文字を叩き込んであげます!」

言い終わったとほぼ同時に、俺の頭に激痛が走り、段々と意識が薄れていく。

そして……

薄れゆく意識の中で、この俺が最後に見た物は……

熱っされて高温になっているであろう、俺の血が付いた、ゆげの出ているフライパンと……

それを持ってケタケタと笑っている………

クソババア
鬼の顔だった。

第四話 完

第四話 一家に一人、鬼女（後書き）

はい、まず小説を最後まで読んでくれた方々、ありがとうございました。

第四話は、今まで（一〜四話）で一番文字数が多くなったと思います、ってくらいいつかれたww

実際の所はわかりませんww

そして、今回、親友秋と琴音の母の回でした。
海と秋のからみを期待していた方々、すみませんでした。

次回

第五話もお楽しみに。

第4・5話〈ありがちなオチ〉

いつ、息が……、くるし、い

俺は意識を失った。

第4・5話

〈ありがちなオチ〉

あれ、ここは……？

気がつくと俺は、見覚えのないところに立っていた。

青い空。

白い雲。

空にかかった七色のきれいな虹。

「……どこだよ……」

まわりは、ビルやマンションといったようなものは、一切なかった。

建物どころか、人のいる気配すらない。

俺は何処へ来てしまったのだろうか？

遥か遠くに地平線が見えるほど、何もなく、そして広い。

だが、不思議とパニックになったり、おかしくなったりはしなかった。

なぜ冷静でいられるのか俺でもわからない。

そのとき、ふと、後ろから声が聞こえた気がして、後ろを見た。
だが、誰もいない。

……が、そこにはとてもきれいな花畑が広がり、蝶達がひらひらと、
花畑を散歩している。

ふと遠くを見ると、川らしきものが流れている。

俺は、急に水が飲みたくなり、川に向かうことにした。

……結構遠くのほうに見えたと思うのだが、なんかすぐ着いた。

しかも、川の向こうに、さっきまでなかった、とても大きいお城が
ある。

「どうなってんだよ、」

一応、疑問の言葉を述べたが、なんとなく気付いていた。

そう

きれいな花畑！

激流の川！！

妙にメルヘンチック！！！！

と言ったらここしかない。

「ここ……三途の川か……。」

それにしても、小さいころ想像してたのと瓜二つだな……ここ。

そっついう風にできてんのか？

つと、そんなことより。

俺、死ぬのか？

「だけど、渡らなきゃいいんだよな、たしか。」

こんなもん、渡らなきゃいいだけの話じゃねえか。

「っと、思うでしょ？ だけど、そんなに甘くはないんですよ。」

「っな!？」

声が出たとほぼ同時に、俺は後ろから突き飛ばされ、すぐく流れのはやい、三途の川に落ちた。

俺は、流されるがままに流されていく。

水を大量に飲んでしまいながらも、なんとか顔を出している状態だ。

「!？」

気がつくと、周りは川だけになっており、陸地がなかった。

くそっ、このままじゃ俺、本当に死んじゃまっぞ。

どっだけシビアなんだよ、三途の川って……

くそっ、なんかないのか？　なんか！

俺は、流されながら、おもむろに、左ポケットに手を突っ込んだ。

すると、手には確かに丸い何かの感触があり、俺は、その何かをポケットから出した。

……スーパーボールだった。

つかえねえー

……そんなことをしている間に、体力が底をつき、俺は川に沈んでいく……。

すぐに苦しくなり、だんだんと意識が遠くなっていく。

俺……死ぬのかぁ……

わが生涯に、一片の悔いなし……

「海ちゃん!!」

「海兄い!!!」

「うおっ!!」

気がつくと、俺は台所で倒れていて、心配そうに琴音とおば、っいやお母様が、俺の顔をのぞきこんでた。

「海兄い、大丈夫?」

琴音が心配そうな顔で、聞いてきた。

「……………たぶん大丈夫」

俺はゆっくりと起き上がり、答える。

「だいぶうなされてたわよ？」

「ちょっと、夢見てたみたいで……………」

よかった、おばさまの機嫌はなおってるみたいだ。

それはそうと……………変な夢だったなあ。

第4・5話(ありがちなオチ)(後書き)

どうもです。

ということ、まさかの悪夢オチというねw

じつは、サイクリングの回が、思い浮かばず、しばらく更新しない日が続きそうなので、

徹夜で、これを書き上げましたww

次は真正銘の、サイクリングの回なので、これは、それまでのつなぎ間隔でよろしく願います。

ささっと書いたので、あまり面白くできず、申し訳ないm() ()

m

84

第五話は只今執筆中。

《執筆完了。》

というわけで、

次回

第五話お楽しみに！

第五話く知らなかったぜ、コイツの特技く（前書き）

お待たせしました。第五話です^^

第五話 知らなかったぜ、コイツの特技

私は、竹田タケダ 琴音コトネ。

そろそろ夏休みも終わりに近づき、宿題が山のようになっちゃって、困る時期。

やるつやるつとは思っただけど、どうしても他の事に頭がいっちゃう。

でも今日は、絵の宿題を終わらせられる。

秋兄いと海兄い、皆で一緒にでかけるの。

そこで宿題を終わらせる。

一人でやったらだめだけど、皆でやったら楽しいもんね。

ああ、楽しみだなあ

第五話

知らなかったぜ、コイツの特技

「お母さん、いつてきまーす」

琴音がそう言いながら、玄関のドアを閉める。

……一応、予定より二時間遅れたが、無事サイクリングに行くことになった。

つまり、今は午後12時だ。

「じゃあ、行くか」

俺はそう言いながら、愛用の黒い自転車にまたがる。

「ちょっと待って」

と、琴音。

「どうした？なんか忘れものか？」

全く、そそっかしい奴め。

まあ、そこが琴音のいいところでもあるんだけどな？

「で、何忘れたんだ？」

「秋兄だよ」

そう言いながら琴音は、ショックのあまりフリーズしちゃっている

秋を指差した。

……………あ、そうだった。

あいつまだ固まったまんまじゃん（第四話参照）。

すっかり忘れてた。

「まったく、そそっかしいのはどっちよ」

「わりいわりい、てか、また俺喋ってたのかよ！」

「うん」

……………この癖、ホントマジなおんねえかなあ？

まあいいか。

とりあえず、秋を元に戻すか。

俺は秋のところまで行き、体を揺すってみた。

「おーい。秋ー。元気ですかー？」

俺がいくら体を揺すって、呼びかけても、全く微動だにしない。

コイツめんどくせえな。

それを見ていた琴音が、後ろから近づいてきた。

そして、秋の前に立ったかと思えば……

「痛っつてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

それは……、言うなれば、ドゴッ、が、一番相應しいだろうか。

そう、琴音は、秋の顔を思いっきり、グー、そうグーで……！
ーで殴ったのだ。

「な……、ナイスパンチ」

俺は、普段の琴音からは信じられない行動だったので、かなりおどろいた。

……そして、それを綺麗にくらった、当の本人はというと……、鼻を押さえながら、涙目でなんか騒いでいて、よく見ると鼻血が出ている。

これは痛い（笑

それはそうと、

「ちよつとやり過ぎじゃね？」

さすがに可哀そうだろ。

「って言いながら、顔がニヤけてるよ……海兄い」

琴音は、呆れたといわんばかりの顔で、そう言ってきた。

「えっ！ やっぱわかつちやう？」

いやあ、なんか恥ずいなあ、ハハハッ

だって、いい気味ですやん。

すると、秋が鬼のような形相で、怒りをあらわにしている。

「て”め”え”ら”、あとで殺す!!」

ハハハツ、そりゃ無理だ。

だって俺強いもん。

秋ごときに負ける訳が無いじゃないか。

「もう、バカやってないでいくよ!」

「へいへい」

「馬鹿っていった!! 今馬鹿って言った!! 元はと言えばお前が……」

「はいはい、いいからいくよ!」

バカと言われて、暴れまわっている秋を、琴音が軽くあしらう。

さすが兄妹だ、年季が違う。

兄の扱いに慣れてやがる。

とはいえ秋、そんな泣きながら、反論しなくても。

俺たちは、いい加減サイクリングに行きたいので、暴れる秋を無理やり自転車に乗せ、出発した。

……そして結局、琴音の厳しい兄のしつけに関して、なぜグ
でなくったのが、分からなかった。

琴音、パネエな。

とりあえず出発した俺たちは、道が分かれるたび、じゃんけんで
決めて進んでいった。

そして3時間後……

「ここ、どこだよ!？」

そう、俺たちは完全に、道に迷っていた。

誰だよ!？ じゃんけんで進もうとかいった奴!!

「てめえだよ!!!」

「そ、そうだったっけか？ ちょっと記憶が……」

秋が言ったんじゃないか？

「ふざけんな!!」

ちよっ、そんなにキレることないだろ。

ちよっとした冗談じゃないか。

謝ればいいんだろ？

謝るよ。

謝りますとも。

「本当ごめんなさい、てへっ」

「死にたいか……?」

「すすすす、すみませんでしたあ!!!!」

俺は全力で謝った。

いや、全力で誤った。

……なにやら、すごい形相で、俺を睨みつけている秋とは対照的に、

琴音は、なんか冷めた目で俺を見ている。

琴音までなんだよ！　じゃんけんで行こうって言ったのは俺だが、

お前らだつてノリノリだったじゃねーか！

変な逆恨みはよせよ！！

そして琴音！！

そんな目で……………

「そんな目で俺を見りゆなあああ！！！」

……………べっ、別に噛んだわけじゃないんだからねっ！！！！

「……………海兄い、くだらない事してないで、帰り道探そうよ」

同情したような顔をしている琴音を見て、俺は全力で悲しくなった。

「……………そうだな」

でもそんな簡単に帰れるのか？

ジャングルみたいなことになってんぞ？ 二こじ。

周りは木だけ、家一つない。

そもそも、俺たちが通ってきた所も、もはや道かどうかすら怪しい。自慢じゃないが、ここまで遠出したのは、今回が初めてだ。

そして一番イカンのが、みんな、携帯を持ってきていないことだった。

秋の家にかければ、場所ぐらいわかりそうなのに……。

「適当に進めば、知ってる道に出るんじゃないかね？」

俺が悩んでいると、秋が提案してきた。

「それもそうだな」

あいつも、たまにはまともなこと言っじゃないか。少し見直したぜ。

「そうときまれば、急ごうよ、秋兄い」

「じゃあこの、秋さまについてこい……！」

「おー」

ところで、とーっても大事なことを忘れてる気がする……。

……気のせいかな？

「海兄いー！ おいてっちやうよーいー！」

「わりい、今行くー！」

すでに遠くにいる秋達を追いかけ、勢いよく漕ぎ出していく、俺。

そしてまた、3時間後……

俺たちはまた、迷っていた。

「あるええ？ おかしいなあ？」

「おかしいなあ？ じゃねえだろー！！！」

くそ、すっかり忘れてたぜ、秋は極度の方向音痴だったんだ！！！！

俺としたことがあー！！！！

てか、ここどこだよー？

さつきよりもジャングルじゃねえかよお〜。

それもこれも全てアイツのせいだ。

その一方で、秋は、なぜ迷ったのかが分からない様子。

神様。

俺に一度だけ、あいつを殴らせてください。

『いいでしよっ』

俺はそう聞こえた気がした。

さて、神様の許しを得たところで、

「秋!!! 歯をくいしばれええ!!!」

俺はカッコよく自転車から飛び降り、右のこぶしを振り上げ、謎の奇声とともに秋に殴りかかった。

「ぐふおお!!!」

そしてみごとに、俺の拳が、秋の左頬に直撃する。

綺麗に円を描いて飛んでいく、親友の秋。

3mぐらい吹っ飛び、木に後頭部を強打。

そのあと動かなくなった。

人って結構飛ぶもんだなあ。

勉強になったぜ。

「おい、秋クーン？ 生きてるー？」

俺は一応聞いてみた。

「ゲフツ」

と、秋の音がする。

よし、元気だ。

「どう見ても元気じゃねーだろ！？ 重症だよ！？ あんたおかし
いよー！？」

秋は、それだけを言い終えると、またご臨終した。

それにしても素晴らしいシッコミニ根性。

身を削ってまで、ツッコむとは……。

てか、やっぱり元気じゃん。

「できた！」

突然琴音の声が聞こえ、気になって琴音のほうに目を移した。

琴音は、手に持っているスケッチブックを上に掲げ、満足そうに微笑んでいる。

どうやら、絵の宿題をしていたようだ。

「ちょっと見せてくれよ」

俺は、このジャングルをどのように絵にしたのかが気になり、見せてもらうことにした。

「いいよ」

琴音は、素直に見せてくれた。

俺は、琴音の差し出したスケッチブックを覗き込んだ。

そこに書かれていたのは、殴っている俺と、殴られている秋の姿だった。

そして何より、メチャクチャうまい。

「私、絵は得意なんだー」

へー。

俺、コイツにそんな特技があるなんて、知らなかったよ。

琴音によると、小学生のころに毎年金賞をもらっていたらしい。

もちろん絵のコンクールで。

つて、ちょっと待て、その絵を描いたと言う事は……

「お前……自分の兄貴が殴られているのを、ずっと見てたと言う事だよな？」

俺は、自分の中で芽生えた疑問を、琴音にぶつける。

「そうだけど、何で？」

なんでっってお前、目の前で兄貴がボコボコにされてたら……

「普通、助けね？」

平気で見えたとしたら、俺が信頼されてるか、秋なんかどうでもイって事じゃん。

「秋兄いは、体が丈夫だから」

なるほど。

あいつの体の丈夫さを信頼いしてたんだな。

納得だ。

「てか琴音」

「ん？」

「その絵、宿題の課題と違うじゃん」

確か課題は、『風景』だったはずだ。

「あ、それは大丈夫」

「なんでさ？」

ま、どうせ、私にとっての風景はこれ、とか何とか言っまわっている。

昔っからそうだからな。

俺はまた、変な理由をくつつけて、これを提出するんだろうと思いき、軽い気持ちで理由を聞いた。

だがしかし、琴音の答えは、違った。

「もう一枚書いてあるよ」

そう言って琴音は、スケッチブックのページを一枚めくった。

そのページに書いてあったのは、正真正銘のここ（ジャングル）の絵だった。

って事はあれか？ 俺が秋を殴っていたあの短時間で、その写真を撮ったかのように、

葉っぱ一枚一枚がハッキリしている絵と、

秋が殴られる瞬間の絵を描き上げたということか！？

たしか、4分ぐらいしか経っていなかったはずだ。

ほかの時間は、ずっと自転車乗ってたから書けるわけないし、絵がこの場所だし、ほかに考えられない。

「琴音……………お前すげえな」

俺は素直にすげえと思った。

だが琴音は……………

「何が？」

こんなの普通でしょ？

何がすごいのか？

という、顔でこっちを見ている。

しかも、心の底から
そう思っているらしく、

心に揺らぎが無い。

俺は改めて思った。

琴音、マジパネエ

第五話 完

第五話〜知らなかったぜ、コイツの特技〜（後書き）

どうもー。

まず最初に、ご愛読ありがとうございました。

今回は、新キャラを出す予定でしたが、なんか脱線w w

なので、新キャラはまた次回！という事なんですけれども。

そして、琴音に特徴がねえなあと、思い始めたのがきっかけで、
琴音にいろいろ吹き込みましたw w

それでこんな感じにw w

琴音も、やっぱりあのお母様の娘という事ですねw w

そして琴音の、絵の早さと精密さ！が今回の話になるわけですし、
ええw w

俺（作者）が絵が苦手なのでねw 懂れです。

そして秋。

今話も最後のほうはセリフが無いというねw w

なぜあんな感じになってしまっただろう。

っと、長くなっちゃいましたので今日はこの辺で。

次回

第六話をお楽しみに！！

第六話、いきなり目の前に謎に少女が現れた。君ならどうする？ 俺なら……

はいどうもー。待望の第六話です。

そうそう、今回は新キャラ登場！！

第六話　いきなり目の前に謎に少女が現れた。君ならどうする？　俺なら……

「……………ここはどこなんヨ？」

いきなり目の前に現れた少女。

尻もちをつき、頭に？マークを浮かべながら、周りを見回すようにキョロキョロしている。

そして、琴音、廃人（秋）、俺と、順番に見まわす。

そしてその視線は、俺で止まる。

「あなた達は誰なんヨ？」

少女は俺を見つめ、問いかける。

ハハハッ、お前こそ誰だよ。

第六話

いきなり目の前に謎に少女が現れた。君ならどうする？　俺なら……………

琴音のすごい特技が分かってから、30分がたった。

秋が起きないので動けないでいた（第五話参照）。

今は、午後6時30分。

あたりはうす暗くなってきて、このままここにいるのは危険だ。

すこし、力を入れ過ぎたようで、秋は何をしても反応が無い。

水筒の水をかけたり、口におにぎりを詰め込んだり。

ちなみに、弁当は可憐なるお母様のお弁当だ。

秋が起きないから、琴音と二人で完食したかな。

この辺りは外灯もない分、暗くなるのが早い。

今もかなり暗い。

俺は、そろそろ帰るのが辛くなりそうなので、秋のたたき起しにかかった。

「起きろ！起きないと蹴るぞー！」

反応はない。

「琴音も手伝ってくれ」

俺は、ひたすら絵を描いている琴音を呼んだ。

「なーにー？」

そう言っつて、俺の所に走ってくる。

「コイツ、起こすの手伝ってくれ」

「しょーがないなあ、秋兄い！ おきろー！」

「本格的に帰れなくなるぞー」

俺は、琴音と一緒に、蹴りながら呼びかける。

でも起きない。

っつてか、琴音、お前まで蹴って起こさなくてもいいのに。

実は、兄貴に恨みでもあるのか？

俺は、まるでゴミを蹴っているかのような琴音を見て、秋が可哀そうに思えた。

「フーか起きねえなあ、コイツ。」

いつまで気絶してんだよ、だらしねえな。

もうコイツ、フリーズ君でいいよ。

「おい。フリーズくん、起きろー」

どうだ、コイツのツッコミ根性はこの言葉を無視できるのかね。

「フリーズ君って誰だよ！！！」

秋が、飛び起きながらツッコんできた。

ほらね。

でもここまで来ると感心するわ。

俺は、秋のすさまじいツッコミ精神に、素直に感心した。

「ずっと起きないから心配したよ」

と、琴音が言った。

……よく言うよ、さっきまで蹴っ飛ばしてたくせに。

琴音の意外な一面を見て、俺は心の中で秋を慰めた。

「てか、ほんとに帰らなきゃまずいぞ」

秋を起こしているうちに、あたりはすっかり闇と化した。

今何時だよ。

そう思って、俺は時計を見る。

だがもちろん、暗くて見えない。

灯りがあるのとないのじゃ、えらい違いだ。

いつの何げなく使っている電気や懐中電灯。

今はそれが、どんなにありがたい物かを実感していた。

「とりあえず、帰ろうよ、なんか怖いし」

声がとても震えている。

「情けないよ、秋兄い」

子供みたいに怖がる秋に、琴音が呆れながら言った。

そう、怖がっているのは琴音ではない。

高校生の秋だ。

「怖えもんは怖えんだよ!!!」

……震えた声で逆切れされても……ねえ？

情けない情けない。

琴音だったら、暗くて怯えていても可愛いのだが……

コイツはウザいだけだ。

「そんなことより帰ろうよおお」

と、秋が言った。

どんだけ怯えてんだよ。

「まあそれもそーだな」

帰り道が分からないけどな。

「とりあえず、明るいところまで行こうよ」

と、琴音。

「そうだな」

俺がそう言つと、みんな、それぞれ自分の自転車に乗った。

だがしかし、俺の自転車が見当たらない。

色が黒だから余計だ。

とりあえず俺は、適当に歩き、自転車を探した。

すると、足に何かが当たり、俺はそれを確認した。

「お、あつたあつた」

それは、俺の自転車だった。

倒れていたのか………どつりで分からないはずだ。

俺は自転車を立て、乗った。

「じゃあいこーぜ」

俺たちは道も分からぬまま進んでいく。

頼りは自転車のライトだけ。

だがしかし、いくら進んでも、家どころか灯りすら見えない。

………もしかして、やばくね？

そう思いながら、ふと前を見ると、

琴音の自転車が、何かおかしい。

どうやらでかい何かを踏んで、

バランスを崩しているみたいだ。

「あぶねえ！？」

俺が叫んだとほぼ同時に、琴音の乗っている自転車が、激しく倒れる。

倒れたと同時に、琴音が投げ出される。

大丈夫かよ！？

俺はすぐに琴音の元に駆け寄る。

「大丈夫か！？ 琴音！」

「足、挫いちゃったみたい……………うっ！」

木にもたれかかり、足首を押さえている琴音。

とても自転車をこげる状態ではない。

おいおい、まじかよ。

そつだ、とりあえず冷やさないと!!

「秋！ 俺のリュックから、タオルと水筒出してくれ!!」

俺は、琴音の隣で、うろたえている秋に言った。

「分かった！」

秋は、言われた通りに、タオルと水筒を持ってきた。

俺は、秋からそれらを預かり、タオルに水筒の水をかけた。

水筒に氷を大量に入れてきてよかったぜ。

まだ水が冷たい。

「琴音、足貸してみろ」

これで冷やせば、少しは楽になるはずだ。

もしかして……………天然か？

「うるさい、早く見せる」

「わかったよ」

やっと足をこっちに出す。

「あ、こっちの足だった。」

ハハハツ、アホか。

さんざんポケまくった後、琴音がやっと、怪我したほうの足を出す。

俺は、白と水色のシンプルな靴と、

靴に合わせたと思われる、水色に白のハート模様の靴下を脱がせた。

足首が、紫色にはれていて、見るからに痛そう。

よくこの状態で、あんなにポケられたもんだな。

ポケの神様もビックリだ。

ちなみに俺も、ビックリだ。

ついでに読者もビックリか？

まあ、いいか。

ちなみに、秋には、自転車のライトで、照らしてもらっている。

だから、一応役には立っている………はずだ。

俺は、腫れている足首に、タオルを巻きつけた。

以外に、琴音は平気そうな顔をしている。

「痛くないのか？」

俺は、少し気になり聞いてみた。

「痛くないわけではない」

あ、さいですか。

意外と我慢強いのか？

「とりあえず、ここで休んどけ」

俺は、そう琴音に告げると、立ち上がり、あたりを見回した。

「ん？ 海兄い、どしたの？」

「いや、近くに人いねえかなあ？ と思って」

琴音、自転車こげなそうだからな。

道わからんし。

「秋兄がいるよ」

「そいつイラネ」

「えー！？ 今なんかひどいこと言われたような気が！？」

「ああ、言った」

「ええー？ ここは言っていないって言うところでしょ？ そんなハッキリ言わなくてもいいじゃ…」

「ゴチャゴチャうるさいよ、秋兄い！」

「え”っ！」

お！ 琴音も言うつようになっただな。

あまりの嬉しさに、兄貴石化しちゃってるよ。

「オレハモウツツコマナイ……………ココロガオレタ……………」

お？ 石像が泣いてるぞ？

珍しい事もあるもんだ。

「とりあえず、その辺見てくるわ」

もしかしたら、誰がいるかも。

自転車のライトでこの場所も分かるし。

「いつてらっしゃーい」

『おう！』、俺はそう言って、走り出した。

琴音たちの姿も見えなくなり、目印が自転車のライトだけになった時、俺は気付いた。

自分の自転車乗ってくるべきだった。

真っ暗や。

何も見えないよ。

俺は、自転車を取りに戻ることにした。

だって暗いんですもん。

戻ろうと後ろを向いたとき、横目にちらっと、光るものが見えた。

俺はただ、何も考えずにその場所へ行き、それを拾った。

なんだ？ これ、ペンダントか？

それには紐が付いていて、真ん中あたりに、石みたいのが付いている。

でも暗くてよくわからん。

俺は、ペンダントのようなものを左ポケットにねじ込み、琴音達の所へ走って戻った。

「琴音ー、今帰ったぞー…ん？」

琴音を見ると、少し様子がおかしい

「海兄いいい、おそいよおー」

「うお、どうした、何で泣いてる」

珍しく、琴音が泣いていた。

いや、おびえていた。

「ど、どうした？」

俺は、少し心配になり、聞いてみた。

「うえーん、海兄いい」

俺は、琴音に近づいて、頭を撫でてやった。

「よしよし……ん？ おいどうしたんだよ！？」

琴音に触れてみて分かった。

すくく震えている。

これはただ事じゃないぞ。

あの琴音が、こんなにおびえるなんて……

俺がない間に何が……。

「琴音！！何があった!?!」

俺はバカだ……動けない琴音を放置していくなんて……

すると琴音は、プルプルと震えながら、自転車のほうを指差した。

正確には、自転車のライト。

……もしかして……

「む、虫がっ！ むし、虫がっ……コホッコホッ」

むせる琴音。

「はぁ?」

俺は一気に気が抜けて、思わずだらし無い声を出してしまった。

そーいえば琴音、虫大嫌いだったなあ……。

こんな真っ暗な森で、ライト付けると、そりゃー虫くるわな。

しかし、不幸中の幸い。

琴音が怪我してなかったら、パニックになって、どっか行っちゃまうところだったぜ。

あぶねー。

俺は琴音の隣に置いてあったリュックから、虫よけスプレーを出し、虫のたまり場に噴射する。

すると、虫たちが一気にいなくなった。

「すごい効き目だ、ハイパーウルトラEX!」

ちなみに、ハイパーウルトラEXは、この虫よけスプレーの名前だ。

この前、かつちよいいので、購入しました。

「ほら琴音、もういなくなったぞ」

「……グスツ、ありがとう」

うん、今日もカワイイ!!

って、今何時だよ。

俺は、腕時計を確認する。

「ゲッ！7時30分かよ」

これはいかん。

『チヂミさん』を見逃した。

楽しみにしてたのに。

日曜の夜はこれ見なきゃ始まらないのに！！

まあ、忘れてたけど。

録画もしたし。

「大丈夫か琴音？」

「うん、もう大丈夫！」

すっかり元気になった琴音を見て、安心した。

「あ、」

ふと、ポケットに入れた、あれの事を思い出し、ポケットから出してみた。

そしてそれは、ペンダントではなく、勾玉だった。

緑色の綺麗な勾玉、でも少し汚れている。

俺は、汚れが気になり、今着ている服で、勾玉を擦った。

すると突然、勾玉が光りだし、空へと飛んで行った。

「えっと……………何これ？」

「勾玉が飛んでったよ」

「ビックリダゼ」

あ……………

「秋、いたんだ」

「秋兄い、いたんだ」

俺と琴音は、仲良くハモった。

「なん……………だと……………？」

見る見るうちに真っ白になり、秋が石像から廃人に進化を遂げた。

ハハッ、フリーズ君復活だ

そんなことをやっていたら、突然琴音が、

「何……………アレ？」

と、空を指差しながらいった。

俺は指の差している方向を見た。

すると、

「あれ……………人じゃね？」

そう、空から人が降ってきていたのだ。

「えっ！？ うそ！？ こっち来るよ！！！」

「ちょ、マジかよ、ありえねーだろ！」

何がおきてんだよ！

空から人！？

なんだよこれ。

いったん水飲んで落ち着こう。

俺は水筒を手に取り、水を飲む。

「私も飲むー」

琴音が、自分のリュックから水筒を取り出し、飲む。

「はあゝ、うまい」

俺たちは、綺麗にハモリながら、落ち着いた。

すると突然。

ドッガン

と、目の前に何かが降ってきた。

たぶんさっきの人だろう。

砂煙でよく見えない。

だんだん砂煙が無くなり、緑色の服を着た、幼い背中がつつすらと見える。

そして、声がする。

「アレレ?」

てか、生きてんの!?
コイツは驚いた。

「……………」
「………」

いきなり目の前に現れた少女。

尻もちをつき、頭に?マークを浮かべながら、周りを見回すように
キョロキョロしている。

そして、琴音、廃人(秋)、俺と、順番に見まわす。

そしてその視線は、俺で止まる。

「あなた達は誰なんヨ?」

少女は俺を見つめ、問いかける。

ハハハッ、お前こそ誰だよ。

第六話
完

第六話〜いきなり目の前に謎に少女が現れた。君ならどうする？ 俺なら……

どうもです(^ - ^)

まずは、しつこく愛読ありがとうございます。

いやあ、今回新キャラという事でね、まさかのファンタジー出現。

非日常にもほどがあるー!!というシツコミはありますww

そして今回も琴音の回ww

皆さんも琴音の事が分かってきたのでは？

そして、秋いやフリーズ君は今回も無言というねww

なんでこーなるんでしょうか？

まあいいか。

そして海君、今回もいい活躍を見せてくれたのではないのでしょうか？

そして、新キャラ！

いまだ謎に包まれている新キャラですが、語尾に特徴あり！ですね

ww

というわけで、次回をお楽しみに！！

第七話　宇宙から来た、凄い奴？（前書き）

どうもー。

皆さんお待ちかねの第七話です。

いやぁ疲れたあー

第七話　宇宙から来た、凄い奴？

突然だが、前回のあらすじでも話すとしてよう。

サイクリングに行くことになった、コトネ琴音、シユウ秋、そしてこの俺、カイ海。

俺たち3人は、迷子になってしまった。

周りは真っ暗。

家どころか、灯りもない。

そんな中、緑色の勾玉を拾った。

勾玉を擦った。

光った。

空に飛んだ。

人が降ってきた、という状況なわけで。

第七話

宇宙から来た、凄い奴？

空から降ってきた謎の少女。

丈が膝までの、緑色のワンピースを着ている。

年齢は、見た感じ6、7歳といったところか。

ピエロみたいな、先の尖っている緑色の靴。

サンタみみたいな緑色の手袋。

そして、これまたサンタみみたいな、緑色の帽子。

肩まである、ウェーブのかかった金色の髪。

宝石のようにきらきらしている、エメラルドグリーンの瞳。

ハッキリ言って美少女だ。

俺は少し見惚れてしまった。

そしてその少女の首には、あの勾玉がかかっている。

そんな少女が、俺に問いかけてくる。

「あなた達、誰なんヨ？」

ハハハツ、お前こそ誰だよ。

「ウチは、エメリイーヌ・ジョセフなんヨ」

へー。

外人？

でも、日本語ペラペラだしなあ？

てか、ジョセフって。

しゃれた店でワインでも飲んでそうな名前だな。

名前から想像しても、渋いおじ様の顔しか浮かんでこないよ。

……ちなみに、琴音は隣で立ち尽くしている。

俗に言う、ポカーンってやつだ。

そんな琴音を横目に、俺はとりあえず一番最初の疑問をぶつける。

「お前は何者？」

空から降ってくるなんておかしいからな。

すると少女、エメリイヌ・ジョセフが答える。

「知らない人に、個人情報はお教えられないんヨ」

なるほど、できた子だ。

だがしかし、この展開でそれはないだろう。

「人に聞くときは、まず自分からなんヨ」

何だこの子……妙に常識人じゃないか。

でも確かに、いきなり質問攻めはひどいよな。

「悪かったな、俺は海。山空 海だ」

俺は、エメリイヌ・ジョセフに名前を告げた。

「なるほどなんヨ、はじめましてなんヨ」

エメリイヌ・ジョセフはゆっくりと立ち上がり、ペコリと頭を下げてくる。

なかなか礼儀正しいじゃないか。

「あ、私は竹田 琴音だよ。よろしくね、エメリイちゃん」

隣でポカーンとしていた琴音が、いつの間にもやら正気に戻っていた。

てか、エメリイって………親しくもないのにあだ名で呼ぶなよ。

「よろしくなんヨ、コトネ。」

お前もスルーか！

しかも呼び捨てって………ああ、もういいわ。

「あ、ちなみに俺は、竹田 しゅ『フリーズ君だ。』」

俺はかぶせるように言い放った。

「よろしくなんヨ。竹田フリーズ。」

真顔で返す、エメリィヌ・ジョセフ。

「誰だよ！竹田フリーズって！？竹田さんの必殺技かよ！？」

くらえ！！すべての竹田を凍らす！竹田フリーズ！！！！

てな感じか？

強いのか弱いのか分からない技だな、おい。

「だから俺は！フリーズじゃなくて、しゅ『ブリーフ君だ』」

秋が必死にいい直している所を、また俺がかぶせる。

「竹田ブリーフ。」

これまた真顔の、エメリィヌ・ジョセフ。

「ブリーフじゃねええええ！！！！！！」

「え？ お前トランクス派？」

「そーゆー意味じゃねえよ！！！！」

ゼエゼエと、息を切らしている秋。

ツッコミも大変だな。

そんな中、エメリーヌ・ジョセフが言った。

「竹田フリーズブリーフ。話を進めたいんだけど、いいんヨ？」

竹田フリーズブリーフって、どこのサーカス団だよ！！

意味分らんわ。

って、秋のツッコミがねえな。

どうしたんだ？

俺は、絶対ツッコむはずの秋が何も言わないので、何事かと思い、秋のほうを見た。

すると……………？

「フツ、俺はもう…………ツッコむのをやめたんだ……………」

という、意味不明な決心をしていた。

心なしか、キラキラしている。

秋よ。

お前からツッコミをとったら、何が残ると言うんだ。

『無言の達人、フリーズ君』の称号しか残らないだろ。

本気で空気になりたいのかこいつは？

まあ、俺は大歓迎だけだな？

「とりあえず、話を続けんヨ？」

と、ジョセフ。

「ああ」

なんか、メチャメチャ馴染んでるけど、謎だからな。

このジョセフ。

「まずウチ達は、宇宙のその辺にあるコックアカラ星に住む、コック
星人なんヨ」

それはまた、何ともシュワシュワしてそうな星だな。

つーかコツカ星人って、国家になんかしてそうな一族だな。

しかも、宇宙人ときたもんだ。

薄々は気付いていたけど。

「お〜しまい〜 なんヨ〜」

ちよ、急に歌いだしちゃったよコイツ。

お前の中で何があつたんだ!!

どういう心変わりだよ!!

しかも終わるの早いな!!

「お〜しまい〜 ですよ〜」

琴音まで歌い始めやがった!

「お〜しまい〜 なんだぜ〜」

え!?! ちよ!! 何が起きた!!

秋まで歌いだし、謎の不信感をいただく俺。

くそっ、これはあいつの力なのか!?

それとも、最近の流行りなのか!?

流行りだとしたらまずい!

流行に乗り遅れてしまう。

流行に定評のある俺としては、とりあえず歌うしかない!!

「おし〜ま〜い〜 だ〜ぜえ〜」

俺は、満面の笑みで歌った。

「」「」.....「」「」

フッフッ、どうした?

皆の前で披露するのは、たしかこれが初めてだったはずだ。

俺が歌いだしたとたん、皆は驚きを隠せない様子。

「どうした！俺の歌唱力に驚いたか？」

まあ無理もない。

さすがの宇宙人も、驚きを隠せない程なんだからな。

「か、かいにいのうたもなかなかうまいね、えへへへ」

そうだろうそうだろう。

だが、なぜに苦笑い？

「た、たしかにな、あははは」

さすがの秋も、認めたようだな。

俺の歌の上手さを！！

「なんとというか、こせいでき、なんヨ」

宇宙人までもが認める始末。

ま、分からなくもないけどな？

皆が俺のうたを、口ぐちにほめだす。

いやあ、オフアーが来たらどうしようかなあ？

って、ん？

どうしたお前ら、そんな悲しい顔して？

みんなが、痛い人を見るときのような目で、俺を見ている。

「何だお前ら？ 俺があまりにも歌がうまいからって、嫉妬するなよ」

お前らだって、頑張れば俺みたいになれる。

努力だ。

汗だ。

結晶だ。

「気付けよ！！　どんな頑張ったって、お前ほどヘタクソに歌えねえよ！！」

秋が痺れを切らしたように、怒鳴ってきた。

「何だよそれ！！　その言いかたじゃまるで……………」

そう。

それじゃまるで……………。

「未来から来た、こけし型サムライ、コケ新左工門。

通称、コケえもんに出てくる、

ジョイアンのような歌だと言われているみたいじゃないか！！！」

たしか金曜にやっていたな、このドラマ。

そう、これはアニメではなく、れっきとした時代劇ものだ。

たしかコケ新左工門がポケットからこけしを出し、

そのこけしで世を促す悪人どもを、懲らしめていく。という感じだった気がする。

……………よく間違える人がいるのだが、

コケ新左工門の略称は、コケえもんであって、コケモンではない。

そして、その中に毎回必ず出てくる悪人、ジョイアンはかなり音痴だ。

「みたいじゃねえ!! そうなんだよ!!」

「うそだろ!？」

この俺が、音痴だと!？

そんなことあるわけない。

現に、皆褒めてたじゃないか!!

そつだ、琴音は!？ 琴音も絶賛してたはずだ。

「琴音、俺の歌、上手かったろ？ 神だったろ？」

俺は、琴音に聞いた。

「た、確かに、誰にでも歌えない歌と言うか、何というか……、神と言うより、紙……かな……?」

「ほら見る! 最高だったって言ってるじゃねえか!!」

「お前どんな耳してんだよ!？ 思いつきり、馬鹿にされてたじゃ

ねえかよー!!」

……まったく。

秋には理解できないんだよ。

よく言うじゃねえか。真の芸術は、理解されにくいつてな!

「芸術じゃなくて、お前の耳のほうを理解できんわ!! どんだけポジティブ思考なんだよ!!」

秋がなんかゴチャゴチャ言ってる。

こんないい歌を理解できないなんて。

人生の97%は損してる。

可哀そうに……。

「なんで……、なんで俺がそんな悲しい顔されなきゃ、いけないんだよおおおー!!」

秋が、頭を抱えながら、吠え続けている。

非常にうるさい。

ほか二人も、なんかめっちゃ苦笑いだ。

……もう話題変えよう。

とにかく今は、歌よりジョセフだ。

「ジョセフってさ。宇宙人……なんだろ？」

なんか、メチャクチャ引いてるジョセフに、俺は話しかけた。

「ジョセフなんて、渋いおじ様ツポイ名前で呼ばないで。レディーに対して失礼なんヨ」

あ、一応気にしてたのか。

「じゃあなんて呼べばいいんだ？」

ジョセフが一番しっくりくるのだが……。

「好きに呼んでいいんヨ」

「わかったよ。ジョセフ。」

「それ以外に決まっているんヨ!!」

うおっ、コイツキレると怖いな。

ジョセフは、ゴゴゴゴのような威圧感で、怒っている。

好きに呼べって言ったクセに。

「じゃあ、エメリーヌでいいか？」

「それならいいんヨ」

エメリーヌは、どうやら機嫌を直したようだ。

「では改めて聞くが、ジョセフィーヌ……お前宇宙人だよな？」

「そうなんヨ。……って、ジョセフィーヌ誰なんヨ!? どっかの貴族の愛犬なんヨか!？」

……………あ。

「やべ、間違えた」

名前が混ざっちゃったぜ。

ジヨセフィーヌなんてかつちょいい奴、日本にはいねえーよな、ハハッ。

「かつちょいい!? ウチは貴様の頭を疑うんヨ!!!」

ちよ、そこまで言わなくてもいいだろ。

っーかコイツ、ノリが秋に似てて、なんかヤダな。

「こんな奴と一緒にするなんヨ!!!」

エメリーヌが、秋を指差しながら言った。

「何だよこの流れ弾は!? 俺、何も悪い事してねえよ!?」

思わぬところで、自分を馬鹿にされた秋が、顔を真っ赤にしながら反論している。

いいコンビだよ。お前ら。

そのとき俺は、何気なく、腕に付けている、デジタル時計を見た。

「おいっ！ もう8時半じゃねえか！！」

こんな奴と、1時間も立ち話しちまった。

「うそお！？ やばいじゃん！！！」

「帰る方法考えてなかつた！！！」

俺の言葉に反応するように、琴音、秋と続けて焦り始める。

どうすんだよ。

帰り道が分かったとしても、今から帰ったんじゃ深夜になる。

琴音も動けねえし……………。

…………… あ！？ こんな遅くなったんじゃ、おば様に殺される！！！！

考える！！考えるんだ！！なんかあるはずだ、なんか！

この絶望的状况の中から抜け出せる、起死回生の何かがあるはずだ！！

頭をフルに活動させる！！ じゃないと死ぬ！！

琴音を後ろに乗せて、琴音の自転車はエメリーヌに乗ってきてもらうか？

いやだめだ。

琴音より小さいあいつが、琴音の自転車に乗れるわけがねえ。

そして何より、帰り道が分からん。

くそっ！！ だめだ、何も思い浮かばない！！

もうこうなったら仕方ねえ。

「秋！ 琴音！」

俺は、帰る方法を必死になって考えている二人、つまり同士を呼びとめた。

「どうした！！ いい方法でも、思いついたか！？」

「何々？どんな方法？」

これと言った方法なんてない。

あるとしたらただ一つ、これしかない!!

「まず、胸の前で両手を組むんだ!!」

俺が指示を出すと、同士二人は、言われたとおりに両手を組み始めた。

「これからどうするんだ!？」

「とりあえず言った通りにやってくれ!!」

「……………わかった。何を考えているか知らんが、お前に任せる!!」

「おう! まかせろ!!」

さすがは秋。

いざとなると、頼もしい奴だ。

「組んだら、目をつむり、空を見上げろ!! そして……………」

「おい……………お前まさか……………」

「全力で神に祈れええ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「うんわかった!!」

俺と琴音は、神に祈り始めた。

神様……………、助けてください。

録画したチヂミさんも見ないうちから、俺は死にたくありません。

神様……………、神様……………、神s……………ん?

「……………で……………なんヨ」

「……………も……………か?」

なんか、後ろで話し声がする。

「なら……………や……………とかは?」

「……………だけ……………おく……………ヨ」

やっぱり気のせいではない。

なんで、一緒に祈っているはずの秋の声が聞こえるんだ？

さてはあいつ、サボってやがるな!？

同士に裏切られた俺は、祈るのをやめ、秋のほうを向いて言った。

「おい裏切り者!! 祈りはどうしたあ!!!!!!」

「そんな無意味なこと、やってられるか」

そう言って、また話し出す秋。

ハッハッハッハッハ。

どうやら死にたいらしいな？

あわてるな。

あわてずとも、今すぐ殺してやんよおお!!!!!!

秋に対しての怒りと憎しみで、我を忘れた俺は、

強くこぶしを握りしめ、秋に殴りかかった。

すると突然、エメリィーヌが立ちあがり、手を前に出した。

そして呪文らしきものを唱え始め、エメリーヌが首から下げている勾玉が光り出す。

「コリクサコサクリエメラルドウ！！ はあー！ 念力！！」
サイコキネシス

えっ、エメラルドウ！？サイコキネシス！？ 何言ってるんだこの人。

唱え終わった瞬間、俺の体が宙を舞い、見えない何かに突き飛ばされ、

かなりのスピードで後ろに吹っ飛んでいく。

そして、後ろの大木にぶつかった。

「うぎゃあああ！！！！死んだああ……………つてあれ？」

そう、確かにぶつかったと思ったのだが、ギリギリで寸止めされていた。

大木までの距離は、10cmあるかないかくらいだ。

何だよこれ、心臓に悪いぞ。

そうまとうが見えたわ。

「ーか何が起きたんだよ、体が浮いたような気がしたぞ？」

ふと、エメリーヌを見ると、何事もなかったかのように、秋と話している。

そして琴音は、まだ祈っていた。

あの様子じゃ気付いてねーな？

てか、

「誰か説明しろ！！」

意味が分らん。

すると、秋が、なんか出しやばってきた。

「とりあえず、簡単に説明すると、超能力だ」

「なるほど………ちつきコンコン話してたのは、この事が」

宇宙人だし、超能力ぐらい不思議じゃないよな。

サイコキネシス
念力!! とか言ってたし。

なるほどねえ。

「で、超能力で俺たち帰れるらしい」

「……マジ？」

「マジ。」

なんか……簡単だな。

まあ、とりあえず帰れるならいいか。

「じゃあ、今から帰りたいんだが、どうすればいい？」

俺は、いつの間にか隣にいたエメリーヌに聞いた。

「ウチに触れていればいいだけなんヨ。道具も忘れないで、なんヨ」
「ほっほっほ。」

これまためんどくさくなくていいな。

じゃあ帰るか。

琴音が、怪我をして動けないので、俺たちは琴音の所に集まった。

そして、琴音に説明をする。

「んで、コイツの超能力で帰れるらしいよ」

「うん、知ってる。」

え？

「だって全部聞いてたもん」

「あ、そうなんだ」

なら説明させんじゃねえよ。

「じゃあ帰るけど、忘れ物ないんヨ？」

「ああ、大丈夫だ。」

「ならウチに触れて、なんヨ」

琴音は手。

秋は肩。

そして俺は、エメリーヌの頭に手を置いた。

そのあと自転車にまたがる俺と秋。

琴音は自転車に触れているだけ。

それでも大丈夫らしい。

「じゃあいくんヨー。」

そういつて、エメリーヌが呪文を唱え始める。

「コリクサコサクリエメラルドウ。はあー！！

テレポーション
瞬間移動！！」

唱え終わった瞬間、俺たちは勾玉の光に包まれた。

第七話 完

第七話〜宇宙から来た、凄い奴〜（後書き）

どうもです^^

まずは、ご愛読ありがとうございました！。

文字的には、今回が一番多いので、大変でした。

今回は、秋君も程よく出てきましたねw

だけどその分琴音が活躍できなかつた^^；

みなさんも、新キャラの事が分かってきましたか？

それでは、

次回をお楽しみに！！

第7・5話、その頃、俺は。(前書き)

はいどうもー!!

今回は7・5話と言っ事だね!

あの七話を、かるーく秋視点で行きたいと思います。

それでは

第7・5話、その頃、俺は。く

やあ！

秋だ！

え？

あの時、エメリィー又と何を話していたかだつて？

しょうがねえな。

教えてやるよ。

俺は今回、初主役だ！

みんなよろしくな！！

第7・5話

くその頃、俺は。く

突然、ドッガンという大きな音が聞こえた。

目の前には、謎の少女。

そんな少女と、海が話をしている。

「あなた達は誰なんヨ？」

という少女の声。

「ハハハッ、お前こそ誰だよ」

そんな少女の問いに、海が難しい顔をして呟いている。

あいつがこの顔をしている時は事は、大体、無意識に考えている事を喋っている時だ。

分かりやすすぎ。

「ウチは、エメリィヌ・ジョセフなんヨ」

エメリィヌか。

なかなかない名前だな。

少女が、あいつの独り言に返事を返す。

可哀そうに。

エメリー又は気付いてないんだろうなー。

あいつはただ、考え事をしているだけって事に。

っーか琴音。

お前なんて顔してんだ。

口を閉じろよ。

琴音は、口を閉じるのも忘れ、驚きの表情を隠せないでいる。

琴音を気にしていたら、エメリー又の声が聞こえた。

「知らない人に、個人情報教えられないんヨ」

「人に聞くときは、まず自分からなんヨ」

プツ、あいつ、あんな子供に説教されてやがる。

エメリーヌに説教されている海を見て、俺は思わず笑ってしまった。

「悪かったな、俺は海。山空 海だ」

お、やっと自己紹介しやがった。

海が、苦笑いしながら、申し訳なさそうに頭をポリポリとかいている。

これぞ古いリアクション。

「なるほどなんヨ、はじめましてなんヨ」

エメリーヌはゆっくりと立ち上がり、ペコリと頭を下げている。

申し訳なさそうな海と、礼儀正しいエメリーヌ。

もうどっちが子供だかわかんねーな。

そのとき俺は、なんとなく琴音のほづを見た。

別に理由なんか無い。

ただ、なんとなく。

いまだに、情けない顔の琴音。

兄貴が見たらなんていうか。

あ、兄貴は俺か。

……っておい、よだれが出てきてるぞ。

全く、はしたない。

よだれが出てきた事に、琴音も気づいたらしい。

ピンクの可愛らしいハンカチをポケットから出し、あわててよだれを拭く。

あれ？ 琴音、ハンカチなんて持ってきてたのか。

俺がそう思っていると、琴音が俺のほうを見た。

そして、俺と視線が合うと、自分で自分の頭を小突き、

舌を出しながら、『てへっ』と恥ずかしそう笑っている。

琴音のそんな顔や、何気ないしぐさを見て、心が安らぐのを感じる。

琴音。

お前が元気でいてくれれば、俺はそれだけでいい。

俺は、心からそう思えた。

一応琴音には、アホか、という顔しておく。

「あ、私は竹田 琴音だよ。よろしくね、エメリイちゃん」

と、自己紹介をする琴音。

琴音って人見知りのくせに、自分より小さい奴にはお姉さんぶるんだから。

そういえば、海に初めて会った時も人見知りすごかったな。

海だって、いきなり琴音連れてきても、

嫌そうな顔一つしないで一緒に遊んでくれたんだよな。

あの琴音が、今じゃ普通に接するんだから。

……海、ありがとな。

……って、あれっ？ 今日の俺、なんか変だな。

今なら誰にでも優しくできる気がする。

これからも、この気持ちを大事にしなくちゃな。

「よろしくなんヨ、コトネ。」

よろしくねっ、そう言って握手をする琴音。

二人とも自己紹介が終わった。

となれば、俺も自己紹介しない訳にはいかないな。

俺は、半分照れ隠しで、エメリーヌのそばに行く。

「あ、ちなみに俺は、竹田 しゅ『フリーズ君だ。』」

俺が、名前を言おうとすると、海の声が邪魔をする。

「よろしくなんヨ。竹田フリーズ。」

おい、海！ お前のせいで変な名前だと思われちまうじゃねえか。

「誰だよ！竹田フリーズって！？竹田さんの必殺技かよ！？」

俺がツッコむと、海がまた難しい顔を始めた。

あれの顔は、必殺技の効果的なものを考えて、『つかえねえー』とか思っている顔だ。

このまま、変な名前と思われたくないの、俺はあわてて言い直す。

「だから俺は！フリーズじゃなくて、しゅ『ブリーフ君だ』
しかし、またしても海が邪魔をする。

「竹田ブリーフ。」

そして、それを信じ込んでいるエメリーヌ。

「ブリーフじゃねええええ！！！！！」

何だよブリーフ君って

フリーズ君と語感が似てるだけじゃねえかよ！！

イタズラ感覚で、いたいけな少女をだますんじゃないよ。

ブリーフだいすき小僧みたいじゃねえか！

「え？ お前トランクス派？」

「そーゆー意味じゃねえよ！！！！！」

ゼエゼエと肩で息しているのが、自分でもわかる。

少々、ツッコミに気合が入り過ぎたか。

だがしかし、それもしようがない事。

なにせ、俺の大事な大事な第一印象がかかっているからな。

そんな中、エメリー又言った。

「竹田フリーズブリーフ。話を進めたいんだけど、いいんヨ？」

……………終わった。

二つとも織り交ぜてきやがった。

これじゃあ目立ちたいがために、

何か特別な特徴を作ろうとして、ブリーフに目覚めた変人じゃねえか。

みたかよ、エメリー又の同情の顔を。

ここでツッコんでも、

印象付けたいがためにやってる人、的な感じで取られてしまい、逆効果になるだろう。

そしたら、俺の心が持たん。

だから、ここは潔くツッコむのをやめよう。

俺がそう思っていると、海が不思議そうに俺を見ている事に気付いた。

どうせ、何でツッコまないんだ的な事だろう。

そう思い、俺はカッコよく海に言い放つ。

「フッ、俺はもう……ツッコむのをやめたんだ………」

ふふっ、どうだ。 かつこいいだろう。

俺は海の表情をうかがう。

すると、すぐに海のオーラ（表情）が、『憐れみ』に変化する。

くそっ！ あいつから、『お前、空気になるぞ。』が痛いほど伝わってくるぜ！

「とりあえず、話を続けんヨ？」

と言いながら、エメリィーヌが俺のほうを、確認を問うかのように見てくる。

なので、俺は、小さく頷いた。

「まずウチ達は、宇宙のその辺にあるコツカコラ星に住む、コツカ星人なんヨ」

なるほど。

いろいろツツコミ所はあるが、俺は海に任せることにした。

「お～しまい～ なんヨ」

急に歌い出すエメリーヌ。

なかなかいい歌じゃねえか。

「お～しまい～ ですよ」

やっぱり、琴音もそう感じたか。

さすがは妹！

よーし、俺も……

「お～しまい～ なんだぜ」

俺は歌った。

よく見ると、海が大きく息を吸っている。

海の歌って聞いたことねえな。

「おし〜ま〜い〜 だ〜ぜえ〜」

……なるほど。このパターンか。

想像を絶するひどさに、一瞬言葉を失った。

琴音たちも同じのようだ。

「どうした！俺の歌唱力に驚いたか？」

そしてこのどや顔である。

「か、かいにいのうたもなかなかうまいね、えへへへ」

お、コイツをかばうか。

いい奴だ。

俺も誤魔化しておくか。

「た、たしかにな、あははは」

……………そしてこのどや顔である。

ウザッ！

「なんとというか、こせいでき、なんヨ」

へー、宇宙人でもお世辞が言えるのか。

あまりにも楽しそうに歌う海を見て、

傷つけたら可哀そうだと思い、三人ともお世辞に力が入る。

「何だお前ら？ 俺があまりにも歌がうまいからって、嫉妬するな

」

そしてこの有様である。

ここは、皆のためにも、俺が一肌脱がなければなるまい。

「気付けよ！！ どんな頑張ったって、お前ほどヘタクソに歌えねえよ……！」

的確なツッコミ。

これなら奴も気づくはず。

「何だよそれ!! その言いかたじゃまるで……………」

「未来から来た、こけし型サムライ、コケ新左工門。
通称、コケえもんに出てくる、

ジョイアンのような歌だと言われているみたいじゃないか!!!!」

なるほど。ラスボスか。

だが、奴の心のHPも残りわずかだ!!
ヒットポイント

「見たいじゃねえ!! そうなんだよ!!」

どうだ!?

「うそだろ!?!」

海の顔が引きつる。

フツ、相当ダメージを受けたようだな。

受けたダメージを回復しに、お前が向かおうとしている先は分かっている。

琴音。

お前のターンだ。

「琴音、俺の歌、上手かったろ？ 神だったろ？」

海は、すでに敵である琴音に聞いた。

その目は、涙で潤っている。

いやー。

潤いっていいねー。

「た、確かに、誰にでも歌えない歌と言うか、何というか……、神と言うより、紙……かな……？」

出た。琴音ならでは！！

これはつらい。

これであいつの心のHPはヒットポイントゼロだ。

だが、知っているか？

ラスボスってのは、大抵二回戦目がある事を！！

「ほら見る！ 最高だったって言ってるじゃねえか！！」

ほら。

馬鹿にされた部分を、綺麗に見ないようにしてやがる。

その目で見ぬふりをしている所を、俺が直視させてやろう！！

「お前どんな耳してんだよ！？ 思いっきり、馬鹿にされてたじゃねえかよ！！！」

もちろん、ラスボスがここで素直に負ける訳が無いよなあ？

「……………まったく。」

秋には理解できないんだよ。

よく言うじゃねえか。真の芸術は、理解されにくいってな！」

動揺が隠し切れていないぞ？

考えている事が口に出ている。

もちろん、これも計算の内だ。

弱点の部分を自ら口に出すとは、攻撃しろと言っているようなもんだぞ？

クククッ。

これで！ 終わりだああ！！！！

「芸術じゃなくて、お前の耳のほうを理解できんわ！！ どんだけポジティブ思考なんだよ！！」

きまった！

俺は勝利を確信し、海の顔を見る。

だがしかし……………

海が、悲しい顔で俺を見つめる。

「なんで……………、なんで俺がそんな悲しい顔されなきゃ、いけないんだよおおお！！！！」

まさかのカウンターに、俺は大ダメージを受けた。

そして、俺は負けた。

だけど、悔しくなんてないもんね！ ……………ぐすん。

「ジョセフってさ。宇宙人……………なんだろ？」

海の唐突の質問。

「ジョセフなんて、渋いおじ様ツポイ名前で呼ばないで。レディーに対して失礼なんヨ」

まったく、女心の分からない奴だな。

「じゃあなんて呼べばいいんだ？」

「好きに呼んでいいんヨ」

「わかったよ。ジョセフ。」

「それ以外に決まっているんヨ!!」

馬鹿が！ いい気味だ。

「じゃあ、エメリー又でいいか？」

「それならいいんヨ」

「では改めて聞くが、ジョセフィー又……お前宇宙人だよな？」

「そうなんヨ。……って、ジョセフィー又誰なんヨ!? どっかの貴族の愛犬なんヨか!？」

おいおい、ナイスなツッコミスキルを持つてるじゃねえか！
見なおしたぜ!! 宇宙人!

「やべ、間違えた」

人の名前を間違えるなんて、最低だな。

「名前が混ざっちゃったぜ。

ジヨセフィー又なんてかつちよいい奴、日本にはいねえーよな、ハハツ。」

そして、考えが口からもれてる事に気付け。

「かつちよいい!?!? ウチは貴様の頭を疑うんヨ!?!?!」

お前の言いたい事は分かるぞ!

同士よ!?!

「つーかコイツ、ノリが秋に似てて、なんかヤダな。」

「こんな奴と一緒にするなんヨ!?!?!」

え? え!?!?!?!?

裏切り!?!

まさか裏切り!?!

なんだよ!

人間と宇宙人は分かりあえないのかよ!?

つか、こんな奴って何だよ!!

たしかにこんなんだけど、指までさすことないだろうよ!!

「何だよこの流れ弾は!？ 俺、何も悪い事してねえよ!？」

くそ、心が痛い!!

すると突然。

「おいっ！ もう8時半じゃねえか!!」

まじかよ!! うちのおふくろがキレルぞ!?

「うそお!？ やばいじゃん!!」

琴音も、おふくろの怖さが分かってるな。

「帰る方法考えてなっかつた!!」

海も分かるだろ。

おふくろの怖さ。

「秋！ 琴音！」

そんな海が、俺たちを呼びとめる。

いい方法でもあったのか？

「どうした！！ いい方法でも、思いついたか！？」

「何々？どんな方法？」

「まず、胸の前で両手を組むんだ！！」

なぜに？

まあ、とりあえず言った通りにしよう。

俺は、言われるがままに、手を組んだ。

「これからどうするんだ！？」

「とりあえず言った通りにやってくれ！！」

何だこの自信に満ち溢れた表情は！！

こんな海、初めて見るぞ!!

「……………わかった。何を考えているか知らんが、お前に任せる!!」

「おう! まかせろ!!」

いざとなったら頼りになりやがるぜ!!

「組んだら、目をつむり、空を見上げろ!! そして……………」

……………え!?

「おい……………、お前まさか……………」

「全力で神に祈れええ!!……………!!……………!!」

「うんわかった!!」

ハア、幻滅だ。

少しでも信じた、俺がバカだった。

まさかの神頼みに出た海に、

ちよっとした殺意と、かなりのガツカリ感を覚えた瞬間だった。

そのとき、エメリーヌが服を引っ張ってきた。

「ちょっと話があるんヨ」

俺にしか聞こえないほどの小声だ。

「俺に………話？」

いっただいなんだろつ。

「向こうで話すんヨ」

と言いながら、俺のすぐ後ろにある、気のほつを指差している。

俺は、エメリーヌについて行き、目的の場所に着くと、木の根もとに座った。

もちろん、エメリーヌもだ。

「それで、話って何だ？」

俺が問う。

「」の勾玉で、ウチにつれて行けるかもなんヨ」

マジ？

「勾玉にも、何かあるのか？」

特別な力があってもおかしくない。

空から降ってきてても無事なのがその証拠だ。

エメリーヌは、静かに頷いている。

なるほど。

「なら自転車や、道具とかは？」

「ふれるだけで、一緒におくれるはずなんヨ」

……ん？ どういう事だ？

よくわからん。

俺のそんな表情が伝わったのか、

エメリーヌは、『ちょっと見ててなんヨ。』と言っている。

エメリーヌとそんな話をしていると、

突然海が叫び出した。

「おい裏切り者！！ 祈りはどうしたあ！！！！！！」

おいおい、まだ祈ってたのかよ。

「そんな無意味なこと、やってられるか」

帰れるんだもんな。

祈りなんて無意味だ。

俺がそう言った途端、海が恐ろしい気迫ともに、俺に向かって走ってきた。

おい、その勢いで何する気だ？

危ないだろ。

俺が身の危険を感じ、その場から離れようとするど、

『任せてナンヨ』とエメリィーナが、小声で言ってきた。

そして、それと同時にエメリィヌが立ちあがり、手を前にだした。そして呪文らしきものを唱え始め、エメリィヌが首から下げている勾玉が光り出す。

「コリクサコサクリエメラルドゥー！ はあー！
サイコキネシス 念力！！」

エメリィヌが唱え終わった瞬間、海が猛スピードで大木へ飛んでいく。

絶景ナリ。

つーか、ぶつかる！！

俺は、慌ててエメリィヌを見た。

そして、頭で理解するのより先に、俺はエメリィヌに体当たりしていた。

吹っ飛ぶエメリィヌ。

それと同時に海の声。

「うぎゃあああ！！！！死んだああ……………つてあれ？」

……ハア、どうやら海は無傷だ。

……よかったあ。

俺は、安心した途端に、全身名力が抜けていくのが分かった。

そして……

「……どういう事だよ!?!」

俺は倒れているエメリィヌに、あらい口調で問い詰める。

「ごめんなさい!!なんヨ!!」

土下座するエメリィヌ。

「あ、……わりい、言い過ぎた……」

エメリィヌは、うつすらと目に涙を浮かべている。

「とりあえず、なんでだ?」

あの時……超能力が暴走……? しているように見えた。

「実は……」

エメリィーヌが言うには、つまりこう言う事だ。

超能力が使えるのは、勾玉のおかげらしい。

そして、コツカコラ星にいた時も、一応超能力は使えた。

だが、コツカコラ星の時と、

ここ、地球の時とでパワーの出方が違く、

超能力暴走。

というわけだ。

他にも色々あるらしいが、俺が理解できたのはここまで。

「フーことはあれか、俺の止める判断は正しかったわけだな？」

「そうなんヨ、感謝しているナンヨ」

「それで、俺が止めてなかったら……………」

「大木にドーン、なんヨ」

やっぱりか。

あぶねえ。

「もう頭上げる。俺に謝っても意味が無いしな。」

「じゃあ、ウチはどうすればいいんヨ？」

「簡単な事だ。あとでアイツにあやまつとけ」

わざとじゃないしな。

本気で反省してるんだ。

アイツなら分かってくれる。

「だからさ。涙を拭け。俺たちを帰してくれんだろ？」

「でも、また何かあったら……………」

「そんなときゃ、俺がまた止めてやる。」

「でも……………」

「でもじゃねえよ！！俺が大丈夫だって言ったら大丈夫なんだ。」

「……………」

エメリー又の顔色が次第に良くなっていく。

「俺は、琴音を何十年も守ってきたんだ。

そして、これからも守っていかなきゃいけない。

それに比べれば、お前なんか楽なもんだ。」

「……………ありがと！なんヨー！！」

「……………よし。」

すっかり立ち直ったエメリーヌ。

なんだかんだで、まだ子供なんだな。

そんなとき、突然。

「誰か説明しろ！！」

という、空気の読まない声。

俺は、泣いて赤くなった顔を隠そうと頑張っている、

エメリーヌの代わりに、海に説明をしに行った。

「とりあえず、簡単に説明すると、超能力だ」

「なるほど……………さっきコソコソ話してたのは、この事が」

さすが海だ。

何という理解力の早さ。

超能力なんて普通信じられないぞ。

あ、そうだ。

「で、超能力で俺たち帰れるらしい」

「……マジ？」

「マジ。」

そう言いながら、俺はエメリィヌのほうを見た。

なんとか大丈夫そうだ。

走ってこっちに来る。

「じゃあ、今から帰りたいんだが、どうすればいい？」

海が、エメリィヌに聞いている。

「ウチに触れていればいいだけなんヨ。道具も忘れないで、なんヨ」

エメリィヌも強い奴だな。

海と普通に話しているエメリィヌを見て、俺は思った。

海に説明を終え、帰るために動けない琴音の周りに集まる。

「んで、コイツの超能力で帰れるらしいよ」

海が、先ほど得た知識を、当たり前のように話している。

調子のいい奴め。

「うん、知ってる。」

うん、いつもの琴音だ。

「だって全部聞いてたもん」

そう言いながら、琴音が俺のほうを見て、なんか不敵な笑みを浮かべている。

いったい何なんだ？

まあいいか。

「じゃあ帰るけど、忘れ物ないんヨ？」

帰る準備を終えた俺たちに、エメリィー又が言った。

「ああ、大丈夫だ。」

「ならウチに触れて。」

琴音は手。

海は頭。

そして俺は、エメリイー又の肩に手を置いた。

エメリイー又は、少し震えている。

そんなエメリイー又に、小声で俺は囁いた。

「大丈夫だ」

そのあと自転車にまたがる俺と秋。

琴音は自転車に触れているだけ。

それでも大丈夫らしい。

「じゃあいくんヨー。」

エメリイー又は、すっかり力強さを取り戻していた。

「コリクサコサクリエメラルドウ。はあー!!!」

テレポーション
瞬間移動!!!」

唱え終わった瞬間、俺たちは勾玉の光に包まれた。

第7・5話 完

第7・5話 その頃、俺は。(後書き)

追記：

どうもー。

まず、俺曰く愛読ありがとうございましたー。

そして、何コレ？ と思っただ方もいらっしやるでしょうw

実はこれ、俺（作者）が前から書きたかったんですよねえw

実はかつこいい秋君をねww

どうでしょうか、同じ話も別視点で見ると、なかなか新鮮じゃないですか？

そして、琴音の不敵な笑みは何を意味するのかww

海君も、後々かつこいい事が起こるかもねwww

では

次回をお楽しみにー
WWW
WWW
WWW

第八話〜コッカコラ星での出来事〜(前書き)

どうもー。待望の第八話です!!!

お疲れ〜^^

今回は、特にコメントはないです(^^;)

第八話　コツカコラ星での出来事

前回のあらすじ。

- 1 ・ある日、森っばい所で少女と出会いました。
- 2 ・その少女は超能力者でした。
- 3 ・超能力で、吹っ飛ばされました。
- 4 ・色々あって、超能力で帰れることになりました。
- 5 ・そして……………俺たちは勾玉の光に包まれた。

第八話

コツカコラ星での出来事

「うおっ！」

瞬間移動は、その名のとおり一瞬で終わった。

瞬きほどの一瞬。

ジャングルの景色とは一変し、

よく見なれた俺の家の前、すなわち俺の自宅の前に、俺たちはいた。

なんかこう……もっと、違う感じのを想像してたんだけどな。

「場所は、ここで間違いないんヨね？」

と、エメリィヌの声。

「ああ」

と、俺が答える。

それにしても、超能力って便利だな。

これがあれば、どんな所でも一瞬で行けるし……。

「超能力は、怠ける為にあるもんじゃないんヨ」

そんな俺の考えが見て取れたのか、エメリィー又に叱られた。

何だよ、ケチ。

「ケチでもダメなんヨ」

「……分かったよ」

俺の考えは、瞬間移動のごとく一瞬で壊される。

そんな事を思っていると、

エメリィー又が俺のほうを見ながら、何かを言いたそうに、モジモジしている。

ちょっとキモい。

「なんだよ、俺に何か用か？」

俺は、エメリィー又に問う。

訳も分からず、モジモジされたまま見られると嫌だからな。

そう聞くと、エメリーヌが俺の言葉に反応し、恥ずかしそうに口を開く。

そして以外にも、その口から出た言葉は、謝罪の言葉だった。

「じ、ごめんなさい！… なんヨ…！」

頭を下げて、謝罪の言葉を口にするエメリーヌ。

その目には、涙が溜まっている。

だがしかし俺には、そこまでして謝られる理由が見当たらない。

「えっと、とりあえず、何だ？」

これは、当然の反応だと思う。

自分には心当たりがない事を突然謝られたら、誰だっけこつなるはずだ。

「……………」

無言のまま、頭を下げているエメリィヌ。

説明したくても、頭の中で整理ができないと言った感じだろうか。

ふと、秋や琴音を見てみると、真剣な目でエメリィヌを見つめている。

いったい何なんだよ。

とりあえず、

「なんかよく分からないけど、とりあえず頭を上げる。」

そう言っても、エメリィヌは頭を下げ続けている。

……まったく。

何だっただよ、めんどくせえ。

その時の俺は、どうかしていたのかも知れない。

別に悪気があったわけではない。

サイクリングとかの疲れとかもあるだろうか。

俺はただ、軽い気持ちだった

俺が思ったのが顔に出たのだろうか。

エメリー又は気付いてないっぽいけど、秋や琴音は気付いたらしい。

「……海」

「ん？ なんだよ？」

突然秋の声が聞こえ、俺は視線を秋に移す。

俺は秋の顔を見て気付いた。

秋は、口調こそ普通だが、顔は凄い怒りをあらわにしている。

琴音も

秋ほどは顔に出ていないが、気分が良さそうな顔でない事は、一目

瞭然だった。

「お前、もうちょっと真剣に答えてやれよ」

俺は、馬鹿なことをしたと思い、すぐに謝ろうとはした。

だがしかし、俺という人間は、なんて小さいのだろう。

意味も分からず謝られ、そして睨まれる。

そんな不快感とプライドが邪魔をして、心とは裏腹に、悪態の言葉が次々と口をついて出る。

「何だよ、俺がなんかしたか！？ 理由も分からないまま、真剣になれと言っほぅが無理だろ！？」

「おい！ 海！！」

俺はそんな不快感に負けて、エメリィヌの前でひどい言葉をぶちまける。

ぶちまけたら最後、俺の言葉は、もう止まらなかった。

「大体、お前ら理由をしってるなら教えるよ、めんどくせえ」

俺の言葉を聞いたエメリーヌの目から、涙がこぼれ落ちる。

頭では分かっているけど、プライドに負け、俺の力じゃ、もう止まらない。

俺……………最低だ。

「海！！ お前、エメリーヌがどんな気持ちで謝ってると思うんだ！！」

「そんなもん知るかよ、勝手に謝られて、こっちは迷惑してるんだ」

「なっ！？」

……………秋はいい奴だ。

俺がどんなにひどい事を言っても、突き放すどころか、

俺がどれだけひどい事をしているのかを、分からせようと必死にな

っている。

「……………ひっくっ……………」

エメリィーヌから、嗚咽が漏れる。

よく分からないけど、とりあえず謝ろう。

「エメリィーヌ、泣くなよ……………俺が悪かつ」もういいよ。」

俺が言い終わらないうちに、今までずっと黙っていた琴音が、口を開く。

「もう謝らなくていいよ、エメリィちゃん。海兄いなんかに謝ることないよ」

……………琴音……………。

琴音の言葉が、俺の胸にくさりと突き刺さる。

「海兄い。もう帰って、頭冷やしてきなよ」

琴音の目は、鋭く俺を睨みつけている。

琴音は普段、あまり本気で怒らない性格なので、

こんなに怒っている琴音を見るのは初めてだった。

「こ、琴音！ ちょっと待ってくれよ！！」

エメリーヌの手を引いて、帰ろうとする琴音を呼びとめた。

「なに」

琴音の声は、今まで聞いた事のないような、鋭くて重い声だった。

あまり怒らない琴音が、凄く怒っている。

ただそれだけで、俺がどれだけ酷かったかを改めて思い知らされた。

「あの、悪かつ…たよ……」

俺は、凄く後悔し、琴音に謝った。

だが、琴音は何も言わずに、歩きだしていく。

秋も、それに続くようについて行く。

「琴音、悪かったから、俺が悪かったから許してくれよ…！」

俺は必死に謝った。

だが、琴音は何も言わない。

ただ俺は、立ち尽くすしかなかった。

琴音たちの背中が見えなくなるまで。

最後に俺を見た琴音の鋭い眼が、頭から離れなかった。



「琴音、ちょっとやり過ぎじゃなか？ 最後のほうも謝ってたし…」

……」

海も海だが、俺たちも俺たちだ。

少しやり過ぎなのでは？

そう思い、俺は琴音に聞いた。

「確かに謝ってたけど……」

「けどなんだ？」

「私に謝ってばかりで、エメリイちゃんには一回も謝ってなかったじゃん」

「へー、よく聞いてるな」

琴音って、人の事になると凄いららな。

「それに、悪い所を認めようとしなのは、海兄いの悪い癖だよ」

「まー、たしかにな」

琴音、本当に細かいところまで見てるよなあ。

妹ながらに感心したぜ。

「お前、怒ってるのも演技だろ？」

今は、全然普通の表情だ。

「うん。あそこまでしないと、海兄いってちゃんと考えないからなるほど、愛あつての行動と言うわけか。」

泣かせるじゃねえか。

「まあ、海兄いにはいい薬だよ」

てか、演技でよくあそこまで凄い顔出来たな。

有名女優も真つ青だ。

とりあえず今回は、成り行きを見守るとするか。

「凄い顔だったんヨ、コトネ……………ひっく」

「恥ずかしいからあまり言わないでよ、もつ。」

顔を赤らめている琴音。

そうそう、エメリーヌはと言うと、泣いていたわけではなく、ただしゃっくりがでただけ。

今は普通に元気だ。

「つーか、しゃっくりぐらいで泣くなよ」

「だって苦しいなんヨ」

確かに、苦しいし地味に嫌だけど、泣く事じゃないだろ。

しばらく治らないと、魚の小骨が喉に刺さったくらいブルーになるけどな。

「でも、あんなにひどい事言われてたのに、大丈夫なの？」

と、琴音がきいている。

確かに、酷かった。

まあ、俺も長い付き合いだし、そんなくらいじゃ怒らないけど。

エメリー又は違う。

まだ小さいし、ショックだったんじゃないか？

「カイの言う事なんか、別にどうでもいいんヨ。

ウチは謝ったんだから、それでスッキリなんヨ」

カイの性格だと、ああなるだろうし……。などと言っている。

お前、海にあつてからまだ2時間も経ってないだろ。

俺は、海をかばって、そう言っているのかとも思ったが、とてもそうには見えない。

だつて……………

「なんヨ〜 なんヨ〜」

気にしてたら、こんな陽気に歌なんて歌えねえ。

歌えてたまるか。

つーか、本人も気にしてないなら、あいつはいつたい……………。

まあ、あいつが悪いんだし、仕方ないか。

海、頑張れ〜。

俺は、海がちょっと惨めに思い、心の中で応援した。

「そついえば、お前、なんとか惑星に帰らなくていいのか？」

なんか流れで家に来ることになってるけど……………。

俺は、無性に気になり始め、仕方が無いので、エメリィー又に聞いた。

「ああ、まだ言っていなかったんヨね。とりあえず色々あって、しばらくは帰らないんヨ」

へー、そうなのか。

って待て、色々って何だよ？

「実はこの勾玉は、超能力を使うのに、必需品。

ウチ達コツカ星人には欠かせない、いわば命のようなモノなんヨ」

と言っても、コツカコラ星では、無くても超能力は使えるんヨが…

……、

と、エメリィー又が付け足す。

「無くても使えるなら、イラネエじゃん。」

俺は、人間なら誰しも思うであろう疑問を口にする。

すると、エメリィー又が答える。

「勾玉が無くても使えるのは、コツカコラ星だけで、

他の星ではこれが無いと使えないんヨ」

そう言いながら、首にかけてある勾玉を手に取り、俺に見せるようにする。

「なるほどねえ、それで？」

「で、あるときウチは、超能力の練習をしていたんヨ。………口で言うより見せたほうが早いんヨね」

そう言ったかと思えば、呪文を唱え始める、エメリィヌ。

「コリクサコサクリエメラルドウ。はあ！！
テレパシー 記憶共有！！！」

呪文を唱えると、勾玉が光り出す。

そして、エメリィヌの指先もわずかに光っている。

「じゃあ、顔を近づけてなんヨ」

俺と琴音は、言われた通りにエメリィヌに顔を近づけた。

そして、光る指先で、俺と琴音のでこに触れる。

触れた瞬間。

頭の中に、映像が流れ込んできた。

ここは、コツカコラ星の超能力学校の校庭。

周りには何もなく、人もいない。

そこに、少女が一人きりで、何かをしている。

「はあ……………サイコキネシス念力!!!!」

その少女が手を前にかざすと、目の前の空き缶が、宙に浮く。

しかし、数十秒ほどで少女は力尽き、空き缶が地面に落ちる。

少女は、地面に手と膝をつき、肩で息をしている。

どうやら、凄く疲れるようだ。

「はあはあ……今、結構もったんヨー!」

少女は、小さくガッツポーズをとる。

すると突然。

後ろから声が聞こえた。

「ギャハハハ、たった数十秒で何喜んでんだよ。ダセー」

少年は、喜んでいる少女を指差し、馬鹿にしながら腹を抱えて笑っている。

「うるさいんヨー!! ループ!!」

キレル少女。

「だってよエメル、そのくらいだったら赤ん坊でもできるぜ……
ギャハハッ」

いまだ馬鹿にし続けている、ループと呼ばれていた少年。

つてか、エメルってなんだよ。

俺がそう思っていると、頭の中に、声が響いてきた。

『エメルは、ウチのニツクネームなんヨ』

へえ。

なるほどねえ。

俺が納得をしていると、急に記憶のほうから声が聞こえる。

「なんだ、まだそんな無駄な事やってんのかよ。落ちこぼれのくせに」

「そつだぞ!! お前がいくら練習した所で、上手くなんてならないよ」

次々に悪口を言いだす、三人組のいじめっ子達。

そして、悪口を言われているのは、エメリーヌだった。

そしてそのいじめっ子のリーダーっぽい人が、エメリーヌに近寄る。

近寄ったかと思えば、エメリーヌの背中を踏みつける。

「超能力もろくに使えない雑魚のくせに、粹がってんじゃねーぞ」

何だよコイツ。

エメリイー又は、何もしてねえじゃねえかよ！

しかも、無駄にイケメンだな、おい。

後ろのお二方は、大変残念なお顔なのに。

「そうだそうだ！」「やっちまえリーダー！！」

リーダーっの言葉に合わせて、後ろの家来っぽい二人が、口々に叫ぶ。

『ちなみに、こいつらはいつも、ウチをいじめるウザい奴らで、ループは幼馴染なんヨ』

と、エメリイー又の説明が入る。

まあ、そうだろうとは思ったよ。見た感じ。

「イタッ」

突然、エメリイー又の声が聞こえる。

もちろん、記憶のほう。

何があったのかと思い、エメリイー又のほうを見た。

すると、いじめっ子のリーダーに、超能力によって、小石をぶつけられていた。

おいおい、いじめっ子レベルじゃねーぞ。

エメリイー又は大丈夫か？

そう思いながら、見守る。

「悔しかったら、お前も超能力で何とかしたらどうだ？」

と、小石を飛ばしながら、リーダーが言う。

小石をぶつけられているエメリイー又の顔は、

痛みに耐えていて、辛そう。などと言う顔ではなかった。

あの顔は、怒っている顔だ。

「何だよその顔、気にいらねえ」

泣きもしなければ、嫌がったりもしないエメリーヌを見て、リーダー相当ご立腹。

そして、小石ではなく、サッカーボールぐらいある石を持ち上げ始める。

超能力で。

おいおい、まさか、あれを飛ばすつもりかよ!?

当たったら、痛いじゃ済まねーぞ!?

俺が、そう思ったと同時に、その岩が放たれる。

そして、一直線にエメリーヌの所へ飛んでいく。

でかい岩が飛んで来ているのにも拘らず、

エメリーヌはゆっくりと立ち上がり、逃げようとはしない。

そして、岩がエメリーヌの顔の目の前に来た。

あぶない！！

俺がそう思った瞬間。

エメリーヌが、飛んでくるそれを、最小限の動きでかわす。

岩はそのまま、飛んでいく。

そして、学校と思われる窓ガラスに直撃し、

『ガシャーン』と軽快な音をたてて崩れ落ちるガラス。

それと同時に、

「おい、やべーぞ」や

「逃げよう！！」などといった、お決まりの声が響く。

「ふん、たまたまよけただけでいい気になるんじゃないぞー！！」

と、リーダーが言い放ち、後ろを向いて逃げ出していく。

だが、キレたエメリーヌが、おとなしく見逃すはずなどなかった。

「喧嘩の最中に背を見せるなんて、バカにもほどがあるんヨー!」

そう言い放ったと同時に、追いかけるエメリーヌ。

普段、超能力を多用している奴らよりも、

あまり使わない（使えない）エメリーヌのほうが遥かに足が速く、すぐに追いついた。

後ろから猛スピードで近付いてくるエメリーヌを見て、

『ひいひい』と言いながら逃げていく三人組。

所詮はガキである。

逃げる三人組の背中に、手が届くぐらいの距離まで近づくと、

だがしかし、何もせずに追い抜かすエメリーヌ。

三人組との距離が、グングン遠ざかる。

三人組は、訳が分からないようで、走るのをやめることすら忘れて
いる。

すると、エメリィヌ突然立ち止まる。

そして、両腕を横に広げたかと思ったら、三人組のほうに突っ込んでいく。

かなりのスピードだ。

三人組は、『ぎゃああああ』という悲鳴とともに、泣きながら来た道に戻るうとする。

だが時すでに遅し。

エメリィヌの腕が、三人組の首に、見事にクリーンヒット。

そして、そのまま勢い良く倒れ、地面に頭を強打。

でかいコブを作って、おお泣きの三人組。

だが、エメリィヌは、容赦なくコブの出来た所を殴り続ける。

とても強気な女の子。

正直、怖い。

その時、遠くから『何やつとるかー!!!!!!!!!!』という声。

どうやら先生のようだ。

で、この状況を見た先生。

当然のごとく、エメリィーヌが悪者だ。

三人組が先生に泣きつき、エメリィーヌのしたことを洗いざらい話す。

自分たちがした事は、話さずに。

「おい、同級生をいじめるのはやめろと言っただろ!!」

凄い形相の先生。

「この子たちに謝れ!! 心をこめて土下座しろ!!!!!!!!!!」

「ウチは、悪くない。よって謝らないんヨ」

先生に対しても、強気のエメリィーヌ。

「……よしわかった。その反抗的な態度。先生を馬鹿にする根性。職員会議でお前の処罰を決めるとしよう」

完全にキれている先生。

「つか処罰って。」

「だがもしも、お前がすべてを認め、謝るといふのなら今日の所は許してやるう」

生徒と相手に、交換条件的なものを持ち出す先生。

普通の子だったら、ここだ素直に謝るのだろう。

だがしかし、エメリー又は強気であった。

「人の言う事を信じようもしない奴に、話す事など何もないんヨ」

鋭い視線で先生を睨みつけている。

「ナイスだ!!」

「スッキリしたぜ!!!」

ここで、記憶の映像は途切れる。

「という流れで、地球にきたんヨ」

「どついつ流れだよー!」

後半、大幅カットされた感が半端ないぞ。

「家出なんヨ」

「なるほど、家出かあ」

家出ねえ……………家出……………家出!?

おいおい、なぜ家出したんだよ!?

あの流れで、家出する要素は一切なかったぞ!?

さらっと、凄い事を言ったエメリィヌ。

軽く流しかけたぞ。

「なんで、家出したの?」

と、琴音。

そうだ。気になり過ぎる。

するとエメリーは、真顔でこう答えた。

「学校メンドイから」

「……………それだけ？」

「それだけなんヨ」

さっきの流れ一切関係ねえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

処罰は？

「処罰はどうなったんだよ!？」

「職員会議で、何も起きなかつたらしいんヨ」

えええええええ。

何コレえ

そんなのありかよー。

俺はちょっとハラハラしていた分、ガツカリ感が半端なかった。

そう言えば、誰も触れてなかったけど。

「幼馴染のループは、どうしたんだよ？」

喧嘩のくだりで一切出てこなかったからな。

すごい気になってたんだ。

「え？ 気付かなかったんヨか？ 隅っここで、震えてたんヨ」

はあ、とため息をつくエメリイヌ。

なるほど。

ビビってたってわけか。

弱虫だな。

「それで、話を戻すけど、なぜに家出？」

学校がメンドイだけで、家出なんてするはずがない。

「んー。なんでだったんヨか？」

エメリィヌが、腕を組みながら考え始めた。

つまり、

「忘れたのかよ!？」

『いやあ』と言って、照れている。

なぜにでれる。

「親に反対されなかったの？」

なるほど。

さすが琴音。

的確かつ、鋭い質問!!

そんな質問にエメリィヌが答える。

「『いい人生経験になるから、大賛成』って言っていたんヨ」

おいおい、そんなノリで家出させちゃダメだろ。

その親あつてこの子あり、ってわけか。

んで、

「帰らなくていいのか？」

さすがに、ずっと居続ける訳ないだろうし。

だがしかし、エメリイー又は軽い口調で、『平気なんヨ』と言っていた。

いいのかよ。そんなんで。

俺は、エメリイー又に軽く呆れた。

もういいわ。

なんか疲れた。

そこで、話をやめて、俺たちはまた歩き出した。

~~~~~

その頃、海は……………

「どうすれば……俺は、どうすればいいんだあ！……！」

一人で苦しんでいた。

第八話 完

## 第八話〜コッカロラ星での出来事〜（後書き）

追記：

はい、ご愛読ありがとうございましたー。

今回、後半ちょっと投げやりな感じになってしまった感が、ぬぐえ  
ませんw

いやあ、細かく説明書いてると長くなっちゃうしー、めんどk……  
…。

まあとりあえず、細かいところは、九話でやるかもねwww

見捨てないでねwww

では、

次回お楽しみに……！！！！

第九話 その言葉は、優しさゆえの（前書き）

どうも。

今回は、海君追い詰められ編 完結話となっております。

さあ、ラストに待っているものとは？

とゆつほど、そんなのではないんですがねww

では

第九話　その言葉は、優しさゆえの

琴音のあの顔が、頭から離れない。

鋭い目。

恐ろしい表情。

馬鹿な事をした。

素直に謝ればよかった。

もう手遅れなのか？

俺は、どうすればいいんだよお……………

第九話

　その言葉は、優しさゆえの

　琴音たちの姿が、暗闇に消えていく。

俺はただ、何もできずに立ち尽くしたままだ。

どうすればいい……………。

俺はいつたいどうすれば……………。

必死で考えても、今の俺には答えは出ない。

謝ってもダメだった。

どうすれば、琴音は許してくれるのか？

ただそれだけで、頭はいつぱいだった。

このまま立ち尽くしているわけにもいかないのて、

俺はとりあえず、家に帰ることにした。

いつもより、足が重い。

……………いや、重いのは心だ。

心の重さは、体にまで影響を及ぼしている。

体が重い。

俺は、自宅の玄関のドアを開ける。

当然のごとく、家の中は真っ暗だ。

それが、俺の心を反映しているようで……。

玄関で靴を脱ぐ。

そして、俺の部屋がある、二階への階段を上る。

いつもは、何気なくやっていること。

それが今は、ひどく辛い。

歩くのでさえ、満足にできない。

電気をつける気力も、今の俺には無い。

あたりは真っ暗。

そんな中で階段を上る。

俺が歩きたび、ギシギシと階段のきしむ音が、静かな家の中に鳴り響く。

暗い家の中で、不気味な音が鳴り響く。

そんな光景は、こっそり泥棒かなんかが階段を上がるときぐらいだろう。

そんな中、

なんとか自分の部屋にたどりつく。

このまま真っ暗というわけにもいかないので、部屋のスイッチを押す。

押した瞬間、部屋が光で満たされる。

俺は、だらしなく自分のベッドに倒れこんだ。

どうしたら、俺はどうしたらいいんだよ……………

悩む。

今の俺には、ただ悩むことしかできない。

琴音は……………なんであんなにも怒ったんだろう。

なぜあんな真剣になって……………。

……………気がつくど、時計の針は9時を指していた。

「ああ！ くそっ！」

上手く頭が回らない。

いくら悩んでも答えが出ない。

俺は、机の上に置いてある携帯を、おもむろにつかむ。

「とにかく、謝ろう」

ただ謝りたくて、この気持ちを伝えたくて。

俺は、秋の家の電話番号を押していく。

携帯のディスプレイに『秋の自宅』という文字。

謝ろう。

とにかく謝ろう。

携帯電話を耳にあてる。

プルルル……という呼び出し音。

しばらくすると、『もしもし、竹田ですが……』と聞こえた。

この声は、琴音だ。

あの時とは違う、明るい声。

俺はそんな声の琴音に、話しかける。

「……もしもし、俺……だけど……」

『……海兄い、何か用？』

俺の声を聞いた瞬間、さっきまでの明るい雰囲気とは一変。

また、怒り口調に戻る。

いや、呆れられている感じかもしれない。

俺は、琴音に話し始める。

「あの……えっと……さっきの事なんだけども」

『……………』

琴音は無言のままだ。

「その……エメリー又はどんな感じだ……？」

いざ話そうと思うと、言葉が出なかった。

許してもらえないかもしれない。

そればかりが頭を支配する。

そんな俺の問いに、琴音が答える。

『今は普通だよ。秋兄いと遊んでる』

「そ、そうか……。良かった」

俺は、エメリー又が落ち込んでるんじゃないかと心配だった。

だから、琴音の言葉を聞いて少し安心した。

『…………それを聞きたくて電話してきたの？』

いきなり、核心を突く言葉。

「い、いや…………それもある…………けど…………」

謝るって決めて電話したんじゃないか。

もう覚悟を決めるしかない。

俺は、一度だけ深呼吸して、呼吸を整える。

そして…………

「琴音…………俺が悪かった…………ごめん」

俺は琴音に、今の気持ちを伝えた。

『……………それだけ？』

琴音が、聞いてくる。

琴音の声は、まだ怒っているみたいだった。

「……俺、サイクリングとかで疲れてて……それで……本当にごめん……!」

俺は、この沈黙が耐えきれなくて。

琴音に謝る。

そして、琴音が口を開く。

『……で、海兄いの言いたい事は、それだけなの?』

琴音が妙に食い付いてくる。

声色は変わらないままだ。

「えっと……あの時は、俺どうかしてて……だから……その……」

なぜ琴音がこんなにしつこく聞いてくるのか、分からなかった。

頭が混乱し、何も考えられない。

いわゆる、プチパニック状態だった。

その時、電話越しに琴音のため息が聞こえる。

『……………海兄い、私はいい訳が聞きたいわけじゃないよ。』

……………その通りだ。

気がつけば俺は、【謝る事】じゃなく、【琴音に許してもらおう事】で頭が一杯になっていた。

琴音には、見透かされていたのだ。

そして、琴音は続けてこう言った。

『別に私は怒っている訳じゃない。ただ、海兄いの気持ちを知りたいだけ。』

今の海兄いからは、あまり気持ちが伝わらないよ』

キッパリと。

そしてハッキリと、琴音に指摘された。

俺は、甘かった。

心のどこかでは、許してくれるものだと思っていたかもしれない。

そんな甘ったれた考えで、許してもらえる筈などなかった。

琴音に言われて初めて、自分の甘さに気がついた。

「……………」  
「じめん」

今の俺には、その一言しか言えなかった。

すると琴音は

『海兄いは、一つだけ勘違いしてるよ』

勘違い？

『私に謝ったって、エメリイちゃんの心には届かないんじゃないかな』

そうだった。

俺は、エメリィーヌにちゃんと謝ってなかった気がする。

何もかも琴音に教えてもらって、俺は馬鹿か。

大体、電話で謝ること自体、相手をバカにしている。

琴音の言葉で、冷静になればなるほど、自分の悪いところが次々と出てくる。

俺は結局、何も考えちゃいなかったんだ。

琴音は、俺のダメな所をすべて分かってたから、怒ってくれた。

こんな俺のために……。

「……………琴音……………ありがとう」

俺は、琴音の凄さを知り、素直に感謝した。

『うん。海兄いの考えがまとまるまで、私、待ってるから』

琴音が、そう言ってくれた。

俺はただ、その言葉が嬉しかった。

ここで、電話は切れた。

自分自身がどれだけ甘かったか。

どれだけ酷かったか。

俺は、自分自身を見つめなおす。

くたった。

……………それから、二時間近

時計を見てみると、現在午後10時48分。

俺は、勢いよく部屋を飛び出す。

玄関を出て、自転車置き場に着いた。

「……って、ありゃ？」

そこには、いつもあるはずの自転車が無い。

どこやったっけか？

俺は、歩きながらあたりを見回す。

すると、道路の所に一台だけあるのが見えた。

「お、これだこれだ」

近くに寄ってみてみると、それはまさしく俺の自転車だった。

どうやらショックのあまり、自転車を放置したまま忘れてたらしい。

とりあえず、俺は自転車にまたがる。

そして、勢いよく漕ぎ出した。

行先は、竹田家。もとい秋の家だ。

遅くなってしまったので、明日にしようかとも思った。

だが、琴音が待っていると言っていた。

琴音は平気で、寝ないで待っているだろう。

それに、今すぐに本当の気持ちを込めて、謝りたかった。

外灯とかもあり、夜中にもかかわらず明るい。

そして、外灯に虫がたかっている。

琴音がいたら大騒ぎだ。

そんな事を考えているうちに、秋の家に到着した。

家の前に自転車を止める。

それと同時に、玄関のドアが開いた。

そして、玄関からパジャマ姿の琴音が出てくる。

……ん？

俺は、出てきた琴音を見て、一ツ気になる事が出来た。

「琴音、足大丈夫なのか？」

そういえば、あのときも平気で歩いていたような………？

「ああ、エメリィちゃんの超能力で、なんとか………ね」

「なるほど」

治療術も持っていたのか。

無駄に便利だな。

「まあ、治ったわけじゃないけどね」

琴音は、足に包帯を巻いている。

どうやら、痛みが和らいだだけのようだ。

「とりあえず、あがって」

琴音が、優しい顔で言ってくる。

俺は琴音に、台所へと案内された。

台所には、大きいテーブルがあり、椅子が四脚置いてある。

そして、その一つにパジャマ姿のエメリーヌが座っていた。

帽子も脱いでいる。

これじゃ、ただの子供だ。

「よく、エメリーヌに合うサイズがあつたな」

「ん？ ああ、パジャマの事ね。私のお古だよ」

と、琴音が答える。

なるほど。

……っか

「エメリイヌ？　こんな時間まで起きていて大丈夫なのか？」

秋あたりなら起きているかと思っただが、まさかエメリイヌが起きているとは思わなかった。

すると、エメリイヌが言った。

「ウチは夜行性なんヨ」

「へ、へえ」

夜行性って、カブトムシかお前は。

まあいいか。

とりあえず、俺たちはそこに座った。

エメリイヌの隣に琴音が座り、それに向かい合うように俺が座る。

「ごめんね。こんな所で。他の部屋はみんな寝てるから」

小さい声で話す琴音。

「いや、俺のほうこそ夜中に突然……ごめんな琴音。エメリイヌも起きていてくれてたみたいで」

琴音はいつも、規則正しい生活をしているらしく、

いつも10頃には寝ていると、秋が言っていた気がする。

つまり、俺のためだけに 起きていてくれたわけだ。

たぶん、エメリィヌもそうだろう。

なんだかんだ言っているが、俺の為だと思っ。

そんな琴音達に、俺は改めて感謝した。

……よし。

俺は、ここへ来た目的を琴音たちに告げる。

「………琴音、エメリィヌ。話があるんだけど」

もちろん、電話での話の事だ。

「……なに？」

「……なんヨ？」

琴音も静かに聞いてくれている。

エメリー又もだ。

俺は、椅子から離れ、琴音のほづを向いて、頭を下げる。

「じめんー!」

俺はただ一言。

その一言をハッキリと琴音に告げた。

「……………うん。許してあげる」

琴音も、ただ一言。

俺を許してくれた。

琴音の言葉を聞いた瞬間、心が軽くなるのを感じた。

「いろいろありがとうな、琴音」

心からの謝罪というものは、とてもスッキリする。

これでやっと、肩の荷が下りた感じがする。

「あと、エメリイヌ。ごめん。本当に悪かった」

俺は、エメリイヌのほうに視線を移し、頭を下げる。

「いいんヨ」

エメリイヌはいつもの調子だが、ちゃんと許してくれた。

俺は、元気なエメリイヌを見て、心から安心した。

もしかしたら、えらい気にしてるんじゃないかと……。

「後で秋にも、俺が謝ってたって伝えてくれるか？」

あいつにも、色々言われたからな。

……秋、ごめんな。

「うん」

琴音は、快く引き受けてくれた。

突然『グリユル』と、腹の鳴る音。

そう言えば、夕飯食ってなかった。

安心した途端、腹が減ってきたぞ。

秀困気ぶち壊しじゃねえかよ、俺の腹！

くそ、余は空腹じゃ。

そんな俺の腹の音を聞いてか、琴音が言った。

「なんか食べてく？ おにぎり位しか出来ないけど……」

「マジ！？ やったぜ」

いやー、よかった。

死ぬかと思った。

琴音、マジ感謝。

「ウチも食べるー」

「え！？ 夜ご飯あんなに食べたじゃん！！」

驚く琴音。

おいおい、どんだけ食ったんだよ。

気になるじゃねえか。

一応、エメリィー又に聞いてみた。

「どんだけ食ったか知らんが、食えるのかよ？」

「夜食は、別腹なんヨ」

なんだそりゃ。

お前の別腹どうなってるんだ。

あれか、四次元か？

ブラックホールなのか？

謎だ。

そんなエメリーヌに、琴音が『はあ』と、ため息をつきながら言った。

「じゃあちょっと待ってて、今作るから」

「やったー」

と言いながら、エメリーヌは椅子の上で飛び跳ねている。

「ふりかけとか切らしてるから、塩だけだけど、いい?」

と、琴音。

「全然いい。むしろそれがいい」

日本人なら塩むすびだ。

これ鉄則。

すると、エメリーヌが言う。

「海苔は?海苔はあるんヨね?」

隣でピョンピョン跳ねながら、

『のり! のり! のり助!』などと言っている。

非常にうるさい。

寝ているみんなが起きてしまう。

そして、のり助って誰だよ。

また一つ、エメリィヌから謎が生まれた。

そんなエメリィヌをスルーし、

炊飯器から米を取り出して、ラップに包んでいる。

そして、慣れた手つきで米を握っていく琴音。

さすが女の子だ。

後ろ姿が様になっている。

気がつくくと、隣で声がしない。

俺は、気になってエメリィヌのほうを見た。

エメリィヌは疲れたらしく、

テーブルに突っ伏して、ふにゃ、ってなっている。

「どうやら、アホのようだ。」

そのとき、

「出来たよー」

と琴音が言いながら、おにぎりを差し出す。

おにぎりを見た瞬間、エメリィヌが勢いよくかぶりついた。

ラップごと。

「おい、せめてラップは外せ」

「ぶー」

俺がそう言つと、エメリィヌはぶーぶー言いながらラップを外し始める。

お前はブタか。

エメリィヌのおにぎりは、希望通り、おにぎり全体に海苔が巻かれている。

だが俺のは、真っ白だ。

つまり、海苔が無い。

これはいかん。

作ってもらっおいてなんが、ここはビシッと云うべきだろう。

「おい琴音、なぜ俺のは海苔が無いんだ？」

「ノリで」

なるほど、海苔だけにノリか。

上手いじゃねえか。

ま、このおにぎりも、海苔があれば数倍上手くなるけどな？

まだ食ってないけど。

「まあ、ノリは冗談で、本当は無くなったただけだよ」  
と琴音。

やはりか。

すべては、このガキンチョ エメちゃんのせいだ。  
後でシメる。

「いただきまー」

とりあえず、おにぎりにかぶりつく俺。

こりゃうまい。

「あと一文字なんだから、『す』まで言いなよ」

琴音のツッコミを華麗にスルーし、おにぎりを食べ続ける。

いやー、うまい。

これはうまい。

実にうまい

「うますぎて海苔が欲しくなるな」

「もぉ、まだ言ってる」

だって……だって……。

海苔は欲しいじゃん。

すると突然、エメリィーヌが椅子の上で踊りだす。

おにぎりは食べ終わったみたいだ。

「おい、何してるんだよ」

何だこの奇妙な踊りは。

呪いの儀式でも始まるのか？

「ん？ だって、ノリが欲しいって言ったんヨから」

「言ってるねーよ！… 言ったけど言ってるねーよ！…」

俺が欲しいって言ったのは『海苔』であって『ノリ』ではない。

百歩譲って、俺がノリのほうを求めたとしても、

そんな奇妙キテレツなノリは嫌だ。

いつまでそのネタ引っ張るんだよ。

まったく。

そんな事を言っている間も、ずっと踊り続けている。

だが俺は、おにぎりを食べ続ける。

と言っても、すぐに食べ終わってしまった。

「ふー、じっそさん」

「なに、じっそさんって。神さん？」

いやちげーよ。

ごちそうさまって意味だろうが。

しかも、神は『God』と書いて『ゴッド』だぞ。

じっそじゃない。

「いやー。英語苦手ですー」

琴音が、照れながら言う。

「……………琴音ーっだけ教えてやる」

「ん？ なに？」

「そこは照れる所じゃない」

「てへっ」

「ごまかすな」

誤魔化す琴音に、渾身のチョップを入れた。

……………全く。

琴音をこんな子に育てた覚えはないぞ！！

育てたことないけど。

そういえば、エメリィヌが静かだ。

さっきまで踊っていたのに。

そう思い、エメリィヌを見してみる。

すると、またしても、テーブルに突っ伏していた。

「どうした？ 眠いのか？」

俺が聞くと、エメリィヌが、かすれた声で答える。

「……………気持ち悪いんヨ」

「あー」

そりゃーあなた、食ったばかりで、あんな胃を揺らすようなダンスしてるからだ。

青白い顔をしているエメリーヌ。

「こんなところで吐くなよ」

心配だから忠告しておく。

エメリーヌは『うう〜』と言ってる。

「エメリーちゃん、向こうでおとなしく寝ようよ」

琴音が苦笑いしながら、エメリーヌを寝室に案内していく。

「そういう訳だから、今日はそろそろ……………」

途中で振り返り、俺に向かって言ってきた。

時計をしてみる。

もう12時近くだった。

ちょっと長居しすぎたようだ。

「わかった。それと、今日はありがとな」

「うん」

俺は、お礼を告げた。

俺は玄関に行き、靴をはく。

そして玄関のドアを開け、外にある自転車にまたがった。

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

見送りに来てくれた琴音と、あいさつを交わし、勢いよく漕ぎ出した。

手を振る琴音。

俺はそれに答えるように、手を振り返す。

琴音は、俺の姿が見えなくなるまで、手を振り続けてくれた。

俺は、琴音のそんな気遣いが……とても嬉しかった。

第九話  
完

第九話 その言葉は、優しさゆえの（後書き）

はいどうもーw

まず最初に、俺日九話。ご愛読ありがとうございましたー。

というわけでね、海君追い詰められ編完結！！と言う事になりますw

いかがでしたでしょうか？

琴音の優しさを、感じ取ってくれたかな？

秋君は今回は陰から見守る係ですねww

しかし、コロツと雰囲気を変える天才ですね。海君はww

あと、海君が責められていた時に、

琴音歩いてたじゃん！！と思った方もいると思いますが、

そこは、次回で^^

次回9・5話では、

す m ( ) ( ) m 琴音視点で話を書こうと思いますので、応援よろしくお願いしま

それでは、

次回をお楽しみにー!!!

第9・5話、それは、優しさがあってこそ、（前書き）

どうもです^^^

今回は一連のいざいざを琴音視点でお楽しみください^^

では、ごきげん！

第9・5話　それは、優しさがあったらその

「何だっただよ、めんどくせえ。」

そう海兄いが呟いた。

エメリイちゃんは、謝るのに必死で気づいていないみたいだ。

だが、真剣に海兄いの言葉を待っていた私には、聞こえた。

秋兄いも聞こえたみたい。

秋兄いが、海兄いを叱っている。

しかし、海兄いは認めようとはしない。

いや、心では分かっているのだと思う。

でも認めない。

これは、海兄いの悪い癖だ。

「そんなもん知るかよ、勝手に謝られて、こっちは迷惑してるんだ」  
秋兄いが、何度も海兄いを叱る。

そんな秋兄いの言葉に、出てきた海兄い言葉がこれだ。

言い過ぎているのは、自分でも分かっていると思う。

でも、やっぱりダメだ。

これじゃ、後々損するのは海兄いのほう。

しかしそうなってからじゃ遅い。

エメリイちゃんのためにも、海兄いのためにも、ここは強く言っておこう。

「エメリイヌ、泣くなよ……俺が悪かつ」もういいよ。」

そんな、その場しのぎで謝っても、あとでまた同じことを繰り返す。そんな事の無いよう、海兄いには自分で分かってもらわないといけない。

「もう謝らなくていいよ、エメリイちゃん。海兄いなんか謝るこ

とないよ」

海兄いには悪いけど、今言っておいた方がいい。

「海兄い。もう帰って、頭冷やしてきなよ」

それで、自分のしたことをよく考えて。

とりあえず、考える時間というものがあつた方がいい。

エメリイちゃんを、家に連れて行こう。

「こ、琴音！ ちょっと待ってくれよ！！」

「なに」

「あの、悪かつ…たよ……」

海兄いなら大丈夫。

ここで謝れるのだから。

「琴音、悪かったから、俺が悪かったから許してくれよ！！」

あとは一人でじっくり悩んで、その答えを私に聞かせて。

海兄いなら、大丈夫だから。

第9・5話

「それは、優しさがあってこそその」

エメリイちゃんの過去を見た後、私たちはまた、家に向かって歩き出した。

だが、すぐに足の異変に気づく。

「いたっ」

そう言えばそうだった。

私は足を怪我していたんだ。

なぜ今まで普通に歩けたのだろうか。

多分、海兄いの事で頭がいっぱいだったからだと思う。

アドレナリンと言っやつかもしれない。

「大丈夫か？」

秋兄いが、足を押さえてしゃがみ込む私を心配そうに見ている。

「大丈夫……じゃないかも……っつ」

足を撫でると、激痛が走った。

本格的にヤバいかも知れない。

そんなとき、エメリイちゃんが言った。

「治すことはできないかもなんヨけど、少し良くするだけなら出来るんヨ?」

「マジか? じゃあ頼むよ」

秋兄いがエメリイちゃんと何かを話をしているが、痛みでそれどころではなかった。

すると突然、呪文を唱え始めるエメリイちゃん。

「コリクサコサクリエメラルドウ!! はあ!! 治療能力ヒーリング!!」

呪文を唱えたと同時に、温かい光が私の足をつつみこむ。

そして、凄い勢で痛みが引いていった。

私は立ち上がり、その場でジャンプを試してみた。

「すごい。全然痛くないよ」

どんなに飛んだり跳ねたりしても、全く痛くはない。

正直、驚いた。

「軽い打撲程度になっているけど、無理しちゃだめなんヨ？」

「わかったよ。ありがとね、エメリイちゃん」

軽い打撲？どれどれ。

私はためしに、怪我をしてさっきまでズキズキいたんでいた所を触ってみた。

すこしズキツつとする。

たしかに完全に治ってはいないようだ。

「それにしても、超能力ってすごいな」  
たしかに。

効果絶大だ。

「じゃあ、帰るぞ」

「うん」

私たちはまた、歩き出した。

外灯により照らされる道。

そこですれ違う人々にあいさつをかわす。

それから約20後、家に着いた。

「ただいま、お母さん」

「おかえりなさい」

台所の方で声がする。

玄関のドアを開け、靴を脱ぐ。

続けて、秋兄い、エメリイちゃんも入ってくる。

そういえば、エメリイちゃんの事をどう説明しよう。

全く考えていなかった。

こんな小さい子を勝手に連れて来て、怒られるに決まっている。説明した所で、宇宙人なんて信じてくれないだろう。

「秋兄い、エメリイちゃんの事、どうしよう?」

一人で考えていてももちが明かないので、秋兄いに聞いてみた。

「あ、そう言えばそうだな、どうするか?」

やっぱり、秋兄いも忘れていたらしい。

どうしよう。

悩んでいると、突然秋兄いが言った。

「おふくろー!! ちよつと来てくれー!!」

「ちよつと、いきなり呼んでどうするの!?! まだ何も考えてないのに!」

秋兄いの思いがけない行動に、思わず大声を出してしまった。

そして、当然のごとく、お母さんの足音が聞こえる。

やばい、こっちにくる。

まあ、呼んだのだから当然なんだけど。

だんだん近づいてくる足音とともに、お母さんが近づいてくる。

そして、その足音はとうとうこっちまで来てしまった。

「どづしたのよ?」

お母さんに陽気な声。

そして、その目線がエメリイちゃんの方へと向けられる。

「……その子……どこの子?」

エメリイちゃんの姿を見たお母さんが、至極当然の疑問を口にする。

もう、私は知らない。

秋兄いが呼んだのだから、秋兄いが何とかすればいいんだよ。

そして、その秋兄いが答える。

「コイツ、道に迷った俺たちを超能力で助けてくれてさー」

ちよっと!!!超能力って言っちゃったよ!?

信じてもらえるわけないでしょ!?

「なに馬鹿なことを言ってるのよ、超能力なんてあるわけないじゃない」

お母さんは信じようとはしない。

まあ、これが普通の反応だね。

すると、エメリィちゃんがお母さんに向けて喋る。

「ウソじゃないんヨ、全部本当の事なんヨ」

「コイツ家出してきたみたいでさー、行く所が無いみたいだから、しばらく家で預かっていてくれないか?」

この、アホ兄ー!!家出なんて言ったら絶対だめでしょ!?

絶対怒られるよ!!

「……お父さんや、お母さんは?」

ほらほら、お母さん呆れてエメリイちゃんに聞くことにしちゃったよー!!

『わが子ながらアホだなー』とか思っている顔だよ!?

失望してるよ!?

「両親には、許しを得ているんヨ」

と、エメリイちゃんが言った。

どーすんの!!秋兄いのせいでやばい状況だよ!!

ほら!お母さん、無言になっちゃったよ!?

もっと他に言い方あったよね!?!もっとうまい言い方が!!

正直者すぎるよー!!!!

お母さん考え込んだじゃったよ!!

しばらく無言で考え込んでいたお母さんが、とうとう口を開く。

「……そうなの、ならいいわ」

「ええええ!!!!!!の!?!?ねえ!!!そんなんでいいの!?!?」

お母さんの予想外の答えに、私は動揺を隠せなかった。

「だって、親がいつて言ったのなら、私に止める理由はないじゃない？」

「いや、あるよ！…十分あるよ！！ そんな簡単に信じちゃだめだよ！…！」

はあ……なぜ私は自分の首を、自分で絞めているのだろう。

ただとお母さん、本当にそれでいいのですか？

私は、少しお母さんが心配です。

「いいのよ、可愛いんだから」

左様でございますか。

なら別にいいです。

もう何も言いません。

気まぐれなお母さんのおかげで、なんとか大丈夫そう。

とりあえず、一番心配していたことが無くなってよかったよ。

「あ、そうだ、お母さん包帯なんかある？」

私は、足のけがの事を思い出し、お母さんに尋ねる。

「どうかしたの？」

心配そうな顔で、お母さんが私を見ている。

「いや、足捻っちゃったみたいで……今は痛くないけど、一応ね」

凄く心配そうなお母さんを、安心させるように言った。

お母さんは、『ちょっと待ってて』と言って包帯を取りに行ってくれた。

「よし、エメリィヌ。とりあえず俺の部屋で遊ぶかー」

と、秋兄い言いながら、二階へと上がっていく。

「やったー、なんヨ」

エメリィちゃんが秋兄いについて行った。

その顔はとても嬉しそう。

しばらくすると、お母さんが戻ってきて、包帯を巻いてくれた。

「ご飯温めたら呼ぶから、琴音も遊んでいらっしやい」

そう言って、台所へと戻っていく。

そつだ、今9時ぐらいだった。

夕飯作って待っていてくれたんだ。

お母さんには悪いことしちゃったなあ。

そう思っていると、突然電話が鳴った。

「琴音ー、出てくれるー？」

「はい」

電話は、ちょうど玄関の近くだ。

私は立ち上がり、電話の所まで行って受話器を手に取った。

「もしもし、竹田ですが……」

『……もしもし、俺……だけど……』

この声は、海兄いだ。

多分さっきのことだろう。

「……………海兄い、何か用」

私はまた、怒っている声を作る。

『あの……………えっと……………さっきの事なんだけどさ』

もちろん、さっきの事とはエメリイちゃんの謝罪の時のこと。

私は、海兄いが次の言葉を発するまで待った。

「……………」

『その……………エメリイー又はどんな感じだ……………？』

海兄いが、エメリイちゃんの様子を聞いてきた。

その声は、どこか暗い雰囲気を漂わせている。

さっきの事が、よほど応えたのだろう。

「今は普通だよ。秋兄いと遊んでる」

『そ、そうか……。良かった』

私の言葉に、海兄いが安息の息を漏らす。

「……………それを聞きたくて電話してきたの？」

なかなか話が切り出せない海兄いの後押しをする。

『い、いや……………それもあ……………けど……………』

受話器越しに、海兄いの息を吸う音が聞こえる。

そして、すぐに海兄いの声が聞こえてきた。

『琴音……………俺が悪かった……………ごめん』

海兄いが、謝ってくる。

だけど私は、そんな海兄いの言葉の真意を確かめるため、聞き返した。

「……………それだけ？」

『……………俺、サイクリングとかで疲れてて……………それで……………本当にごめん！』

その海兄いの言葉には、不思議と、気持ちが感じられなかった。

何と云うか、心の底から謝って言う感じではない。

「……………で、海兄いの言いたい事は、それだけなの？」

私は確認のため、もう一度聞き返した。

『えっと……………あの時は、俺どうかして……………だから……………その……………』

海兄いの言葉からは、謝るよりも、私に許して貰う方に力が入っている。

心では本当に悪かったと思っているだろうけど、無意識に内にそっちの考えになってしまっているみたい。

海兄いごめん。

ちょっと、きつい言い方をするけど、海兄いなら大丈夫だよな？

「……………海兄い、私はいい訳が聞きたいわけじゃないよ。」

正直、この時に私は嫌な奴だったとは思うけど。

でもやっぱり、こう言う時はキッチリとしなきゃダメなんだよ。

海兄いだって分かっているはず。

海兄が一人で考えたのだから、後は私が後押しをしてあげなくちゃ。

「別に私は怒っている訳じゃない。ただ、海兄いの気持ちを知りたいだけ。今の海兄いからは、あまり気持ちが伝わらないよ」

そんな私の言葉に、一言だけ聞こえる。

『……………じめん』

海兄いはやっぱり凄い。

自分の間違いをすぐに認めた。

声で分かる。

普通なら、そんなすぐに自分の悪い所を認められないよ。

もう大丈夫だとは思うけど、最後に、一つだけ。

「海兄いは、一つだけ勘違いしてるよ」

海兄いは静かに聞いている。

そんな海兄いに、私は続けて言った。

「私に謝ったって、エメリイちゃんの中には届かないんじゃないかな」

私の言葉を聞いた海兄いは、言葉を失っているみたいだった。

少し言い過ぎたかも知れない。

私がそう思った時、

『………琴音………ありがとう』

その言葉には、ちゃんと気持ちがかももっていた。

ちゃんと、海兄いは分かってくれた。

私の言葉に文句も言わず、静かに聞いてくれた。

海兄い、頑張れ。

「うん。海兄いの考えがまとまるまで、私、待ってるから」

私は、海兄いにそう告げると、受話器を置いた。

今の海兄いだったら大丈夫。

でも、ちょっと偉そうに言いすぎたかもしれない。

海兄い、ごめんね！

そのとき、お母さんの声が聞こえた。

「ごはんよー」

お母さんの優しい声とともに、ごはんのいい匂いが鼻をくすぐる。

私は、お母さんが待っているであろうリビングに向かった。

リビングのドアを開けると、刺激的な匂いが漂う。

そして、テーブルの上にはきれいに並べられたカレーライス。

とてもおいしそう。

そのとき、階段をドタドタと降りてくる音が聞こえ、すぐに秋兄い

とエメリイちゃんが来た。

「お、今日のはうまそうだな」

食卓に並べられたカレーライスを見て、秋兄いが分かりやすいほどに喜んでいる。

まるで子供みたい。

「やったー、カレーなんヨ」

エメリイちゃんもとても嬉しそう。

それぞれ、いつもの場所に座り、エメリイちゃんは、秋兄いの隣に座った。

なんか、凄い仲良くなっているみたい。

それよりも、今は夕食をたべよう。

「いただきまーす」

私は、両手を合わせながら言い、カレーを食べ始めた。

「そついえばさ、お前、カレー食べたことあるのか？」

とてもおいしそうに食べているエメリイちゃんに、秋兄いがきいた。  
たしかに、エメリイちゃんの星にはカレーなんてあるのかな。

私も気になってきた。

「食べたことはないけど、本で読んだから知っているんヨ」

「へえ」

地球の食べ物が書いてある本とかあるんだ。

ちょっと見てみたいかも。

「ずっと前から食べてみたかったんヨ」

「味はどうかしら？」

お母さんが、エメリイちゃんに聞いた。

「こりゃたまらんヨ」

「あらそう、なら良かったわ」

エメリイちゃんの言い方に、思わず笑ってしまったお母さん。

もうすっかり馴染んでいる。

……本当にこんな簡単でいいのかな……？

私は少し、どこか納得ができなかった。

でも、まあ、エメリイちゃんも楽しいみたいだし……まあいいか。

「おかわりー」

すぐに食べ終わったエメリイちゃんが、お母さんにお皿を差し出す。

食べるの早いなあ。

「はいはい」

差しだされた皿を受け取り、隣の部屋の台所へと向かうお母さん。

お母さんも、もう一人娘が出来たみたいで嬉しいんだと思う。

……そんな話を話しながら、夕飯を食べ終えた。

エメリイちゃんは、あれから五回おかわりをしていた。

あの体のどこに入るのだろうか。

とにかく驚いたよ。

お母さんが、皆の食器を片づけ始める。

「あ、私も手伝うよ」

「あら、ありがとう」

自分で食べたものぐらい、自分でやるのが当然だからね。

お母さんと一緒に、食器を持って台所まで行き、二人でそれを洗う。

四人分だけなので、すぐに洗い終わった。

「手伝ってくれてありがとう。エメリー又ちゃんと一緒にお風呂でも入ってらっしゃい」

濡れた手を、白い無地のタオルで拭きながら、お母さんが言った。

「わかったよ」

私は返事をして、二階で秋兄いと遊んでいるエメリーちゃんを呼びに行った。

海兄から電話があつてから二時間近くがたった。

「あいつこねえし、俺は寝るよ」

大きなあくびをして、自分の部屋のベットに横になる秋兄い。

「うん、私はもう少し起きてる」

海兄いなら、多分来る。  
そんな気がする。

「あまり夜更かしするなよ？エメリーヌ」

「フツ、それはどうかなんヨかな？」

「あまり遅くならないようにするよ」

さつきまで楽しく遊んでいたこともあつてか、どつちやら眠れないみたい。

まだまだ元気のエメリーちゃん。

あんなにはしゃいでたら、普通疲れて眠くなると思つんだけど……

まあいいや。

「じゃあ寝るわ、おやすみー」

「寝るなんヨ！今寝たら蹴るんヨ！！」

………とつても元気。

「まだまだだな、俺の眠りはそんな事では妨げられないぜ！！」

はあ、眠いんじゃないの？

眠いにもかかわらず、エメリイちゃんとふざけあっている秋兄い。

「くそつ、なかなかやるんヨね！なら、今寝たらずっと、ホラー映画の悲鳴の所だけを聞かせ続けてやるんヨ！！！！」

「おい、それだけはやめてくれ！マジで死ぬ！！」

秋兄いが、慌てて飛び起きてエメリイちゃんを説得している。

まったく………すごく怖がりなんだから。

まあ、怖がりじゃなくても嫌だけどね。

「つーか、お前ら早く部屋から出てけよ。俺は眠いんだよ」

「あ、ごめん。おやすみ」

部屋の電気を消し、秋兄いの部屋から出て、階段を下りる。

リビングをのぞくと、お母さんが寝てしまっている。

よほど疲れていたのだろう。

お母さんは、内職をしている。

なんでも、『趣味の一つぐらいはあった方がいらしく、どうせするならお金になる方がイイじゃない？』らしい。

そんな感じで一年前に始めた趣味を、私もたまに手伝ったりしている。

あの飽きっぽいお母さんが、なぜ一年も続くのかと聞かれたら、『お金』と答えることしか出来ない。

だけど、それでも良く続くなあと思う。

そんな事もあって、だいぶ疲れているみたい。

「お母さん、ご苦労様です」

私はそんなお母さんに毛布をかけ、台所で海兄いを待つことにした。

「エメリイちゃん。眠くないの？」

隣で台所にある椅子に座りながら、足をぶらぶらさせているエメリイちゃん。

「大丈夫なんヨ！」

「そうなんだ」

たしかに、眠そうには見えないね。

見るからに遊び足りない感じ。

元気だなあ。

それからも、エメリイちゃんと どうでもいいような話をしながら海兄いを待った。

しばらくしてから、ふと、時計を見してみる。

時計の針は、11時丁度を指していた。

『ふあ〜』と、エメリイちゃんが大きなあくびをする。

エメリイちゃんも眠たそうだし、どうしようか悩んでいた時。

外で『キィィ』と言う自転車のブレーキの音が聞こえた。

私は、窓から外の様子を確認すしてみた。

そこには、息を切らせて自転車に乗っている海兄いの姿があった。

やっぱり、海兄いは来た。

少し嬉しくなり、慌てて玄関に走り、ドアを開けた。

ドアをかけた瞬間、海兄いが驚いたようにこちらを見る。

そして、海兄いが言った。

「琴音、足大丈夫なのか？」

心配そうな顔で、聞いてきた。

足？

そう思いながら、自分の足に目線を落とす。

その足には包帯が捲かれていた。

「ああ、エメリイちゃんの超能力で、なんとか……………ね」

すっかり忘れてた。

思い出したら、ちょっと痛くなってきたかも。

「なるほど」

「まあ、治ったわけじゃないけどね」

完全に治すと、それが癖になって体の抵抗力が弱くなるのだとか。

『だから、本当につらい時ぐらいしか、この超能力は使わないんヨ』  
と言っていた。

とにかく説得力があったので、あまり頼らないようにしよう。

そのとき、夜中の冷たい風が、体を震わせる。

すこし寒い。

「とりあえず、あがって」

このままだと風邪をひきそうなので、海兄いを家に上げる。

そして、台所へと案内した。

台所に着いたとき、海兄いがエメリイちゃんを見て言った。

「よく、エメリイヌに合うサイズがあったな」

「ん？ ああ、パジャマの事ね。私のお古だよ」

なんか海兄いって、普通の人なら気にならないような事を聞いてくるよね。

確か昔も、『なぜ指って五本あるんだろうな？』とか言っていたよ  
うな気がする。

まあ、誰も予想できないような事を普通にやるから、海兄いと一緒にいて飽きないんだけどね。

そして、海兄いは時間の事を思い出したのか、エメリイちゃんに言った。

「エメリイヌ？ こんな時間まで起きていて大丈夫なのか？」

普通は、パジャマよりもそっちが最初だと思っただけだなあ。

エメリイちゃんまで起きてるのは、思っけなかったみたい。

静かに驚いている。

海兄いが来たのが嬉しかったのか、エメリイちゃんは少し嬉しそうに答える。

「ウチは夜行性なんヨ」

「へ、へえ」

海兄いを見ると元気になったのか、すっかり眠気が吹っ飛んだみたい。

また、いつもの調子に戻るエメリイちゃん。

海兄いもまた、そんなエメリイちゃんを見て、少し安心しているようだった。

「ごめんね。こんな所で。他の部屋はみんな寝てるから」

せつかく来てくれたのに、台所は無いだろーと思ひ、とりあえず謝っておく。

「いや、俺のほうこそ夜中に突然……ごめんな琴音。エメリイヌも起きていてくれてたみたいで」

海兄いが言った。

その言葉には、もう前のような感じはしない。

二時間ちょっとで、すっかり変わった。

何と言うか、全体的に優しいオーラが…上手く説明ができないが、雰囲気が変わっている。

そしてとうとう、海兄いが切り出す。

「……………琴音、エメリイヌ。話があるんだけど」

その顔からは、真剣さがすごい伝わってくる。

そんな海兄いの言葉に、私は優しく答える。

「……………なに？」

「……………なんヨ？」

エメリイちゃんも、茶化さないで聞いている。

所かまわずふざけている訳ではないらしい。

海兄いは椅子から離れると、まず私のほうを向き頭を下げる。

「じゅめん…！」

ただ一言だけ。

だけどその一言には、海兄いの気持ちのすべてが詰まっていた。  
海兄いはやっぱり凄い人だ。

秋兄いの親友なのが信じられないほど。

そんな海兄いの言葉のどこに、許せない部分があるのだろうか。

そんなもの、あるわけ無いに決まっている。

「……………うん。許してあげる」

私も海兄いに向けて、すべての気持ちを込め言った。

「いろいろありがとだな、琴音」

私の言葉を聞いて、海兄いがゆっくりと頭をあげる。

その顔は、とてもスッキリした表情になっている。

だがすぐに、真剣な表情に戻った。

そしてエメリイちゃんに向き合い、また頭を下げる。

それと同時に、エメリイちゃんも凄く真剣な表情になる。

「あと、エメリイヌ。ごめん。本当に悪かった」

その言葉をきいて、エメリイちゃんは優しく微笑んだ。

「いいんヨ」

エメリイちゃんは、いつもの調子で言った。

頭をあげた海兄いの表情は、心から安心した表情。

そして、私のほうを見ると、海兄いと言った。

「後で秋にも、俺が謝ってたって伝えてくれるか？」

「うん」

私は、力強く頷いた。

そのとき、ふと気配を感じ、ドアのほうを見た。

閉めたはずのドアが、少しあいている。

本当に少しだけだ。

何かと思い見ていると、そのドアがゆっくりと閉まる。

そのあと、ゆっくりと。

そして、静かに階段を上がる音が聞こえた。

そのあとは、海兄いのおなかの音で、一気に場がなごみ始めた。

そんな海兄いに、おにぎりを作ってあげ、色々楽しく話もした。

そして、はしゃぎすぎて調子が悪くなったエメリィちゃんを寝室で寝かせ、その場は解散となった。

そのあと、私は海兄いを見送るために、玄関の外についてった。

「おやすみ」

海兄いにあいさつをする。

「ああ、おやすみ」

自転車をまたぎながら、海兄いもそれにこたえる。

勢いよく漕ぎ出していく海兄いに、何も言わず静かに手を振る。

すると、海兄いも手を振り返してくれた。

私は、海兄いの姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

その時、突然後ろから声がする。

「あいつ行ったか？」

「うわっ！！」

柄にもなく驚いてしまった。

声のした方を見ると、秋兄いが、パックの牛乳を持って立っていた。

「もう、飲むならコップ使いなよ」

「いいじゃねえか、残り少なくて、全部飲める時しかやってねえんだから」

「まあそうだけどさ」

そのまま飲むのはやめてもらいたい。

なぜなら、飲みながら歩き回るもんだから、所々にこぼれているから。

掃除するのは私なんだよ？

というか、いい年してこぼさないでよ。まったく。

「そうそう、秋兄いに謝ってたよ。海兄い」

私は、海兄いに頼まれた事を伝えた。

「ああ、知ってる」

「やっぱり、秋兄い聞いてたんだ。」

ドアの前で立ち聞きしていた秋兄い。

なんだかんだ言っても、やっぱり気になっていたんだと思う。

でもなんで、陰でこっそり聞くような真似をしたのだろうか？

「秋兄いも、顔出せばよかったのに」

なんか無性に気になったので、聞いてみた。

「俺は、あの張りつめた雰囲気苦手なんだよ」

そう言つと、牛乳を飲み始めた。

やれやれ。

まあ、秋兄いにも色々考えがあつての事だと思つ。

そういうことにしておく。

海兄いの事が終わつて気が抜けたのか、急に睡魔が襲つてきた。

「とりあえず、眠いから寝るよ」

「おう、おやすみー」

「おやすみなさい」

秋兄いと、あいさつをかわし自分の部屋に向かう。

そして、ベッドの布団にもぐりこんだ。

今日は色々あつたなあ。

サイクリングに行つて、エメリィちゃんに会つて。

海兄いとも言い合つて。

色々楽しい一日だった。

明日も楽しくなるといいなあ。

今日よりももっと

そう願いながら、私は目を閉じた。

第9・5話 完

第9・5話、それは、優しさがあってこそ（後書き）

追記：

どうもです^^^^愛読ありがとうございます^^

少々長くなってしまいました^^;

呼んでくれた方々には感謝しています^^ありがとうございます。

最後の所の、『目を閉じた』は、けしてご臨終したわけではありませんからねw

と、いうわけで、次回は何が起こるのでしょうか？

では、次回をお楽しみに!!!

第十話　チンパンジー以下、人間以上のエセコンピュータ（前書き）

どうも、突然ですが、一つ変えたい所があります。

それは、エメリイーヌの皆の呼び方です。

エメリイーヌは、海なら海。琴音なら琴音。と呼んでいましたが、

この度、漢字ではなくカタカナに変更します。

なので、海ならカイ。琴音ならコトネ。と言うわけです。

と、言うわけで、よろしくお願いします。

第十話　チンパンジー以下、人間以上のエセコンビ

「カイ、起きるんヨー!!」

その声が聞こえた。

「ぐふおあああああ!!!」

そのあと急に、腹が苦しくなると同時に、激しい痛み。

何事かと思い、俺は重いまぶたを開いた。

目を開けると、俺の腹の上に約一名。

しかも、飛び跳ねているならまだしも、プロのアイススケート選手もビックリの五回転ジャンプを決めている。

腹の上で飛びあがった時の衝撃はもちろん、腹の上に回転しながらの着地した時に、腹の皮膚がねじ切れそうになる。

「お？起きたんヨか」

俺の悲鳴を聞き、ガキンチヨが腹から飛び降りようとしている。

お前なんか、飛び降りた時に、滑って頭打って記憶でもなくしてしまえ。

俺は願った。

「チヨイエー！」

謎の掛け声とともに、ガキンチヨがついに飛び立つ。

と、思いきや、ゆっくりと安全に、足から下りやがった。

さっきの『チヨイエー！だぴょくん』は、何だったんだ。

飛び降りる為に気合を注入したんじゃないのか？

「カッチヨイエイ掛け声に、アホみたいなの付け足すのはやめるんヨ。付け足すにしても、だぴょくんはないんヨ」

「そんな事より、腹の上で飛ぶのはやめろっおおお！……！！！」

俺は、真っ赤になった腹をさすりながら飛び起きる。

皆さんも想像してみてはくれないだろうか？

寝ている間は力が抜けている。

その時に行きなり、重さ約20kgぐらいのガキンチヨが飛び乗ってきたら……

そして、腹の上で華麗な五回転ジャンプをされたら……

そう。その衝撃により、ひ弱な人間なら、高確率で内臓裂傷を起すであろう。

もちろん、皮膚も巻き込んで。

まったく…、俺が（自称）ひ弱な部類に入らない人間だったからいいものを。

胃を圧迫するから、昨日食った味噌カスタードプリンがリバースする所だったぜ。

晩飯も一緒に。

「やっと起きたんヨか」

こんな嵐のような朝が、三日前から続いている。

なんで……こんな奴に同情してしまったのだろう

## 第十話

くチンパンジー以下、人間以上のエセコンビ

たしかあれば、三日前の昼の出来事。

サイクリングに行った日から、丁度二日後だ。

「いやー、今日はいい天気だ！こつ毎日晴れてると、散歩に行きたくなるなあ〜」

その時の俺は、そんな感じで散歩に出かけたんだっけ。

そして、散歩を始めて、しばらくした時のこと。

俺は、冷蔵庫の中が空だった事を思い出し、散歩ついでにスーパーによる事にした。

そんな感じで、偶然近くにあった、行った事もないスーパーに足を踏み入れたんだ。

しかもそのスーパー、運のいい事にレタスのタイムセールをやっていたんだよ。

なんと、一玉 5円。

そして俺は、おばちゃん達が入り乱れる中、なんとか一つだけレタスを確保。

そのレタスで何が作れるかを必死で悩み続け、サラダに決定した。となると、キュウリも欠かせなくなるわけ。

そんな感じで、晩飯の買い物ですませていった。

買い物の途中で、『おひとり様一点限り!』の文字が目に入り、卵もかごの中に。

一通りかごの中に入れおわり、レジに向かう。

その時、遠くの方に新商品と書かれた物があった。

自販機とかでもそうだが、『新発売!』『新商品!』

などと書かれていたら、俺は必ず買ってみる派だ。食料系に限るが。

そういうわけで、俺はその場所に向かう。

そして、そこにあったのは、味噌カスタードプリンだった。

「なんだよこれ? プリンに味噌!? 正気かよ!?!これは食べてみたくなるな」

そんなノリで、そのプリンをかごに入れ、レジに向かった。

俺が向かったレジは、男の人が担当だった。

見た感じ、20代だろう。見るからにやる気がなさそうだ。

そんなあんちゃんが次々と、俺のかごの中の物をレジに通す。

『レタスが一点』『卵が一点』

その声は、メチャメチャ不機嫌そうだ。

なんでこんな奴がレジやってんだろう。

俺がそんな事思っているのも知らずに、ずっと不機嫌そうのあんちやん。

『キュウリが一点』『トマトが一点』

おいおい、よく見るよ。

キュウリとトマトは三点ずつだろうが……！

どんだけ適当なんだよ。

一点と言いながらも、値段はちゃんと三つずつの値段だ。

それからも、何点あるのが一点と言いつける あんちゃんの声聞き続ける。

そのとき、レジのあんちゃんが新商品のプリンを手取る。

そういえば、値段見てなかったけど…実はめっちゃ高いとか？

そう思ったが最後、俺は、プリンの値段が気になって仕方がなかった。

プリンがレジに通されると、『ピッ』っと言う音と共に、値段が表示される。

200円

なんだ、それほどでもなかった。

心から安心だ。

その時、レジのあんちゃんの声が聞こえた。

『味噌カスプリンが一点』

あららー！？略しちゃったよ、味噌カスタードプリン！

大変残念なお名前と化しちゃったよ！？

どんだけ適当だよ、レジのあんちゃん。

『以上で、2280円でございます。』

そんなあんちゃんに呆れながらも、俺は金を払う。

俺はレジを離れると、袋に先ほど買った物たちを詰め込み、スーパーを出たのであった

「以上、これが俺とプリンのお会いだ!」

「お前はアホなんヨか!？」

どや顔で言い放った俺に、エメリィヌが全力でツツコんでくる。

「アホとはなんだ! とても美味しかったんだぞ? 味噌カスタードプリン!」

そう、何と表現したらいいのか分からない。

「カスタードの甘みに、味噌のしょっぱさが合わさって、クリーム  
の甘みが増えて何と言うハーモニー!! これ考えた奴マジ神だわ!」

うますぎて、あの後プリンだけ買いに行った。

なので、現在冷蔵庫にはプリンが大量にある。

あまりの美味しさだったもんで、つい。

この前食べた奴なんか、想像を絶するまずさだったもんで、少し心配していた分余計にうまく感じた。

この前の『赤飯 de おはぎ!』なんか、クソ不味くて。

そういえば先月の『卵のいらぬオムライス!』なんかも微妙だったな。

冷凍のチキンライスに付属のマヨネーズかけたただけだった。

その裏面には、『同じ卵だから温めれば大丈夫!!!』などと書いてあったが、大丈夫なわけねえだろ!!!!!!

そうそう、この前の『気持ちWAこしあん!』なんか最悪だよ。

【こしあん】なのは気持ちだけで、実際の所は【つぶあん】だったからな。

もう、この会社の商品なんか買わねえ。

ちなみに、上記三つの商品は、すべて同じ会社。

絶帯真珠亥（株）株式会社の商品だ。

まったく…会社名で気づくべきだったんだ。

なにせ、絶帯真珠亥せつたいますいなんだから。

「『過去の残念な商品ベスト3』の紹介なんかやってないで、ウチがなぜ、カイ（海）の家にいるかの話しをするんヨ」「

「うみの家？」

「【うみ】じゃなくて【かい】！！海カイの家なんヨ！！このドアホ！！  
いかれ耳！！！」

凄い形相で叱られました。

つかエメリィー又って…

「ちょっと、関西弁入ってるような気が…」

自分の事もウチって言うてるし……。

くくなんヨ！ってのも、なんかそれっぽいし。

向こうの人って

『ウチはたこ焼きが大好きなんよ』

みたいなこと言ってそうだし…。

俺がそういうと、顔を真っ赤にして反論してくるエメリィヌ。

「う、ウチの喋り方なんかどうでもいいなんヨ！そ、それよりも、ウチの住宅事情を！」

何だよ住宅事情って。

てかやっぱり。

「お前、凶星だろ？どーせ、本かなんかで見て、気に入った。みたいな感じだろ？違うか？」

俺は今、モーレッツにニヤニヤしていると思う。

なぜなら、エメリィヌの慌てっぷりが…、からかうのが面白いからだ。

「だ、だからウチの事は…」ほら、またウチって言った』

必死に言い訳をしているエメリーヌに、俺は無情にも言葉をかぶせた。

「だ、だから、その…ウ、わたしの事は、どうでもいいんヨ…じゃなくて、いいん…いいでしょ…！」

必死に、ふだん使い慣れない言葉で反論してくる。

エメリーヌは恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にしながら少し涙目だ。

ちよっくら言い過ぎたかも知れない。

俺は少し可哀そうになってきたので、エメリーヌに謝ることにした。

「悪かったよエメリーヌ。喋り方なんて、自由だもんな。たとえ関西弁を真似して、そんなエセ関西人みたいな喋り方でも、お前は  
お前だ！気にするな…！！」

いやあ、我ながらナイスフォロー！

これでエメリーヌも元気になる……ってあれ？

エメリーヌを見ると、プルプルと小刻みに震え、恥ずかしさとは別に、顔を赤くしている。

もしかして…怒ってらっしやる？

そう思ったが時すでに遅し。エメリィヌの怒りは頂点に達し、エメ火山の噴火した音が聞こえた。…気がした。

「うっさいんヨ！！ 大体、この喋り方と言ったらたこ焼きなんて、考え方が昭和なんヨ！！ このおやじ！！ 昭和バカ！！ どうして気にしてる事をピタリピタリと当てて、さらにそれをえぐるんヨか！？ 信じられないんヨ！！！ 人をバカにする事しか出来ない低知能アタマ！！ カイはチンパンジー以下の人間なんヨ！！このバカタレ！！！！！！」

ハアハアと、肩で息をするエメリィヌ。

呼吸が安定すると、鋭い目つきで睨んでくる。

俺は相当マズイ事をしたようだ。

だがな…そこまでバカにされたとなっちゃ、俺のプライドが黙っちゃいねえ！！！！

おいエメリィヌ！！まず一つ目だ！全国の昭和生まれと、おやじさんに謝れ！！

考え方が昭和だと！？昔秋に言われた事を、一文字の狂いもなく言っただけじゃねえ！！！！ かなりへこんだじゃねえか！！ しかもお前、ちやっぴり自分で認めてるじゃねえかよ！！この、エセ関西人！！！！

という目で、睨み返す俺。

今のエメリーヌにこんな事、恐ろしくて告げられない。

こんなこと言ってしまったら、何されるかわからん。

エメリーヌの頭の血管が、プチッってなるかもしれない。

最低でも殺される。今の俺には、自ら死亡フラグにツッコんでいく  
勇氣はない。

だがエメリーヌは、不敵な笑いを浮かべて言ってきた。

「フッフッフ、その目でカイが何を思っているか、バッチリ分かったんヨ」

なんだと！？ いや、分かるわけない。

俺は、喋らないように注意したから喋ってはいないはず。

なるほど。これは、挑発か。挑戦状か。

なら、売られたケンカは買うまでだ！！！！

「俺の考えていることが分かっただって？ ウソが下手くそすぎる  
だろ」

そんなウソじゃ、チンパンジーですらだませないぜ!!

だがしかし、エメリイー又は表情を変えることなく言ってきた。

「なら言い当てるんヨ。どうせ、エセ関西人とか何とか思ったに決まってるんヨ」

ギクツ!!

「昔、シユウにも言われたんヨね？ この、エセ平成生まれ!!!!」

ギクギクツ!!!!

「な、なんのことやら？ 俺にはサツパリ」

くそっ、我ながら演技下手だな!! 動揺を隠しきれない!!

これじゃ、チンパンジーじゃねえか!

だがしかし、エメリイー又は…

「え？ 外れたんヨ？ 絶対あつてると思ったのに……」

さっきまでの怒りとは一変。

外れていた驚きにより困惑している様子。

そう、その隙を見逃す俺ではない。

やっぱりハツタリじゃねーか！

そう言おうとした。

だが、違和感。

俺の直感が、何かを訴えている。

俺は、エメリィーヌをもう一度見つめた。

…あ！？ あいつー！！

そう、エメリィーヌは、勾玉を首にかけていた。

そして、手で勾玉の光を隠している。

秋たちから、勾玉がないと超能力が使えないと聞いた。

そして、エメリィーヌが家に来た時、普段あまり使わないからと引出しにしまっていたはず。

たしか、朝も付けてなかった。

と、言うことはだ。

あいつ！こっそり、超能力使いやがったな！？

どうせ、おれの考えてる事でも読み取ったのだろう。

あぶねえ。まんまと罠にはまるとこだった。

わざと隙を作り、そこに来た瞬間にドーン！作戦だな！？

ふっ、その手には乗らない。

こっちから攻めさせてもらっせー！！

「お前…、超能力使っただろ」

俺がそうエメリーヌに言った瞬間。

「あ、え？ 何のことやら？ サッパリなんヨ」

メチャクチャ動揺しだしたエメリーヌ。

しかも、さっき俺が誤魔化すために、苦し紛れに言ったようなことを言っている。

お互い、悪知恵は働くが、誤魔化すのはチンパンジー以下だな。  
なんか泣けてきた。

「カイ、ウチが超能力を使った証拠は？ 呪文唱えるの聞こえたん  
ヨか？」

…確かにそうだ。あのクソダサイ呪文は聞こえなかった。

って事はあれか？ 本当に使ってないのか？

でもあの動揺っぷりはどう説明する。

あんな、見る人が見ればワザとやっているのではないかと思われる  
ぐらいの動揺は？

…ん？ワザとやっているのではないか？

そうか！あの動揺はワザとか！！

く、コツカ星人こしやくなり！

動揺しながらも、まだ優勢の位置にいるエメリィヌ。

俺は、完全にエメリィヌに負けたのだ。

負けたのだ。

…負け？ 俺が？ あのクソガキに？

そんなわけあるか！！

よく考えてみる！

超能力を使ってないのなら、あの勾玉の輝きは！？

秋にも言われた事があるとなぜわかる！？

ありえない。

いくら俺が分かりやすかろうが、そんな的確に言えるわけがない。

そもそも、呪文を唱えなきゃ超能力は使えないのか？

そうだよ！ 使えないなんて誰も言ってない。

こうなったら一か八か。

賭けるしかない。

「呪文を唱えるのが聞こえたかだって？ そもそも、呪文なんているのか？ ただカツチヨイイから言ってるだけじゃないのかよ？」

言った。

俺は言った。

苦勞の末に出た答えを告げた。

俺は、そつとエメリーヌを見ている。

すると、冷や汗が分かりやすいほど出ていた。

その瞬間。

俺の勝ちは決定した。

「……………カイの……………」

エメリーヌが何かをつぶやいている。

なんだ？もしかして謝罪か？

そう思い、俺は聞きなおした。

「なんだよ。言いたいことがあるならばつきり言えよ」

すると。

「カイの、バツキャロオオオオ！……………！……………！」

突然叫んだと思えば、泣きながら外に飛び出していくエメリー  
又。

玄関のドアが激しく音を立てる。

エメリーが強く閉めたのだろう。

ドアを壊す気が！

まったく。

そう思っていると、飛び出して5秒くらいで、またドアの音がする。

そして。

「クツソオオオ！！！！外は雨だああ！！！！！！」

そういつて、俺の方に戻ってくるエメリー又

外は確かに雨の音がする。

俺は思わず、笑ってしまった。

そうそう、エメリーヌが家に来た理由だが、秋の家だと食費がやばいらしい。

コイツ大食いだから。

なので、一人暮らしをして、少し余裕のある俺の家に来たわけだ。

俺は嫌だったのだが、エメリーヌがあの時、泣きついてくるからつい……。

そんな感じで、俺の嵐のような朝は始まったのだった。

第十話 完

第十話〜チンパンジー以下、人間以上のエセコンピ〜（後書き）

追記：

どうもです^^

そして、俺日！十話。ご愛読ありがとうございました！！

と言っわけで、流れで海君の家に住んでいますw w

あと、最初に言った通り、呼び方をね、変えました。

過去の話も、全部変えてきます。

急な変更、申し訳ない。

あと、十話入ったのでね。そろそろキャラクター紹介が必要かと思  
い、現在作成中。

そして今回。ギャグを詰め込んだ話になっております。

秋君と琴音は出てきませんでしたね。

お二方のファンの方、誠に申し訳ございませんw

海君イラネな方も、これを見て、少しは好感度をアップしてください。  
ったらうれしいです。

と、言うわけで、

次回をお楽しみにね！！

第十一話〱これは悲劇か？それとも奇劇か？〱（前書き）

どうもです。と言うわけで、十一話完成！！

皆さん応援ありがとうございます！！

それでは、どうぞお楽しみください。

第十一話　これは悲劇か？それとも奇劇か？

俺は、自分の部屋、つまり二階にある部屋の窓から外を眺める。

俺は今幸せだ。

外の天気とは対照的に、俺の心は晴れ模様。

だって…外が雨だから！！

突然だが俺は、成り行きでエメリィヌと同居することになった。

俺は毎日のように連行されては、公園に連れてかれ、いい年してブランコに乗せられ、滑り台もやらされた。

しまいには、その公園にいた見ず知らずの人に、『お父さんと遊んでもらってよかったねー』などと言われる始末。

せめて、お兄ちゃんにして欲しかった。俺はそんなに老けて見えるのだろうか？

そんな問いに、エメリィヌが言った。『そのだらしない恰好のせいなんヨ』と。

たしかに、俺は日曜日のパパみたいな格好だが、さすがに見た目で分かると思う。

まったく。失礼極まりない。

そのあとも、用も無いのにスーパーに連れて行かれたり、そこらじゆうでいきなり、迷子と言う名のかくれんぼが始まったりと、エメリー又にさんさん振り回されていた。

エメリー又にとっては、地球にあるものはとても珍しいらしく、行くところ行くところ、目の色を変えて大はしゃぎ。

やっぱり子供なんだと俺は思った。

と、言うわけで、俺はとてつもなくハッピーだ。

外は雨。つまり、俺は家でくつろげる。

とてもじゃないが、あいつの体力にはついていけない。

毎日10時間近く連れまわされると、さすがに俺の体が持たん。

てな訳で、俺は今、とても気分がいい。

何かを『買ってー』とねだられたりなんかしたら、気分良く買ってしまつと思つ。

「カイ、実はカイにお願いがあるんヨ」

突然エメリー又が言った。

普段は憎たらしいガキンチョも、気分がいい俺の前ではとても可愛い少女と化す。

「俺にして欲しい事？よかろう。何でも言いなさい。」

なんだって？お願いがある？ そうかそうか。俺に頼むなんて、お前も可愛い所があるじゃないか。

「本当なんヨか！？じゃあお願いするんヨ！」

「おう！この海様に、なんでも言ってみなさい」

俺は、力強く自分の胸板をたたく。

それを見たエメリー又の瞳は、とても輝いている。

そして俺も、とても開放感に満ち溢れた顔になっているだろう。

「で、俺にお願いとは何だ？」

だがしかし、俺の言葉に帰ってきたあいつの言葉は…俺を啞然とさせるものだった。

「ウチにもプリンくれー」

……へ？

## 第十一話

（これは悲劇か？それとも奇劇か？）

…えつと……へ？

あまりの衝撃的な一言に、俺の思考回路が一瞬ショートする。

「だーかーらー、プリンー!!」

…ああ、プリンか。

「悪かったな、エメリィヌ。今プリン切らしているんだよ」

雨だし、買いに行くのもちよつとなあ。

すると、エメリィヌがまたしても、俺の思考回路の破壊にかかる。

「冷蔵庫にいつぱいあるんヨ!!!ウチも食べてみたいんヨ!!!」

…えー………へ？

なんだって？

「悪い。よく聞こえなかつたんだが……」

停止した思考回路を、なんとか動かし、絞り出した言葉がそれだった。

そんな俺の言葉に、ぶち切れ寸前のエメリィヌ。

「だから!!!!冷蔵庫にある!!!!味噌カスタードプリンを!!!!ウチに!!!!くれなんヨ!!!!!!」

あー…………へ？

今コイツなんて言った？

味噌カスタードプリン？

俺の体の約九割がそれで出来ていると言っても過言ではない、俺の元気の源を、なんだって？

「過言すぎるんヨ！！ウチにも分けてくれって言ってるんヨ！！」

…え、ちよつ…………へ？

何だコイツ。

俺の体の約九割がそれで出来ていると言っても…「だから過言なんヨ！！！！」

ちよ、俺の考えの中に入り込んでくるな！！

まったく。

「で、頼みって何だ？」

「こんのつ…ドアホ！！ウチにもプリンをわけろゆうつんのじゃ！！ボケッ！！」

おいおい、急に関西弁が上手くなりおった。

「よかったな、エメリィヌ。これでエセ関西人卒業だ。」

俺は、エメリィヌの頭をなでながら、優しく褒めた。

「うん！ありがとうなんヨー！！」

とても嬉しそうなエメリィヌ。

コイツも可愛い所があるじゃないか。

とりあえず、暇だ。

「おい、エメリィヌ。お前、秋達と遊びたくないか？」

暇なときには、あいつをからかうのが一番だからな。

俺が来てくれと言っても、めんどくさがって来ないだろうが、エメリィヌが遊びたいと言ったら別だ。

喜んでくるに違いない。琴音もいるし。

俺がエメリィヌに聞くと、エメリィヌは元気に、『うん！！』と、答えた。

「そうか、ならちょっと電話しといてやるよ」

俺はそうエメリィヌに告げると、携帯電話を右ポケットから取り出し、秋に電話をかける。

しばらく呼び出し音がして、突然いつも聞きなれた間抜けな声へとかわる。

『あー、俺だけど?』

何だその間の抜けた返事は。

この間抜け!!

「この間抜け!!」

『はあ!?!』

凄いでキレル秋。

やべえ、思わず口に出してしまった。

とりあえず誤魔化しておくか。

「電話に出ていきなり間抜けとは、これいかに?」

『じゃあな』

ブチッ、という音とともに、電話が切れた。

何だよ、あいつ。最近の若者の考えるこたあ分からん。

「いつも意味の分からない所でキレルんだから。」

俺が言つと、隣で電話のやりとりを聞いていたエメリィー又が言ってきた。

「カイ。お前は本当になぜキレたか分からないんヨか?」

凄く呆れた顔のエメリィヌ。

俺は、慌てて答える。

「わ、分かるから、その顔やめろ！」

俺がそう答えた瞬間、エメリィヌは心の底から安心したようだった。

「良かったんヨ。もし本気なら、超能力で精神科に連れていく所だったんヨ」

せ、精神科！？俺はそんな所に連れて行かれるような、異常者じゃないぞ！？

多分俺は、今のエメリィヌ以上に安心していると思う。

「異常者はひどいんヨ！！通っている人だって、好きで通っている訳ではないんヨー！！」

凄い怖い顔で言ってくるエメリィヌ。

「わ、悪かった。謝る。本気で謝る。だからその顔やめて下さい。とても怖い。」

ここで茶化したら、多分俺は終わっていた。

人生も。人間性も。

「とりあえず、もう一回電話したらどうなんヨ」

完全に呆れた声のエメリーヌ。

それもそうだな。

俺は、もう一回電話をかけた。

『なんだよ』

そしてやはり、とても不機嫌そうな秋の声。

何だよはこつちだよ。

いつまで気にしてるんだ。

ガキか!!

「ガキか!!」

『じゃあな』

電話が切れ、ツーツーという音がむなしく響く。

またやっちゃったあ!!!!また言ってしまったああ!!!

てか、あいつもあいつだ。なぜすぐ切る。

何のために電話してきたか気にならないのか?

そのやりとりを横から聞いていたエメリーヌが、やはり俺に向かって言ってくる。

「はぁ…カイ。お前は何回同じ事を繰り返せば気が済むんヨ？」

その言葉からは、完全に幻滅したぜ！感が、ビシビシ伝わってくる。

なんだよ。お前大体偉そうなんだよ。何様だよ。ふざけんな。

俺がそう思うと、もうお約束のごとく、それが相手に伝わる。

「カイがそんなに死にたいとは知らなかったんヨ。気付かなくてごめんなさいなんヨ。」

ものすごい威圧感を感じる。

言葉では謝っていても、顔は殺る気満々だ。

俺は命の危険を察知した。

「い、いやぁ、そんな気にして貰わなくても結構ですよ…？」

俺が言っても、表情一つ変えずに一步一步近づいてくる。

自分でも顔が引きつっていきのが分かる。

声が完全に恐怖しているのが分かる。

その時俺は、エメリーヌが小声で何かを呟いている事に気がついた。

そして、そのつぶやきと同時に、光を増す勾玉。

俺はここで悟った。

コイツ…本気だ。

もう俺には、死の一字しかないんだろうか。

俺は考えた。

そこで、ある一つの生きる道を見つけた。

俺が見つけたと同時に、エメリーヌが目を見開く。

俺は、無意識に横っ飛びをする。

多分俺の脳が、危険を察知したのだと思う。

俺が横っ飛びをしたと同時に、エメリーヌが手を前に差し出し…

テレキネシス  
「念力!!」

エメリーヌがそう叫ぶ。

すると、丁度俺の後ろにあったベッドが、華麗に宙を舞う。

そして次の瞬間、『ドガン』という、近所迷惑間違いなしの音が響く。

ベッドが地面に叩きつけられたのだ。

くそお！怒られるのは俺なんだぞ！！床やベッドに、傷つけやがって！！

だがエメリィー又は、そのような怒りさえも、出させてはくれなかった。

すぐに俺の方に手を向け

「カイ、よけちゃダメなんヨ」

そう静かに告げるエメリィー又。

おい、怖すぎる！！

「おい、エメリィー又！！お前にいい物をくれてやる！！だからやめるんだ！！」

俺は必死にエメリィー又を説得する。

だがエメリィー又は。

「カイ、何を言っているんヨ？これは、この小説の人気を出すために、今流行りのヤンデレと言っやつの実演なんヨ。だから…ね？」

はあ！？何をわけのわからない事を言っているんだ！？

しかもヤンデレじゃない。

病んでいる。

デレがない。

お前はもう、病んでいる。

「テレキネシス  
念力！！」

「あぶねっ！？」

俺は、間一髪でよける。

だが後ろで、何かとても嫌いな音が……

……うわあああ！！！！ピーシーマイPCがあああ！！！！！！

くそっ！！あの有名な一言と、ヤンデレのコラボしている場合ではなかった。

急いでアレを。

俺は、アレを取りに行くために、冷蔵庫を目指す。

ちなみに、冷蔵庫は一階で、戦場は俺の部屋。つまり二階だ。

そこから冷蔵庫までたどり着くには、約10秒。

いけるか！？

いや、やるしかない。

俺は覚悟を決め、冷蔵庫に行くために、華麗にクラウチングスタートを決める。

「うおおおりゃあああ！！！！！」

凄い声をあげながら、エメリーヌの横を駆け抜け、ドアを開け廊下に出る。

エメリーヌも意表を突かれたようで、しばらく硬直したのち、俺を追いかけて来る。

くそ、もっと早く。

俺は、階段に差し掛かった。

「だっぴよ〜ん！！！！！」

そう叫びながら、一番上から飛び降りる。

一気に一番下まで下りて行く。いや、落ちていく。

足が地面に着くと、『グキュリッ』と嫌な音を立てる。

どうやら捻ったようだ。

当然のごとく、俺は激しく床に体を打ち付ける。

「ぐぶおあ！！！！！」

でもこんな所で寝ている暇はない。

冷蔵庫まであと少しだ。

俺は立ち上がろうとした。

だが、痛い。

足が痛い。

俺は視線を感じ、階段を見上げた。

そこには、俺に手をかざしているエメリィヌ。

やばい！！！！

まだ死にたくはない！！

その一心で、俺はまた、クラウチングスタートを決める。

その衝撃で、足がおかしい。

だが気にしてられっか！！

俺は痛みにたえながら、冷蔵庫に到着した。

冷蔵庫の扉を開け、俺はアレを手にする。

そう。

それは。

味噌カスタードプリン!!

それを手にした瞬間、安心したのか、足が非常に痛い。

だがそうも言ってもらえず、すぐ目の前には、手をかざしながらエメリーヌが迫ってきていた。

俺は、そいつにプリンを投げつける。

「それやるから、落ち着け!!」

俺の言葉に反応するように、エメリーヌが足元に転がってくる味噌カスタードプリンを見る。

すると……

「やったー!!!!なんヨ!!」

さっきまでの雰囲気とは一変し、目をキラキラさせながら、飛び跳ねているエメリーヌ。

よかった。ようやく機嫌が直った。

俺は心から安心した。

だが、エメリーヌが俺を見ている。

しばらく見ると、急に俺に向けて、手をかざしてくる。

「おい！？それやったんだから許してくれ！！」

「ちよつと、黙ってるんヨ」

俺が必死に説得しても、エメリィー又は言う事を聞かない。

勾玉の光がとても強くなる。

来るっ！！！！

俺がそう思った瞬間。

「<sup>ヒーリング</sup>治療術！！」

エメリィー又が唱えた瞬間、足の痛みが嘘のように引いて行く。

俺は驚きのあまり、頭が混乱しそうになった。

「エメリィー又…なんで…？」

「なんでって足怪我してるんヨ。階段の時も、なおそうと思ったのにカイが逃げるんヨから……」

そう、エメリィー又が言った。

階段時のあれは、攻撃しようとしてるのではなく、治そうとしてく  
れていたのか。

「エメリーヌ。ありがとう。」

俺はお礼を告げた。

「そんなことより、電話しなおした方がいいんヨ？」

プリンのおたを開け、おいしそうに頬張るエメリーヌ。

「どうだ！！美味いだろ！！美味すぎて泣いちゃうだろ！！！」

俺はそんなエメリーヌに、感想を求めた。

「確かに美味しいんヨ！！でも泣きはしないんヨ」

なんだと！？なら食うんじゃねえ！！！！

俺の体の約九割がそれで出来ていると言っても過言ではないんだぞ  
！？

いい加減にしてくれ！！

「分かったんヨ、謝るから、電話でもするんヨ」

「あ、ああ、そうか」

なんか上手くなだめられた様な気がするが、気のせいだろう。

とりあえずあれだ。電話しよう。

俺は、本日三度目。秋に電話をかけた。

もう聞きなれた呼び出し音が響く。

しばらくすると、もう聞きなれたあいつの声。

『お前、しつこい』

まだ不機嫌のようだ。

コイツ、毎度の事ながらめんどくさいな。

俺は、同じ失敗を繰り返さないように注意する。

仏の顔も三度までって言うしな！！

気をつけなければ。

そんな俺に、エメリー又は言った。

「二度ある事は三度ある。ともいうんヨ」

くっ！嫌味な奴だな。

「お前、なんでそんなことわざ知ってんだよ？しかも、超能力で考えを読み取るのやめる。」

ホントに迷惑だ。

「ウチは落ちこぼれだったし、本を読むことしかできなかつたんヨ

からねー。あと、超能力は使ってないんヨ。」

おい、今さらつと悲しい事言ったぞ？お前も苦労してたんだな。

一応、エメリイーヌがどうしてここに来たのかななどは、秋に全部聞いている。

てか…

「超能力使ってない？ならなんで分かるんだよ？」

俺だって、そう毎回のようによく考え事を暴露している訳ではないぞ？

そんな俺の問いに、エメリイーヌが平然と言った。

「そついう顔してるんヨ。」

なるほど。仏の顔も三度までみたいな顔か。

「どんな顔だよ！？気持ち悪いよ！！！」

まさかこの俺が、そんなに表情豊かだとは思わなかったぞ。

俺とエメリイーヌのやりとりを、電話越しで聞いていた秋が、キレる。

『俺を放置するんじゃないよ！！俺は電話の時まで忘れ去られる存在なのか！？』

「ああ、スマン」

今さらっと、秋の心の声が聞こえた。

お前、気にしてたんだな。

『スマン！？軽いな！！そこは誠意を込めてごめんなさいと言う所だ！！』

うわあ。めんどくせえー。

『めんどくせえだと！！テメエふざけんな！！』

え！？なぜわかった！！

「エメリイー又、今俺、喋ってたか？」

俺は、プリンを食いながら、やりとりを聞いていたエメリイー又に聞いてみた。

「全然しゃべってなかったんヨ。表情でも分かったんヨ。どうせ。」

何だ表情か。いやぁーあせった。

あいつも超能力者かと。

まあいいや。

「とにかく、暇なら俺ん家に遊びに来ないか？」

『そういう理由ならお断りだ。俺だって都合つてもんがある。』  
なんだよ、お断りするなよ。

「あ、いい忘れてた。エメリーヌが暇そうだから、俺ん家に遊びに来ないか？」

『分かった、琴音も連れてすぐ行くよ』

「おい、都合は？」

『え？何の事？』

「おい、お前俺に恨みでもあんのか？」

『ある』

即答だった。

そうか、お前が口ごろ、俺の事をどう思っているのかがよく分かった。

そして、お前に都合がない事も分かった。

「とりあえず、琴音に聞かなくていいのか？」

勝手に決めてたけど…

『ああ、あいつ最初の電話の時から用意始めてる』

「琴音すげーな！ー！お前の家系どうなってんだ！ー！」

『俺も驚いている』

「いやあ、今年一番驚いたかもしれない」

俺が言うと、エメリーヌがいつてきた。

「ウチが登場した時は！？」

あーそんな事もあったな。

確か、20年ぐらい前に。

「20年！？貴様今いくつなんヨ！？」

お前何言ってるんだ。

「俺は、何と38歳だ！ー！」

「『アホか』」

電話越しの秋と、エメリーヌが見事にハモった。

お前ら、息ぴったりだな。

さすがの俺も、寒気がしたぜ！ー！

まあいいや。

「とりあえず外は雨だし、エメリィーヌでも迎えによこすよ」  
超能力があれば一瞬だしな。

『ああ、わかった。10分後ぐらいに来てくれ。』

「わかった。エメリィーヌも、それでいいよな？」

俺は、まだプリンを食っているエメリィーヌに聞いた。

「全然オツケーなんヨ」

「エメリィーヌもいいみたいだし、10分したら行かせるよ」

『おう、じゃあ切るな』

「なにを？」

『電話だよ!!』

「何もつたいない事してるんだ!!電話は高いんだぞ!?!」

『お前はアホか!!』

そういつて、秋が電話を切った。

ツッコミのキレは、今日も絶好調のようだ。

「じゃあエメリィーヌ、お前も準備しとけよ」

俺は、ひたすらプリンを食っているエメリィヌに行った。

ん？ひたすら？

…ヴァツ！…！

「お前！…プリン何個食った！？」

エメリィヌの前には、プリンのごミの山。

俺が知らないうちに、勝手にかわりしていたみたいだ。

あまりの驚きに、変な声が出てしまった。

そんな俺の問いに、エメリィヌは何事もなかったかのように言った。

「これが最後のプリンなんヨ」

最後！？あんなにあつたのに！？

確か、15個ぐらい買っておいたはず。

俺の……俺の……俺の味噌カスタードプリン……！！

「エメリィヌ……！……てめえ……！……お前、生きてそのプリンを平らげられると思うなよ……！」

俺の心には、すでに殺意が目覚めていた。

すべて食い終わる前に、\*\*してやるよ!!

「はあ、美味かったんヨ。ごちそうさまなんヨ」

こやつ、完食しおったわ。

憎たらしいクソ餓鬼め!!

「あ、ゴミを捨てるの忘れてたんヨ。食べた後はお掃除なんヨ」

ジュリヨアアアア!!!!ゴミダト!?ゴミニシタノハ誰ダ!!

貴様が食ワナケレバゴミニナルコトナンテナカッタノニ。

もうもはや、俺の思考は崩壊し、このままだと何かに変身してしま  
いそうだった。

かすかだが、角が生えてきた気が……気のせいだろう。

そんなわけで、俺はあいつを捻りたいと思います。

「エメリイーヌウウウ!!!シネエエ!!!!!!」

俺は、エメリイーヌに殴りかかる。

だが我を忘れ、冷静さがなくなった俺が、超能力に勝てる訳がな  
かった。

「ホイっと、念力」  
テレキネシス

ゴミ箱にゴミを入れながら、こちらを見ずに手だけを向けるエメリーヌ。

そして俺は、見事に直撃した。

あの時と同じ。

体が宙に浮く感覚。

いや、実際に浮いている。

念力でとらえられた俺を、そのままどこかに運ぶエメリーヌ。

おい、どこに連れて行く気だ。

周りを見てみると、どうやら浴室のようだ。

そして、エメリーヌがシャワーを手に取り、温度を水に切り替える。

そのシャワーが俺の顔に向けられ……

「発射!!」

そう言ったと同時に、シャワーの出る所を捻るエメリーヌ。

その瞬間、勢いの強い冷水が、見事に俺の顔に直撃する。

「グボアアア!!」

やめろお！！やめてくれえ！！冷たいよお。痛いよお。俺が悪かったからあ。

俺の怒りに燃えあがった頭が、一気に冷却される。

それと同時に、だんだんと怒りが小さくなる。

俺にシャワーを当てながら、エメリィヌが言った。

「小さい子の前で、シネエ！とか、コロスウ！とか、物騒な事言っちゃダメなんよ。」

俺は叱られた。

何が小さい子だよ。お前都合よすぎだろ。

だがそんなエメリィヌのおかげで、俺は殺しをせずに済んだ。

てか…

「シャワーを止めるお」

「分かったんヨ」

俺の心の叫びが届き、エメリィヌがシャワーを止めてくれた。

まったく…どこでこんな悪知恵を覚えたんだよ。

多分、コツカコラ星の時、超能力が使えないとバカにされ、超能力で仕返しができないからと、エメリィヌなりに考えたんだとは思

うが。

今はもう超能力は使えるんだ。悪知恵に超能力が合わさったら……  
考えるだけでも恐ろしい。

「とりあえず、俺を下ろしてくれ」

「了解なんヨ」

下ろしてもらった俺は、エメリーヌにタオルを持ってきてもらい、  
ずぶぬれになった服を着替えるため、自分の部屋に向かった。

「はあ、酷い目にあつた。晴れてても、雨でも疲れることには変わ  
りないな」

エメリーヌのいない所で愚痴をこぼし、すぐに着替えて一階へと  
降りた。

一階に下りると、エメリーヌはすでにパジャマ姿から、あの緑色  
の服に着替えていた。

「もう行けそうだな。秋達を迎えに行ってくれ」

俺はすっかり準備万端のエメリーヌに行った。

「分かったんヨー!!」

そういつて、超能力で瞬間移動した。

もうすっかり、呪文みたいなの言わなくなったな。飽きたのか？

そう思いながら、エメリー又がみんなを連れて戻って来るの、俺は一人で椅子に座って待った。

あれから十分が経った。まだ来ない。

まあ、向こうがまだ準備できていないかもしれないし。

もう少しだけ待つか。

さらに30分経過した。

遅すぎる。さすがに遅すぎる。

あいつ何やってるんだよ!?

もしかして移動する場所間違えたのか!?

俺は少し心配になり、とりあえず秋に電話をかけようと、携帯を手を取った時だった。

『ピンポン』と、インターホンのチャイムが鳴る。

……おい、まさか……

俺は、嫌な想像を振り切り、玄関に向かいドアを開けた。

そこには……やっぱりいた。

傘をさしながら、楽しそうな三人が。

何やってんだ！？とりあえず理由を聞こう。

「えっと、遅かったじゃないか……」

俺がそう言った。すると……？

「うちのお袋がさあ、雨で危ないから歩きで行けって言っもんだから」

おい。今の言葉に違和感を持つとせ。

「何の為にエメリィヌが行ったと思っているんだ！？」

俺は言った。

すると秋が

「何って、俺たちの迎えだろ？」

ああ、そうだ。お前たちの迎えだ。

だが

「じゃあなぜ、エメリィヌの超能力でワープしてこない」

俺はそう言った。

言った後、謎の沈黙。

そして、皆の顔が合点の行ったような顔になり……

「「「ああ！」「」」

三人共、今気付いたような感じだ。ハハハ、嘘だろ？

「そういえばそうだな！お前頭いいよ！！」

そついつて笑いながら、俺の肩をたたきだす秋。

お前はアホか。普通気付くだろ。

つーかエメリーヌ。

「お前は何のために行ったんだよ？」

秋と一緒に笑っているエメリーヌに、俺は呆れながら言った。

「いやあ、その発想はなかったんヨ。」

はあ！？あれよ！！その発想あれよ！！！！普通分かるだろ！！

くそつ。説明しとけばよかった。

「これが、互いの行き違いが招いた悲劇」

と、琴音がなんかほざいている。

「悲劇じゃなくて、奇劇の間違いだろ？冗談じゃないぜ」

三人もいて何をやっているんだ。

琴音も時々アホだからな。仕方がない。

俺は、3バカトリオに早々に心が折れ、仕方なく家にあげたのだっ  
た。

第十一話 完

第十一話〱これは悲劇か？それとも奇劇か？〱（後書き）

俺日ー！〱愛読ありがとうございます！

今回は、海君がツッコミに回ってしまいましたww

秋君がいないときは基本、海がツッコミです。

そして、これこそまさに奇劇！

ということですね、はいww

てな訳で

次回をお楽しみに！

第十二話 激闘！調味料vs俺達（前書き）

どもです^^ 待望の十二話が完成しました!!

ではいつてらっしゅーい^^

## 第十二話　激闘！調味料vs俺達

それは昨日のことだった。

スーパーに買い物に来た俺は、目的の品を次々とかごに放り込む。

味噌カスタードプリンも欲しかったのだが、どうやら売り切れのようだ。

少しショックだった俺は、レジに向かおうと、調味料売り場を通った。

その時だった、誰かのささやく声が聞こえる。

俺はあたりを見回したが、誰もいない。

気のせいかと思い俺は再び歩き出そうとした。

だが、またしてもささやく声が聞こえる。

俺はまたあたりを見回した。

その時、俺の視界に飛び込んできた。

一つの調味料。

それはいたって普通の、どこにでもあるものだった。

俺はそれに、何かひかれるものを感じた。

そして俺は入れてしまった。

自分の買い物かごに。

あのささやきが…悪魔のささやきだとも知らずに。

## 第十二話

〈激闘！調味料VS俺達〉

俺に家に遊びに来た秋達。

外で立ち話をしていてもあれなので、とりあえず俺は皆を家にあげ、俺の家の中で一番広い部屋であるリビングへと案内した。

「みんな、汚い部屋だけど、ゆっくりしていくんヨ」

エメリィーヌがそう言った。

「お前が何偉そうに言ってんだよ。ここは俺の家だぞ。」  
「  
とりあえずツッコんでおく。」

「まあ、らくにしてくれ」

俺も、一応告げた。

思いつきり寝そべっている秋。

テーブルに置いてあった漫画を、勝手に読みだしている琴音。

なぜか壁と戦いを繰り広げているエメリィヌ。

俺が言うまでもなく、皆それぞれにくつろいでいる。

いくらなんでも、くつろぎすぎだろ。

でもまあ、このくらいの方が、俺も気を遣わなくて済むからいいんだけど。

皆がだらだらと過ごしている。

やる事がなけりゃ、人間なんてこんなもんだ。

そんな調子で10分ぐらいたつと、必ず誰かが発する言葉がある。

その言葉が合図みたいなもんで、誰かが言ったら、だらだらタイム終了だ。

そして、今回その言葉を発したのは秋だった。

「暇だし、なんかしようぜ」

その言葉を合図に、皆も暇だ暇だと騒ぎ出す。

俺はそうなる事が分かっていたため、今回、あるイベントを用意していた。

その名も……

「じゃんけん大会!!」

「うおっ！いきなり大声出すなよ！」

フッフ、そう文句を言っているのも今の内だ。

「これを見よ!!」

俺は、あらかじめポケットにしまっていたチラシを、バーン！とテーブルに叩きつける。

俺が叩きつけると、皆がそれに注目した。

「えーと、なにになに…じゃんけん大会、優勝賞金は何と…十万円！？」

秋が、チラシに書かれている内容を見て、分かりやすいほどに驚いている。

「十万円って…じゃんけんでそんなに？」

琴音も驚いているようだ。まあ、当然だと思う。

初めて見た時は俺も驚いた。

「十万円って凄いいんヨ？」

そんな中、エメリー又だけが凄さを分かっていない様子。

まさか。

「お前、金を知らないのか？」

俺のこバカにしたような問いに、エメリー又は少し怒った口調で言った。

「お金ぐらい知ってるんヨ！ただ、ウチのいた星とは言い方が違ってたんヨから」

ああ、ドルとかユーロみたいな感じね。

とりあえず、凄さを教えておこう。

「お前のいた星って、金はなんて数えてたんだ？」

「えーと、百円は1ペプシなんヨ、先生が言ってたから間違いないんヨ」

ちよ、ペプシで。

コーラに執着しすぎだろ。お前の星。

「てか、1ペプシが百円ってわかっているなら、計算すれば凄さが分かるんじゃない?」

そこまで分かっているのになぜ?と思い、俺はエメリーヌに聞いた。

するとエメリーヌは、開き直ったように言い放つ。

「カイ…、ウチが計算できるわけないんヨ」

いや、しらんがな。

お前が計算苦手なんて、あれだよ。初耳だよ。

お前きつと、十より多かったら、たくさん!とか言うタイプだろ。

いるんだよなあ。たまに。そういう奴が。

目の前に大量の札束があったら、とりあえず『すげえ！一千万円あるぞー！』とか言う奴。

おおけりやなんでも、『たくさん』だの『一千万円』だのぬかす輩たち。

絶対コイツも、その部類の人間だ。…人間か？…まあ人間か。

そんなエメリーヌに俺は、十萬円の凄さを熱く語る。

「いいかエメリーヌ。十萬円って言うのはな。ペプシでいうと…  
…百ペプシ分だー！」

「はあ！？どんな計算だよ！？一万ペプシだろー！」

「……千ペプシだよ…秋兄い。」

あーもうー！！ペプシペプシうるせえー！！

そんなにペプシが好きなら買って来いよー！！

くそっ、こいつらのせいでペプシの夢を見そうだ。

とりあえず、

「千ペプシ分だ」

俺は、琴音を信じ、告げた。

「せせせせ、センペプシ！？そんなにあれば、灼熱の陽炎チヨコが  
すっげえ買えるんヨ！！！」

おい、一応女の子なんだから、すっげえとか言うなよ。

しかも灼熱の陽炎チヨコつて。瞬時に溶けそうじゃねえか。

お前の星おもしろいな。

十万円の凄さが分かり、とても興奮しているエメリィヌ。

どうやら皆、十万円が欲しくなってきたらしい。

と、いうわけでだ。

「これに出場してみないか？」

俺はみんなに言った。

すると琴音が。

「でもこれ、開催日は昨日だよ？」

え！？昨日！？

「嘘だろ!？」

「うん。嘘だよ。」

「ちよ、嘘かよ!?!」

そういうのやめろよ。マジで。

少し涙が出てきたじゃねえか。

琴音を見てみると、とても楽しそうに笑っている。

その顔が、俺には小悪魔に見えたんだ。

…まったく。人を驚かせるの上手すぎる。

すっかりだまされた。

琴音って、時々変なこと言うよな。

まあ、そんな事よりじゃんけん大会だ。

「たしか、チラシには今日の昼と書いてあったよな？」

ずっとチラシを眺めている秋に聞いた。

「ああ、今からだと…約二時間後だな」

二時間後か。よっしゃ、燃えてきたぜ！！

「皆もちろん参加するんだろ？」

「おう！」

「うん！」

「なんヨ！」

みんなが、俺の言葉に続くように答える。

「ちなみに場所はどこの？」

と、琴音。

まったく…、ノッてるときに、そんなリアルな事を気にするんじゃないよ！

俺は少し呆れつつも、質問に答える。

「ここから30分行ったぐらいの、広い公園でやるらしい」

そう、そこは、公園というより広場といった方が正しいかもしれない。

学校の校庭を想像してくれば、間違いないだろう。

そのくらい広い。

しかし十万円か…これを逃す手はないな。

最近、エメリイーヌのせいで金かかるからな。

あとで、両親に相談でもするか。

ちなみに、俺の両親は、仕事で海外に行っている。

母はファッションデザイナー。

父は映画監督。

二人とも結構稼いでいて、食費兼、生活費などは入れて貰っている。

だが、こづかいは月に五千円と、他の人達と変わらないと思う。

お金の大事さを知っておいてもらいたいという事で、私利私欲のために小遣いアップをねだると、凄く怒られてしまう。

なので、俺はそれでやりくりしている訳だ。

その小遣いの中で、エメリイーヌの分を出しているとなると、当然ピンチ。

おかげで、いつか来るであろう、大事な時に備えてしていた貯金も、すべて使ってしまった。

特に使う予定はなかったのだが。

つと、俺の話はこれぐらいにしておこつ。

とりあえず、しばらくは暇だ。

秋もそう思ったのだろう。

暇そうな俺達を見て、秋が言った。

「しばらく時間があるから、なんかしよつぜ」

そんな秋の問いに、俺は言った。

「なにを？」

「なにを？つて、なにがあるんだ？」

俺の質問に、質問で返す秋。

えーと、四人で出来るもの…か。

……うーん…難しい。

……っあ！そういえば。

「俺、朝飯食ってねえや」

俺がそう言つと、秋が無表情で言ってきた。

「俺の質問に対しての答えになっていません」

なんだよ。『只今電話にできる事ができません』みたいに言いやがって。

…まあいいか。とりあえず。

「俺が飯食い終わるまで、適当になんかしててくれ」

俺は、暇そうなみんな。特に秋に向けて言った。

「カイー、ノド乾いたんヨー」

俺が冷蔵庫に向かうのを見て、俺に向かってエメリーヌが言っている。

俺は『ん』と返事をする。

「さて…なんかあるかな？」

冷蔵庫を開けると、一番手前に置いてあったじゃがいもが、視界に飛び込んでくる。

だがあえてそれをスルーし、その隣にあった卵に手をのばす。

今は芋より卵が食いたいのだ。

俺は卵をパックから一つ取りだし、昨日の残りの白米を茶碗に盛る。

そこに卵を入れ、醤油と塩、隠し味に、昨日スーパーで買った『特製ハバネロソース』を適量かけて、味を付ける。

それを茶碗の中で豪快にかき混ぜた。

これこそが俺流。生卵かけご飯。

茶碗の中の真っ白い白米に卵が絡みつき、黄金色に変化する。

かすかに鼻を突くハバネロが、とても食欲をそそった。

これはうまそう。

俺は我慢できず、立ち食いそばならぬ、立ち食いご飯を始める。

とてもうまそうな見た目。香り。それらの歓迎を受けながら、口の中に運ぶ。

そして…

「ヒョアアアツグヒヨリヤアアアア！！！！！！！！！」

痛い！！！！痛すぎる！！！！

口の中に入れた瞬間、ハバネロが口の中を支配する。

そして、辛さ<sup>カラ</sup>ではなく痛みが、俺の口の中に広がる。

焼けるように痛い。

喉が、舌が、食道が。

なめていた。ハバネロを、特製をなめていた。

俺は辛い物は平気なタイプなので、調子に乗って三十滴ぐらい入れたのが間違いだった。

もはや隠し味どころではない。あまりの主張に、メインが隠れてしまっている。

もう味ではない。まるでガラスをかみ砕いているような痛み。

これは凶器だ！！！どんなに強い人だろうが、楽に暗殺できる勢い。

そう、かの有名な織田信長でさえも、一撃、ならぬ一口で悶絶するであろう。

とりあえず、水！！

コップなど探している暇もないので、目の前にあったどんぶりに水を注ぎ込む。

そして、顔面を突っ込んだ。

とても冷たい水の中で、必死に口を開け痛みを逃がそうとする。

普通ならここで和らぐのだが、こいつは比べ物にならないほどの問

題児だ。

水の冷たさを感じない。

おい、大丈夫かよ俺の舌。

そんな俺の姿を見たみんなが、いい感じに誤解してしまった。

「カイー！ウチのジユ……っカ、カイ！？何やってるんヨか！？」

「ん？どうしたの、エメリイちゃ……しゅ、秋兄い！！！！ 海兄  
いが自殺してる……！！！」

「ちょ、おい、何があった！！ 飯食いながら自殺はやめろ……！！  
……！！」

みんながとても慌てて俺に駆け寄り、水から引き離そうとする。

やめろ……！ やめてくれみんな……！ これは生きる為に行っている事  
なんだ……！！

俺も必死に抵抗する。

だが、三人の力にかなうわけもなく、見事に水から引きはなされる。

その瞬間。



上手く作れないという事は、当然相手にも伝わりにくいわけで。

「なんだ！？ 何か伝えたい事でもあるのか！？」

でもどうやら、何かを伝えたいという熱意は伝わったようだ。

くそっ！！ どうする！ 今の俺じゃ、理解されない。

そこで俺は、あることを思いついた。

そう、思いついてしまった。

なぜ思いついてしまったのだろう。

だがその時の俺は、これが一番の解決策かと思ったんだ。

とにかく、こうなった理由を伝えよう。

そうすれば分かってくれるかもしれない。

そう思った俺は、すぐに実行に移した。

「ほ、ほれ（じ、これ）」

俺はそう言って、すべての元凶となった八バネ口を指差す。

すると、琴音が気づいてくれたようだ。

「これ！？　これがどうかしたの！？」

必死に俺に説明を求めてくる。

くそっ、運悪く、琴音からみたら、ラベルが後ろ向きだ。

ハバネロと書いてある面が見えない！！

とにかく伝えなければ！！

「ほれ、ふひ（それ、くち）」

そう言って、ハバネロと口を交互に指差し、最後に自分のイカレタ舌を指差す。

だがパニックになっている琴音には、うまく伝わらない。

すると、隣でそれを見ていたエメリーヌが『そうか！』と、言わんばかりの顔になる。

よかった。エメリーヌが気づいてくれたみたいだ。

俺は少し安心し、エメリーヌの言葉を待った。

だが……

「そのトマトジュースを、飲ませてほしいんじゃないんヨか！？」

……え？

「そうか！エメリイちゃん天才だよ！！」

そう言つて、ハバネロの瓶を取り、ふたを開ける琴音。

そして、俺の顔にだんだんと近づけてくる。

…おい！？ 正気か！？ 「冗談だろ！？ 死ぬ！！ 琴音達は俺を  
殺す気か！？

どこの世界に、この状況でトマトジュースを欲しがる奴がいるんだ  
よー！！

違うー！！ たのむ、気付いてくれー！！

「なぜ暴れるんヨー！！ 少しでも落ち着くんヨー！！」

俺は必死に首を横に振ろうとした。

だが、エメリイー又に頭を抑え付けられる。

口を閉じようと抵抗もしてみたが、痛すぎて口を閉じれない。

何としても伝えなければ!!

俺はその一心で、『早まるな!! やめてくれ!!』そう伝えようとした。

「はっ…はっ…やえ…ふれ」

やはりうまく喋れない。

すると琴音に、すっごい間違っただわった。

「ん?…早く…くれ? うん!! わかった!!」

んなこと言っただねー!!…!!…!! ストップ!! たんま!!

やめてくれえ!!

俺の目からは、大量の涙がこぼれ落ちる。

だが、琴音とエメリー又は必死すぎてそれに気づいていない。

すると、ずっと隣にいて声をかけ続けてくれた秋が、『特製ハバナ口』と、忌々(いまいま)しく書かれている面をみて、気付いたようだった。

「…あ!?!」

あ!?! じゃねーよ!! 気付いたなら琴音たちを止めてくれー!!

俺の願いが通じ、秋が琴音に呼び掛ける。

「琴音!!! ストップ!!! ストップ!!!」

その言葉で、琴音の動きが止まる。

俺の口と、ハバネロの注ぎ口までの距離、わずか5cmほど。

あぶねえ!!! 危機一髪!!!

秋!!! お前最高だ!!!

気付くと、痛みも少しだけ引き、多少だが喋れそうだ。

「あ、あぶねー、しゅう、たすはっは」

俺は秋にお礼を告げる。

すると秋は笑いながら、でもとても優しい口調で言った。

「ホント、危なかったな。ってか、お前も紛らわしいんだよ。ははっ」

秋の顔を見ると、心から安心したようで、それがものすごく伝わった。

いやー、そうまとうが見えた。

初めて恐怖で涙が出たぜ。

「ほれより、こおひくれ」

「わかった。氷な？」

「ほっ」

俺が氷を求めると、秋は快く引き受けてくれ、俺のそばを離れて氷を取りに行ってくれた。

そんな俺たちの会話について行けず、まだ理由が分からないエメリー又と琴音は、立ち尽くしたままだ。

その時、エメリー又が正気に戻り聞いてきた。

「いったい、何なんヨ!？」

「ほら、ほっちきてひてひろ」

「こっち来て見てみる？ いったいなんなん…うわっ！」

俺が言った所に行き、琴音の持っている瓶を見たエメリー又は、とても驚いていた。

「なんだ。カイはハバネロに毒を盛らただけだったんヨかあ」

恐ろしいどくろのマークの上に、禍々しい字で『特製！ハバネロ』と書かれた部分を見て、すべてを理解したエメリー又。

その顔からは、秋と同じく、安心した感じが凄く伝わってきて、とても嬉しかった。

そのエメリイーヌにワントempo遅れ、琴音も正気に戻る。

そしてまた、あの質問。

「いったいどういう事なの？」

俺の舌は、痛みこそあるが、何とか喋れるぐらいに回復しているみたいだった。

まだひりひりするけど。

「お、もう喋れる！つと、琴音、それハバネロだ。」

「うそぉ！？」

俺はエメリイーヌのように、何も言わずに見せて驚かそうとも思っただが、何せハバネロは今俺の真上。

驚いて落とされたりしたらかなわん。

一応俺が言っても驚いてはいたが、落とさせずにすんだ。

すると、琴音が瓶を回して文字の部分を確認する。

でも、あらかじめ言っているのもう安心。

かと思っていた。

だがそこには、もう一つの罠があった。

禍々しい字と、そのバックに描かれた、恐ろしい顔のドクロ。

琴音はそれを見て…

「…わっ！」

琴音の声と同時に、『パッ』っと、瓶から手が離れる。

そして、瓶が空中で逆さまになり……『バシヤ』

「ほら海。こお…り!？」

俺の今の状態を見て、秋のとても驚いた声が聞こえる。

なぜかって？

おいおい、皆も人が悪いな。

そんな事俺の口から直接言わなくちゃいけないのか？

もう分かっているだろうに。

そっだよ。

ハバネロソースが、俺の顔面に…

「モツツアレラカルパツチヨオオオオツオツオ……………!!」

激痛で、俺はとうとう頭までおかしくなってしまったようだ。

わけのわからない単語が、悲鳴となって口を出た。

ハバネロが、顔の穴という穴に入り込む。

目が。

耳が。

鼻や口が。

そして、皮膚まで。

皆さん。

多分俺は、死ぬ。

今日ここで。俺は死にます。

海……死にま……す……!!

ハバネロの強烈なカウンタークリティカルヒットをモロにくらった俺は、次第に意識が薄れ、そして……

ポク、ポク、ポク、チーン……

「つてなつた方がどんなに楽か……！」

激痛で永遠の眠りにつく事さえ許さない、ハバネロソース。

とりあえず風呂場……！！

風呂場……！！に行きたいが、前が見えない。

痛すぎて目が開けられない。

「エメリイーン……！！風呂場に連れてってくれ」

やっぱりこう言う時に頼ってしまう。

あいつの超能力には。

「分かったんヨ……！！テレキネシス念力……！！」

超能力を発動した声が聞こえるとほぼ同時に、体が浮く。

ちゃんとやってくれているようだ。

しばらく空中にゆられ続けると、浴室のドアを開ける音がした。  
どうやら到着したようだ。

「カイ、この後どうすればいいんヨか？」

エメリーヌが俺に尋ねる。

「とりあえず、シャワーで洗いははほう」

やばい。また舌が麻痺してきた。

だけど、伝わったはずだ。

「分かったんヨ！」

エメリーヌがそういつてからすぐ、シャワーの水が、床にたたきつけられる音がする。

俺、目が見えない人の気持ちがあった気がする。

良く音を探すね。これ。

そんな事よりも、とりあえず

「ひゃわーおはひへふへ」

「シャワーを貸してくれ？」

おお！！伝わった。

この伝言ゲーム楽しいな。

伝わったら、何ともいえぬ達成感が生まれる。

って、それどころじゃなかった！！

痛い！！

エメリィー又の言葉に小さく頷き、シャワーを手に取る。

そして、その水で顔を洗い流した。

だが。

くそっ！全然痛みが取れない！何ともいえぬ激痛が。

だが、もうどうしようもない事だった。

自然に痛みが取れるのを待つだけ。

くっ、さっきは10分ぐらいで痛みはひいたけど。

今回はそうはいかないだろう。

なにせ浴びたのだから。

軽く見積もって、三十分と言ったところか。

それまでの辛抱だ。俺！

たった今から、俺と八バネ口の三十分戦争の始まりだ。

だけどこれ大丈夫か。特に目。

失明なんて事になったら、俺泣いちゃうぜ？

心配だから、少し開けてみるか？

まあ大丈夫だとは思うけど、一応開けてみよう。

そう思い、俺はまぶたを開いた。

……おい。

俺本当に目、開けてるよな？

ならなぜ見えないんだ！？

おい、おいおい、おいおいおい！？

嘘だろ！？

冗談じゃねえぞ畜生！！

「これで良しなんヨ」

エメリーヌの声が聞こえたと同時に、失明したと思われた俺の視力が復活。

というか、視界を遮るものがなくなった事により、見えるようになったわけだ。

つまり、失明はしていなかった。いたって元気。

そうか。俺の顔面の肌は、刺激にやられて感覚をなくしていたのか。まさか、タオルで顔を拭いてもらっているのに気がつかないなんて。

ちょっと本気で心が折れかけたわ。

いやー良かった。

しみまくるけど、エメリーヌの顔が見える。

見えるってサイコー!!!!!!

意外な事で、いつも何気なく使っている目に感謝をしたな。

…ってか、エメリーヌ!!!

お前、超能力で治せるか!?

そう思った俺は、必死に伝え始める。

「ほまへ、ひょうほつひよふではほへふは!？」

何語!？ ゴリラにしか聞こえないよ!!!

って、自分で言った事に自分でツッコむなんて。

悲しくなってくるな。

「カイ!？ 何言ってるんヨ!？」

さすがのエメリィーにも伝わらなかったらしい。

まあそつだよな。

これで伝わる方がすごい。

すると突然、浴室のドアの開く音が聞こえ、すぐに琴音の音が聞こえる。

「はまち、給食で出てたよな!？ って言ってるんだと思うよ!！」

帰れ!! お前もう出てくるな!! ややくしくなるだけだ。

だから何度も言っけど、仮に俺がそう言ったとして、俺は何がしたいんだよ!!!

はまちが給食に出たらなんだってんだ!？

やった!!! はまちだいすき!!!とでも言っつもりか、俺は!？

そして、見事にそれを信用するエメリーヌ。

「そんな事ウチに聞かれても困るんヨ」

ですよねー。ってか、お前も信じてるんじゃないよ。

あり得ないだろ。はまちの存在なんかどうでもいいよ。

俺が二人に幻滅していると、そこに、秋登場。

「お前ら、アホだろ。そんなこと言っている訳がないだろ。」

秋だけがまともな事を言っている。

やばい。

なんか秋が救世主に見えて仕方がない。

痛みとは違う涙が出そうだ。

秋！今のお前、最高にかっこいいぜ！！

とりあえず、秋もいるので、もう一回伝える。

超能力で、治せないか？と、言いたいのだが…

「ひょうのふひよふへ、はほへはいは？」

やっぱりうまく伝えられない。

ただ秋は、期待を裏切らなかった。

「エメリーヌ。超能力で、治せないのか？ 多分そう言っていると思うぞ」

しゅうううー！！お前すげーよー！！

完全に見なおしたよー！！

やばい、感動の涙が止まらない。

俺は、必死に秋の言っている事に相槌を打つ。

ずっと頷いている俺を見て、琴音とエメリーヌがすごく驚いていた。

「なんで、分かったんヨか！？」

「秋兄い、すごいよー！！」

二人はとても不思議そうに、秋に問いかけている。

早く助けてほしいのだが、俺も気になったので良しとしよう。

「言葉で理解するんじゃなく、心で理解するんだー！！…って言うのは嘘で、表情に出やすいんだから、表情見れば一発だろ。」

お前と言う奴は…！！

俺を理解してくれただけじゃなく、さんざん苦しめられて、嫌いになりかけてた俺の分かりやすさを、初めて活躍させてくれた！！

俺の癖までもを、活用してくれるなんて。

持つべきものは、親友だ！！！！

秋の言葉で納得をしたエメリー又は、すぐに超能力で俺を治してくれた。

その効果はいつものごとく絶大で、すぐに痛みが引いた。

俺は、濡れた服を着替え、ハバネロソースの掃除を始める。

だがエメリー又は、治療術は多用すると疲れるらしく、ソファで横になっている。

やはり誰かを治すというのは、とても気力を使うのだろう。

秋と琴音は、俺の騒ぎを聞き、駆けつけてくれた近所の人たちにお礼と謝罪を言ってくれている。

やっぱり、皆優しい奴らだ。

俺は改めて、皆に感謝した。

余談だが、エメリーヌが頼んだ飲み物の存在と、

超能力で考えを読み取れば早いという事には、俺も含め誰も気づいていなかった。

第十二話 完

第十二話 激闘！調味料vs俺達（後書き）

はいどうもー

十二話を読んでくれて、本当にありがとうございましたー！！

本当はね。こんなはずじゃなかったんですよw

普通にじゃんけん大会の話にしようと思ってたんですよw

だけど今回。みんながイイ感じに活躍できたと思います^^

やっぱりみんなが揃うといいもんですよ^^

今回は多分、じゃんけん大会ですよw

たぶん。

と、言うわけでね、みなさん！！

次回をお楽しみに！！

第十三話 開催！じゃんけん大会（前書き）

どもです^^待望の十三話。

是非ご覧ください

### 第十三話　開催！じゃんけん大会

じゃんけん。それは、最もシンプルかつ迅速に勝敗がきまる。

じゃんけん。それは、いわば相手との心理戦。

じゃんけん。それは、時には戦場と化す、奥深いゲーム。

そう、じゃんけんは、運なんかではない。少しの油断が死を招く。

そう、じゃんけんは、神頼みなんかではない。己の実力。

そんな嵐のような大会が。

今、始まる

### 第十三話

　開催！じゃんけん大会

「おい、もう行かないと」

時計を見て時間を確認し、秋が言った。

「お、もうこんな時間か」

俺も時計を見て、言った。

時計の針は、12時20分を指している。

もちろん昼だ。

開始は1時。

今から出て行けば、まあギリギリだ。

てな訳なので、皆が若干慌ただしくなりだした。

ちなみに、なぜこんな時間になってしまったかと言つと。

ほら、あれだよ。うっかり。

そんな感じで、俺たちは外に出た。

「そついえば、エメリイー又どうするんだ？」

秋が言った。

そついえばそつだな。

みんな自転車だけど、エメリイー又の分はないし…

それどころか、乗れるかすらも怪しい。

超能力で行くからいい。みたいなことも言っていたのだが、超能力を多用すれば、エメリイー又の体が疲れてしまう。

さっきだって、やっと目を覚ました所だった。

今までは、デメリットなんてないと思っていたが、いまは違う。

あまり無理させるのは可哀そうだ。

あまり使わせないようにしよう。

俺は、小さく決心した。

「自転車のかごにでも入れとけ」

自転車のかごが目に入り、俺が言った。

「カゴ!? ウチは荷物じゃないんヨ! せめて荷台なんよ! 後ろの方がいいんヨ!!」

ん?コイツアホだなあ。

「荷台って事は、モロ荷物置く所じゃねえか」

俺は言った。

すると、エメリイーヌの顔が少し赤くなる。

「そそ、そんなこと知ってたんヨ!! 早く乗せるんヨ!!……カゴに!!」

「おい、最後になんか付け足したぞ」

荷台と聞いて嫌になったのだろう。

そんな所に乗るくらいなら、カゴの方がマシ、という事なのだろうか？

まあいいや。

「じゃあお前、秋のカゴに乗れ」

「なんで俺？ まあいいけどさ……」

なんで秋の方に乗らせたか分かっていないらしい。

決まっているだろ、それは……

俺が言おうとしたら、先に、少し呆れ顔で琴音が言った。

「秋兄いが迷子になった時の為でしょ」

「む、失礼な!!」

む、失礼な！！じゃねえよ。

「お前が道に迷ったらえらい事になるからな。24時間さまよったのち、エジプトに到着」

「アホか！！俺どうなんだよ！凄すぎるだろ！！」

「いやあ、意外と誰にも知られていない、隠し通路かなんか見つけどちやったりして」

「ああ、誰も迷いそうな所にまで迷い込むからなあ…ってシバクぞ！！」

「なに…この茶番」

俺たちのプチ漫才は、琴音の強烈な一言により幕を閉じたのだった。

とりあえず急ごう。

こんな所でふざけている場合ではない。

そう思った俺は、エメリーヌを秋の自転車の荷台に乗せ、自分の自転車にまたがった。

「ちょっと待つんヨ。なぜに荷台？」

「お前、カゴに乗せると前が見えないだろ。」

もしかしたら喜びすぎて立ちあがったり、かごが破損したりと、色々危ないからな。

これからバトるつてのに、余計な神経は使えん。

「バトるつて…じゃんけんするだけでしょ…」

暗い声で、ツツコんでくる琴音。

なんだよまだスネているのか。

さっきまで遊んでいたババ抜きで、俺がインチキしたからって。

すると、秋がいった。…俺の考えが読まれている事には、あえてツツコまない。

「海、あれはインチキなんて生ぬるいものじゃない。世界ババ抜き選手権なら、死刑に処するぐらいの…」

なんだよ世界ババ抜き選手権って。

とてつもなくシユールな光景だな。

「なんだよ。トイレに行くふりして、手札をチラーツと見ただけじゃねえか。」

「おまえなあ、チラツじゃなく、チラーツつてのがもうアウト」

「海兄い、思いっきりガン見してたよ。」

「へへっすげーだろ。普通コソコソする所を、堂々と見てやったぜ」

「くたばれ」

とてもどや顔の俺に、琴音が言った。

俺はその時、初めて聞いたかもしれない。

琴音の口から『くたばれ』という単語を。

「とりあえず急ぐなんヨ」

荷台にただのっっているだけのガキが、えらそうに命令しやがる。

でも確かに、急がないとまずい。

エメリィー又の言葉で、秋や琴音も、自転車にまたがる。

「ちやんとつかまってる」

暴れるエメリィー又に、秋が言った。

「分かったんヨ」

その言葉を合図に、皆が一斉に漕ぎ出した。

それから三十分後。

俺たちは無事、公園に着いた。

時間は12時55分。

とてもギリギリだ。

自転車置き場が、自転車で溢れ返っている。

その数ざっと、二十台。

それほどでもなかった。

とりあえず俺達は、適当な場所に自転車を止め、公園へと入っていく。

まるで学校の運動会のように、人でいっぱいだった。

車で来た人も多いらしく、大人子供、俺たちも入れて40人弱ぐらいいる。

「すげえ人だな」

秋がポツリと呟く。

その呟きをスルーし、俺たちは公園の入口付近にある、受付っぽい所に向かった。

そこには、とても優しそうなおばちゃん。

「あら、海ちゃんじゃない、それに秋くんと琴ちゃんも」

「あ、武藤さんむつじこんちわッス」

「こんちわー」

「こんにちは、武藤さん」

俺があいさつをすると、それに続くように、秋、琴音と挨拶をしていく。

この人の良さそうなおばちゃんは、町内会の会長の武藤さん。

自称永遠の十八歳らしいが、どう見ても五十代のおばちゃんだ。

この武藤さんという人は、毎年いろいろな事を企画して、町内の皆を楽しませてくれている。

俺たちはいつも参加するので、お互い顔を覚えてしまったわけだ。

確か去年は、ビンゴ大会だったな。

誰でも出来て、楽しく遊べるようなものが多い。

さすが武藤さんだ。

だけど十万円って、いつもは賞品だけなのに、いったい何があった

んだらう。

毎年、賞品はあったものの、賞金というのは珍しかった。

なので、当然気になるわけで。俺は訪ねてみた。

「今年の景品、何があったんですか？」

すると武藤さんは、嬉しそうに話し始めた。

俺はそれを聞きながら、参加票にみんなの名前を書く。

「実はね。宝くじが当たったのよー。ねえ、いくらだと思っつ？」

突然のクイズ。これも、武藤さんの特徴だ。

答えるまで聞き続けてくるので、いやでも答えなければいけない。

「えと、やっぱり十万くらい？」

賞金が十万なのだ。

多分そのくらいだと思っつ。

それを聞いた武藤さんは、嬉しそうに衝撃の値段を口にした。

「実は一万円なのよー」

え、一万!?

俺が驚いていると、俺よりも先に秋がツッコむ。

「思いつきり、赤字じゃないツスか!」

そう、実に九万円の赤字。

これは結構痛いぞ。

だが、武藤さんは嬉しそうな表情を変えずに言った。

「なんか嬉しくなっちゃったのよ」

…ははは。見ての通り、とても気前のいいおばちゃんだ。

だけど、武藤さんがそこまでしてくれているんだから、これは勝たないとな。

そこらのガキに、軽い気持ちで使わせてたまるか。

俺は、さらに気合が入った。

すると突然。

さっきまで嬉しそうに話をしていた武藤さんが、俺たちの方を見て、不思議そうな顔で尋ねてきた。

「そこにいる緑色の女の子、見ない顔だけど…どこの子かしら？」  
緑色とは服装の事で、女の子は、もちろんエメリーヌの事だ。  
まいったな、どう答えればいいんだろう。

俺が悩んでいると、秋が俺を指差しながら言った。

「コイツのガールフレンドだ」

「あらまつ！！」

はあ！？何適当な事言ってるんだよ。

そして武藤さん！ コイツに騙されないでほしい。

「おい秋。ぶっ飛ばすぞ」

「すまん、冗談だ。こいつは海の遠い親せきのようなもんだ。」  
秋が、とても信じ込んでいる武藤さんに言った。

「なんだあ、そうだったの。おばちゃんはてっきり」  
「…」  
おい、てっきりなんだ。

最後まで教えてくれ。

…まったく。疲れるな。

そこに、秋がまた、いらん事を付け足す。

「今は訳あって、こいつの家にいるんですよ」

「あらまつ!!」

あらまつ再び。

おい秋!!

お前殴るぞ。

まあ、間違っではないから否定はできないが…

とりあえず、あらまつはやめてくれ。

俺は心からそう思った。

「ウチは、エメリー又なんヨ!!」

と、手をあげながら言った。

「エメちゃんっていうのね。おばちゃんは、おばちゃんていいわ。

よろしくね。」

優しい顔でエメリィー又に伝える武藤さん。

それに答えるように、『よろしくなんヨ!』と、元気よく挨拶した。

それを見てにっこり微笑むと、武藤さんが言った。

「ほら、そろそろ始めるから、みんなの所に行ってきなさいな。」

それもそうだな。

そう思った俺は、人が集まっている方に歩き出そうとした。

だが、琴音の様子がおかしい事に気付いた。

さっきからあまり喋っていないし、ずっと俯いている。

俺は、気になって尋ねた。

「どうしたんだ琴音？ 体調でも悪いのか？」

俺がきくと、小さい声で『大丈夫』と琴音。

だが、まだ俯いたままだ。

すると、秋が言った。

「…琴音。いやなら無理しないで、そこで見てろよ」

その言葉で、俺も理解した。

そうだった。

誰よりも人見知りで、恥ずかしがりの琴音。

そんなやつが、知らない人だらけの所で、平気なはずがない。

そんな琴音に俺は、優しく告げる。

「そうだぞ？ 名前は書いちゃったけど、そんなもんどうにでもなるしな。俺たちに気を使って、無理なんかするな。」

「…うん。ありがと。みんなには悪いけど、私は見てるよ」

琴音はそういって、公園の隅っこの方に歩き出した。

それを見たエメリーヌが、突然。

「ウチも疲れたし、琴音と一緒に見てるんヨ」

そういって、琴音の後を走って追いかける。

おいおい、走ってるじゃねえか。

…これも、エメリィー又なりの気遣いなのかもしれない。

追いついたエメリィー又を見て、琴音は驚いた顔をしているが、どこか嬉しそうだった。

そんなエメリィー又に俺は、元気良く言い放った。

「エメリィー又！待ってる！！絶対勝って、お前に好きなもん食わしてやる！！」

そういつて、俺は人ごみの方に、走った。

それを聞いた秋も、琴音に告げる。

「俺も、海なんかには負けない！ まってるよ琴音！！…あと、おばちゃん。そういうわけだから、あの二人の名前、悪いけど消していてもえませんか？」

「もちろん。じゃあ、頑張っておいで」

「ありがとうございます！！」

そういつて、秋も俺の方に駆け寄ってくる。

この勝負、絶対に負けられないな。

俺は心から思った。

広場…もとい公園の中央に、町内会の人たちが集まり、マイクで話し始める。

『えー、今日は暑い中お集まり頂き、ありがとうございます。』  
というほど、暑くはなかったのだが。

さすがに、人が多いと熱気がすごいな。

『とりあえずルール説明。まず、Aブロック。Bブロック。Cブロック。Dブロック。Eブロックにわかれてもらいます。』

なるほど。なかなか本格的だ。

『方法は、くじ引きです。基本はじゃんけんですが、暴力、イカサマは禁止。それ以外なら何でもありです。もちろん…奇策なんかも…クックック』

おい、キャラが変わってるぞ。

それを聞いた、他の参加者だと思われる、小学生達が後ろで話し始めた。

「べつに、じゃんけんに奇策もくそもないよな」 「そうだよな。運だ。」

フフフ。残念だったなお前達。

そんな事を言っている内は、俺や秋には勝てないぜ。

俺には策がたくさんあった。多分秋にもあるだろう。

他のやつらとは、十万円に対しての覚悟が違うのだ。

そのような調子で、ルール説明が終わる。

分かりやすくまとめるところなる。

参加者は、綺麗に40人丁度。

それぞれのブロックに8人ずつ。

計40人だ。

それをくじ引きで決め、それぞれのブロックで勝ち上がった人たちと最終対決。

最後はみんなと一緒に、つまり勝ち上がってきた5人でじゃんけん。

勝ったら見事優勝。十万円というわけだ。

そういうわけで、今はくじ引き中なわけで。

俺は、箱の中に手を入れ、中にあるくじを適当に一枚つかむ。

そして、引きだす。

三角に折りたたまれた紙。

見れないようにホッチキスで留めてある。

「じゃあ、そのくじのどこでもいいので、表面に名前を書いてください」

と、くじ係の女の人と言う。

なるほど。俺たちは最後の最後まで分からないというわけか。

できれば、秋とは、あたりたくないな。

俺は名前を書き終え、係の人に渡す。

これで、後は待つのみ。

俺は、他の人が引き終わるまで、琴音のところで待っている事にした。

「オッス」

公園の端で、ベンチに座っている琴音。

その隣には、とても元気なエメリィヌもいる。

「どうやら楽しく遊んでいたようだ。」

「あ、海兄い。くじ引き、どうだった？」

声で俺に気付き、聞いてくる。

その顔は、さっきとは違い明るい顔だ。

エメリィヌの相手をするので忙しく、恥ずかしさなどは、少し和らいでいるようだった。

これも、エメリィヌのおかげだろう。

「ナイスだエメリィヌ。」

すると、エメリィヌが言った。

「ノド乾いたんよ。」

「あ、そうか。」

「暑いもんな。」

日陰にいたとはいえ、喉は乾く。

「琴音。俺の財布渡すから、喉乾いたりなんかしたら、適当に買って来てもいいぞ。」

そういつて俺は、三千円入っている、黒い長方形の財布を琴音に差し出す。

「え、いいの？ 多分凄く使っちゃうかもしれないけど…エメリイちゃんもいるし」

琴音は、申し訳なさそうな顔をしている。

そんな琴音に、俺はカツコよく言い放つ。

「これから十万を手にするんだ。遠慮することなんてない!!」

「…まったく、その自信はどこから…まあいいや。とにかくありがとう」

そういつて、財布を俺の手から受け取る琴音。

「ついでに、近くのコンビニで、弁当でも買って食ってる」

「やったー。なんヨ!!」

…あ。

俺は、勢いで言ってしまった。

あの大吃いエメちゃんがいるのにも関わらず。

…だがまあ、勝てばいいんだ。楽勝だ。

俺は開きなおり、自分に言いきかす。

いろんな意味で負けられない戦いになってしまった。

まあ、良しとしよう。

そのとき、丁度くじ引きを終わらせた秋が、こっちに向かってきた。

「おお、海もいたのか」

とてものおんきな声だ。

だがその顔からは、覚悟が伝わる。

秋もそれだけ必死なのだ。

「あ、秋兄い。今海兄いに、お金もらったんだよ」

「ああ、なんか食いたかったりするんじゃないかと思ってな。」

「お、そうなのか。じゃあ俺も何か…」

「お前は自分で買え!!!」

「なんだよ。ケチ」

何がケチだ。

普通はお礼の一つでも言う所じゃないのか？

別に、お礼が欲しくてしてるわけじゃないが…

でも兄貴として、そこはお礼をするべきだろ。

「それだけ、仲が良いって事なんヨ」

と、エメリィー又が言った。

…どうやら俺の考え事は、もはや筒抜けらしい。

でも仲が良いってことが。

少し嬉しいな。それ。

うん。それなら許せる。

俺は、エメリィー又の一言で、とてつもなく納得した。

「とりあえず、ゴチになります」

「ああ、エメリィー又にも、好きなもの買ってやってくれ」

そういつと、琴音は公園を出て、コンビニの方に歩き出す。

ちなみにコンビニは、公園の向かい側だ。

なので、自転車もいらぬ。

…あ、そういえば。

俺は一つだけ気になる事が出来たので、秋に聞いてみる事にした。

「琴音、店員の人は平気なのか？」

あの琴音が、普通にレジに行けるのだろうか？

すると秋が言った。

「一応大丈夫だと思うぞ。一人の時は行きたがらないけど、ちゃんと買ってきた事もあったし。そばに知っている誰かがいると、強がつて意外と平気みたいだ」

なるほどね。

まあ、こんなみんなが注目する状況じゃない限り、心配はいらぬだろう。

秋とそんな事を話しながら、ベンチに座り、集計結果を待った。

10分ぐらいすると、琴音たちも戻ってくる。

どうやら大丈夫だったようだ。

両手に持っている、レジ袋以外は。

まあ、エメリイーヌもいるし仕方ないだろう。

しかるにしても、人がいてあまり強くは言えないだろうし。

それから5分後。中央の方から声が聞こえた。

『皆さん！集計が終わりました。表を貼ったので、気になる方はご覧くださーい』

町内会の方がそういうと、ホワイトボードを指差す。

「おい秋。おにぎりなんか食ってないで、いくぞ」

「おう」

なんでお前が食ってんだよ。

…まあとりあえず、向こういつて見てくるか。

俺と秋は、ホワイトボードの場所に向かった。

だがそこには、人ばかり。

後ろの方からだとか全く見えない。

とりあえず俺は、俺のも見てきてもらおうよう、秋に頼んだ。

すると秋は、見事に人の合間を縫って奥に行く。

こういうことは、無駄に上手い。

すると突然、『ギャーース』と、秋の悲鳴が聞こえる。

ギャースって言う人、本当にいたんだな。

俺は、とても珍しい悲鳴を聞き、少し呆れた。

それからしばらくすると、秋が戻ってきた。

……ポロポロで。

「何があったかは知らんが……とりあえずお疲れ」

「おう……、転んでメチャクチャに踏まれたが、しっかり生きて帰ってきたぜ」

「……お疲れ」

あちこちに、靴の泥が残っている。

相当踏まれたようだ。

「ところで、俺はどここの何番目だ？」

俺はきいた。

「ああ、お前はBの1だ。ちなみに俺はCの5」

Bの1。つまりBプロックの1番目という事だ。

とりあえずは、秋と当たらないらしい。

とにかく良かった。

それからすぐに、町内会の人が始めの掛け声を出す。

『はい、確認してくださいましたでしょうか。では、最初の人と、その次の人。前に出て来てくださーい』

そういうと、二名が人ごみの中から前に出て、それぞれが台の上上がる。

あれ？いつの間にあんな台が。

その台は、半径約五メートルぐらいの丸型の台。

参加者の人たちがそこに乗ると、見る側もとても見やすくなる。

ふと、俺は琴音を見た。

すると琴音の手には、双眼鏡。

なかなか用意周到じゃないか。

そんな中、両者のじゃんけんが開始される。

『Aブロック!!最初の選手はかっこいいお父さん対町の小学生A!!それでは、始め!』

おいおい、小学生Aは可哀そうだろ。

それに、なんか気合入ってるなあ、あの町内会の女の人。

後ろの方で、『お父さん頑張れー!!』という、声援が聞こえる。

そして、もう一方からも『さとし頑張れー!!』との声。

これは恥ずかしいだろうな。

俺がそう思っていると、決着がついたようだ。

さすがじゃんけん。

『あーっと、決着がつかましたあー。勝ったのは小学生A!!お父さん残念でしたね。でも参加いただいたので、お茶をプレゼントします。』

おいおい、空気を読めよ。

無駄に気合の入っている実況に、俺は呆れた。

負けた家族は、一気に暗い雰囲気にもまれる。

お父さんは悪くない。頑張った。

一方、勝った方は歓喜の声に包まれる。

たった数十秒で、雰囲気が対照的の人たちが生まれた。

これがじゃんけんというもの。

すぐに勝敗が決まってしまう。

大人だろうが子供だろうが関係ない。

すると、また勝敗が決したらしい。

『おおー！ 三連続あいこと、いい勝負でしたが、勝ったのは気さくなお兄ちゃん！子供相手にも容赦はせずに、華麗にたたきつぶしましたあー！！』

ちよ、実況！子供泣いちゃってるじゃん！！勝った方も気になっちゃって喜べてないよ！！調子に乗り過ぎだあ！

俺のそんな思いもむなしく、ハイテンションで繰り広げられていく大会。

俺は少し、この大会に出た事を後悔し始めた。

こんな事されたら、琴音じゃなくても人間が嫌いになる。

ある意味出なくて正解だよ。

そんなこんなで、試合は進み、Aブロックは最終戦。

しかも、その二人が小学生だと言うのだから。

これがじゃんけんの現実だ。

『さあ、お二人！がんばって〜！！』

「じゃんけんぼん！！」「」

両者が一緒に唱え、それぞれの手を出す。

最後にもかかわらず、一瞬で勝負が決まる。

チヨキとゲー。

結果は右側の子の勝ち。

とても嬉しそうな顔。

だが負けた方は、悔しそうな顔をして、涙を押しこらしているようだ。

そこで、またあの悪魔の声。

『おめでとうございます！！最後につなぐ切符を手にした少年A！  
！それとは逆に、負けてしまった、そのきみ。残念だったねえ。』

てな訳で、Bブロック戦突入です！！」

その一言で、負けてしまった子が泣きだす。

とうとう、心にとどめを刺した。

そんな実況の人が、同じ町内会の人に呼ばれ、  
人気がない所に連行  
される。

そして五分後。

凄く暗い雰囲気のを漂わせながら、戻ってきた。

こっぴどく叱られたのだろう。

その雰囲気の中、俺の番が回ってきた

第十三話 完

### 第十三話の開催！じゃんけん大会（後書き）

どもです^^

そして、十三話のご愛読ありがとうございました^^

中途半端な終わり方で申し訳ない。

実はね。長くなってしまったので、急遽分割ww

一話で終わる予定が、まさかの前後編ww

もしかしたら、前中後編になるかも。

途中でバツサリ切ったので、本当に中途半端ww

ギャグもあまり入りませんでした^^

本当に申し訳ない。心から謝る。

と、言うわけでして。

次回をお楽しみに！

第十四話 終幕！じゃんけん大会（前書き）

どもです^^

今回は、じゃんけん大会編完結！

というわけです。ええ。

それでは、いってらっしゃいませ。

## 第十四話 終幕！じゃんけん大会

前回のあらすじだ。

じゃんけん大会に来た俺は、秋と参加した。

1ブロック8人×5ブロック。

計40人でやる、じゃんけん大会。

Aブロックの試合が終わり、とうとうBブロック。

つまり俺の番だ。

はたして、優勝するのは誰だ！！

そして、十万円を手にするのは！？

それでは。

はじまります。

## 第十四話

（終幕！じゃんけん大会）

とうとう俺の番が来た。

遠くの方で、エメリーヌの音がする。

応援をしてくれているみたいだ。

秋を見ると力強い目で、こちらを見ている。

ここで終わるんじゃないぞ。という顔だ。

まかせろ。俺はこんな所じゃ負けない。

俺は気合を入れなおし、前に出る。

俺の対戦相手を見ると、同じクラスの山下だ。

俺の事を、いつも目の敵にしている。

金持ちだのなんだのって、俺の事を良く思っている奴なんて、学校にいないからな。

大体同じクラスのやつは、俺をバカにしている奴らだ。

そんなやつには負けない。

すると、山下が嫌味を言ってくる。

「お前、金持ちのくせにこんなところ来て、何してるんだよ？」

今の山下の顔を見たら、多分みんなもむかつくと思う。

そういう顔をしている。

そんな山下を、俺は挑発する。

「うるせえ。悔しかったら俺様に勝って見やがれ」

「この野郎」

すると、いい感じにむかむかしている。

怒った奴ほど、やり易い奴はいない。

台上上った俺らは、それぞれに向かい合う。

山下の顔は、チンピラの如くいらついている。

軽い挑発なんかに乗せられやがって。

だからお前はいつまでたってもチンピラなんだ。

俺が思っていると、山下が、テンション絶賛ガタ落ち中の実況の人に聞く。

「おい、たしか何しても良かったんだよな？」

その声に、とてもビビる実況。

『は、はい。暴力や、インチキ以外は基本OKです。』

「おし。わかった」

何か策でもあるのだろうか？

山下がかすかに不敵な笑みを浮かべている。

『では、はじめます。』

おい、さっきのテンションどこいった。

投げやりだな実況。

そんな実況の開始の合図と同時に、山下が動き出す。

俺に顔を近づけると、耳元でささやいてきた。

「てめえ、調子乗ってつと、痛い目見るぞ？」

俺は、それを聞き、笑いをこらえるのに必死だった。

そして俺は、そんな山下に、馬鹿にした口調で言い放つ。

「プッ、お前、いまだき恐喝なんて流行らねーよ。学園ドラマの見すぎだろ。」

そういつて、俺は山下の肩を豪快にたたく。

ふと、秋を見ると、とてもニヤニヤしている。

その時、俺の挑発に山下がキレる。

「そうか。よくわかった。帰り道、背後に気をつけとけよ？」

「これはご丁寧に。お前も、夏休み明けの抜き打ちテストには気をつけるよ?」

俺は笑いながら言い返す。

『えっと、そろそろ始めて下さい』

と実況。

しょうがねえ。俺も動くか。

俺は、得意な心理戦に持ち込む。

「とてもおバカな君に、サルでもわかるようにいい事をしえてやる。俺、実は空手やってるんだ。」

もちろん嘘だ。

「だからなんだよ」

「この前、有名な不良高校の奴らが、何者かにやられた事件あったる？ 新聞に出てたはずだ。まさか知らないのか？ ああ、お前新聞読めないんだっけ。悪かったな。」

もちろんすべて嘘だ。

だが山下は。

「…知ってるに決まってるんだろ！！ 新聞に出てたんだろ？ それくらい知ってる。逆にお前が新聞読んでたのが驚いて、腰が抜けそうになったぐらいだ」

おいおい、知ってるのかよ。

そんな事件、新聞に載ったことねーよ。

つか、有名な不良高校に心当たりがあるのか。

俺は知らなかったぜ。

この辺りにもあるんだな。

「その事件。誰がやったか…わかるか？」

俺は、恐ろしい口調で、言った。

「…誰だよ？」

つい息をのんでしまった山下。

完全に信じていやがる。

「言わなくちゃ分からないのか？ これだからバカは。バカでも分かるように、その体に直接教えてやるよ。」

ここで、キッと睨む。

睨むと同時に、俺は、山下に拳を見せつけるように、握りしめる。

これ重要。

俺はもともと目つきが悪いもんだから、真剣な表情になると、とても威圧感が出る。

つまりは、怖い顔が得意というわけだ。

「お、俺は騙されないぞ！ 嘘付きやがって！…！」

まるで自己暗示のよう。

だって声が震えている。

俺の睨みは、相当効果があったようだ。

「実は俺なあ、グーが好きなんだよ。殴った時の感触が得にさあ。」

いいんだよなあ。枕を殴った時の感触。

皆さんもお試しあれ。いいストレス発散になりますよ。

「い、いいのか？殴ったりしたら失格だぞ！？」

コイツ、いまさら何をぬかしてやがるんだ？

さんざん俺の事、バカにしてくれただろ。

「失格？上等じゃねえか。あいにく俺は、金持ちですから？」

「ひっ！」

すっかり、おびえている。

「じゃあそろそろ始めよう。いくぞ？じゃ〜ん」

俺は振りかぶる。

「け〜ん」

俺は殴りかかる。もちろんフリだ。

「ひいひい」

そういつて、山下は反射的に、手のひらで顔を守る。

そこに俺は優しく。

「ぼん」

チヨキを出した。

山下は、顔を守るために手を開いている。

つまりはパー。

よって、俺の勝ちだ。

「と、いうわけだから。お疲れ様」

俺は、満面の笑みで言い放った。

それを見て、やっとだまされた事に気付く山下。

そんな山下が、抗議を始める。

「おい、審判！！今のはインチキじゃないのか！？」

そう実況の人に言っている。

いつから審判になったのだろう。

とはいえ、実況でもないけどな。

とりあえず、今は審判の方向で。

「おい！聞いているのか！？」

審判にえらいブチ切れる山下。

相手にしてみれば、とんだ迷惑だ。

そんな審判が、言った。

『今のは、インチキ行為とみなし、失格とします！！』

その言葉に、その場にいる誰もが驚く。

もちろん秋も。

ただその中で驚いていないのは、勝利を確信した山下と。

失格を告げられた俺のみだった。

クッククク。あまい。あますぎる。

本当にこいつらは、俺がこの程度も予想できないとも思っているのか？

秋もだ。俺の事をなめ過ぎている。

俺は、審判に問いたです。

「その判定。ちょっと待ってもらおうか。」

俺の言葉に、山下がしつこく反応する。

「なにいつてんだ。お前は負けたんだ。さっさと帰れよ。」

俺が負け？そんなわけないだろう。

「最初に言っていただろう。奇策は、認めると。」

『え、ええ』

とても困り顔の審判。

だが俺は構わず続ける。

「俺はインチキではない。作戦だ。頭を使った。それだけだ。心理戦は禁止なんて、俺は聞いていなかったぞ？」

俺が告げる。

すると山下が。

「お前はバカか？ そんなの言わなくても気付くだろ。」

バカはお前だよ。

「じゃあ俺のがインチキというのならばだ。最初にコイツがした事はどうなる？」

俺は、山下を指差しながら言い放つ。

すると、山下が自ら、俺の罠にはまりに来る。

「あ、あれは恐喝ではないぞ！？勝手な事をぬかすんじゃない…」  
まだ喋っている山下に、俺はかぶせる。

「おや？俺は恐喝なんて言っていないぞ？最初にした事はなんだと言っただけだ。その言葉を聞いて、恐喝なんて単語を口にしたという事は、お前、自分で恐喝したと、認めてるってこと。つまり、お前は恐喝をした！！どうだみんな！？コイツの方が、よほどインチキだろ！！」

俺は、その場にいる皆に、問う。

そう。恐喝なんて言葉を聞いて、良く思う人などいやしない。

なら、俺がどんなに酷かろうが、自然と俺の味方になるわけだ。

その証拠に

「たしかに、恐喝はインチキだ！」

「その坊やのいう通りだわ！！」

「<sup>カイ</sup>海の坊主が正しい！！立派に頭を使ったんだ！！」

という声が、次第に大きくなる。

そうだそうだ！！！！

と、口ぐちにみんなが叫ぶ。

もうこうなってしまうえば、審判的には、俺の味方をしなくてはならなくなる。

さっきまで、他の町内会の人と話し合っていた審判が、マイクを再度握りしめる。

どうやら、まとまったようだ。

『皆さんお静かに願います！！えー、審議の結果。恐喝はいけなしと判断し、エントリーナンバー39の、山空 海さんの勝利です』

つまり。

「山下！！ お前の負けだあ！！」

「そ、そんな」

そういつて、ひざから崩れ落ちる山下。

全人々に批判されたとなっちゃ、さすがの山下もこたえるはずだ。

もう二度と、俺に生半可な覚悟で立ち向かってくるんじゃないぞ。

「じゃあな、山下」

俺はそういつて台から下りて、琴音達のいるベンチまで歩いていく。

俺がよけなくても、人が勝手に道を開けてくれる。

そして俺が通るたび、感動の声を投げかけてくる。

「坊主やるな！」

「いい物見せてもらったぞ！」

「じゃんけん大会で、まさかあんなものが見れるなんて思ってなかったわ」

「感動しました！ 尊敬します！」

俺はみんなに手を振り、さっそうと歩き続けた。

そんな俺の後ろから、秋が追いかけてくる。

そして、秋が言った。

「お前凄かったなあ。スッキリしたぜ！」

「まあ、俺が本気になればこんなもんだ。」

「俺はもうだめかと思ったぞ。…それにしても、山下も悲惨な奴だなあ」

「まあ、あれでこりてくれたら苦労はしないけどな。」

秋も、俺をほめている。

やめろよ。照れるじゃねえか。

そんな事を話しながら、琴音のいるベンチに到着。

琴音もあの様子を見ていたのだろう。

俺を尊敬のまなざしで見ている。

「海兄い凄かったよ！！ 正直、あんなに凄いななんて思わなかった  
！！」

そうだろうそうだろう。

そして、エメリーヌが言った。

「ごめん。おにぎり全部食べちゃったんヨ。」

そうだろうそうだろう…え？

「おい！俺の分はどうした！ 俺の明太子おにぎりは！？」

取っついてくれって頼んだのに!!

「だから、謝ってるんヨ!つい食べちゃったんヨ!!」

つい食べただと!?

そんな事あつてたまるか。

「おい、琴音!なぜエメリーヌを止めなかった!!」

隣にいたなら止められたはずだ。

だがしかし

「いやあ、海兄いので夢中になっててね!」

なんだそうか。なら仕方がない。

くそっ、俺のおにぎり!!

もうこうなったら仕方ねえ。

「十万とつて帰るぞ!!」

「次、海と当たる奴に、すっごい同情するわ」

秋が言い終わったと同時に、実況の声。

『みんなの期待の星、海さん！！出番ですよ！！』

お！？とうとう俺の番か。

まってる、十万！！

俺の目は、多分、福沢諭吉になっている事だろう。

俺は十万目指して、再び戦場に足を踏み入れた。

『海選手ご到着です！！それではあ、ファイト！！』

俺の次の相手は…って子供かよ！？

くそっ、本気が出しづらい。

だが、俺は手加減などしないぞ！！

獅子はうさぎを狩るにも全力を尽くすものなのだ！！

とりあえずあれだ。

説得の開始だ。

「えっときみ、名前は？」

まずは距離を縮める！

俺の急な質問に、しっかりと答えてくれた。

「おれは、かけるです！」

「かける君！！とってもいい名前じゃないか！！　ところで、今ここに、親は来てるのか？」

俺は、とても優しい顔で聞いた。

かける君は、ちゃんと答えてくれた。

「お母さんと来てたけど、今はちょうどお昼食べに行ってる」

よしっ！これはチャンスだ。

これを逃す手はない。

「かける君が十万円欲しい理由はなんだ？」

「欲しいゲームがあるんだ！一万円あれば買えるんだけど…」

欲しいゲームか。なるほど。

でもこのくらいの年だと、そんな大金持たせようとはしないだろう。

「十万円ゲットしたとしても、お母さんとかに、千円ぐらいしかもらえないんじゃないかな？」

俺も良くあることだった。

宝くじかなんかをして、当たったとしても、必ず少しだけしかもらえなかった。

どうやら俺の言葉は、もろ凶星だったらしい。

とても驚いた表情で聞き返してきた。

「なんでわかったの！？兄ちゃんすげー」

そうだろう。

子供の心は忘れてないつもりだからな。

そんなかける君に、俺は交渉を始める。

「なら、相談だ。もし俺が十万円とったら、一万円くれてやる」

「え…でも…」

困っているようだ。

それはそうだろう。

俺がもし負ければ、それまでだからだ。

かける君がもしも優勝し、十万円が手に入った時に、貰えるか分からない一万円に賭けると、

見ず知らずの人に賭けて、一か八かの大勝負に出るのか。

というのが、多分一緒。同じ確率。だから迷っている。

俺に頼んだ時。俺が負けるとすべてが台無し。

自分でやっておけばよかったという後悔。

それらを振り払うなど、多分無理だろう。

自分の力で勝ち取り、親を説得するか。

俺が負けなければ、確実に貰える一万円。

だが負ければそれまで。見ず知らずの人に運命を預けるのか。

究極の選択。

そんなもの選べるわけがない。

だがもしも、かける君にデメリットがなければ、どうだろう。

そう、何も失わない。

もしそんなものがあれば。

答えはそう。目に見えている。

「俺が負けても、一万円は絶対にくれてやる。」

「えっと…その…」

「親に言いづらいか？」

「うん」

見ず知らずの人にお金を譲ってもらったとなると、親としては困るだろう。

だが問題ない。

俺が無理やり押し付ける形にすればいい。

そうになると、向こうも嫌嫌だが、受け取るほかない。

俺が譲らなければいい。ただそれだけ。

「大丈夫だ。考えてある。お前はただ、俺を信じてくれるだけでいい。」

俺は、かける君に説得を続ける。

「お母さんも、最初は気にすると思う。でも、大丈夫。そもそも、プレゼントを貰って、嫌がる人なんていないだろ？」

そこまで言うと、俺は一呼吸置き、優しく。そして力強く告げる。

「だからだ。俺を勝たせてくれ！」

俺は、かける君の両肩に手を置き、力強いまなざしでかける君を見つめる。

しばらく考え込んでいたかける君が、とうとう口を開く。

「…うん、わかったよ、兄ちゃん」

かける君は、俺の言葉にうなずいてくれた。

「ありがとうかける君！！良く決心してくれた！！ お前、カッコいいぞ！！」

よし。かける君のおかげで、今回も勝てそうだ。

一万円を浪費したが、これから手にするものに比べれば安いもの。

俺は、かける君に言った。

「じゃあ、俺がチヨキを出すから。パーを出してくれ。」

「わかった」

そういって、じゃんけんが始まる。

俺とかける君は、一緒に唱える。

「「じゃーんけーんぽん!」「」

俺はチヨキ。

かける君はパーを出した。

その瞬間。

俺は生き残ったわけだ。

最後に、俺はかける君に告げた。

「かける君、チヨキは指のハサミだ。チヨキでパーを切る。すなわち指きりだ。俺は絶対に約束は守る」

俺がそう告げると、かける君は力強く頷いてくれた。

もちろん、そんなやりとりは、みんなにも伝わっている訳で。

『えー、これは驚きです。じゃんけん大会なのに、頭脳のみで勝ち上がってしまいました！！これからどうなるのか。必見の選手です！！』

いいぞ実況！！もっと盛り上げてくれ！！

実況の人だけからじゃなく、周りからも、歓喜の声飛び交う。

俺は、笑顔で手を振り返した。

なんという清々しい気分。

そんな人たちに囲まれ、俺は次々に勝ち上がっていく。

誰もが予想もしなかった事を、俺がこなす。

そのたびに、声援。歓声の嵐。

そして俺は、とうとう決勝まで勝ち上がったのだった。

俺の戦いが終わり、次は秋のいるCブロック。

秋の強引な作戦が炸裂。

それと運のみで、決勝に勝ち上がって行った。

つか、ほぼ運だ。

理由があるとすれば、その影の薄さ。

それゆえに、相手も気を抜いていた事だろう。

そのあと、Dブロック・Eブロック共に決着がつき、残るは俺たちの対戦となった。

『さあー、泣いても笑ってもこれが最後！！ はたして十万円を手にするのは誰なのか！！ 運命の最終決戦！！開始です！！』

「海、お前がどんな借金地獄になるうが、お前がまいた種だ。手加減はしねえぞ。」

秋が俺に向けて告げた。

俺もそれに答えるように、言った。

「あたりまえだ。手加減なんてしたらぶっ飛ばす。」

Aブロックの、町の小学生A。

Bブロックは俺。

Cブロックは秋。

Dブロックは、中坊。

Eブロックは、ノリのいいおばちゃんだ。

俺たちは、それぞれに頭を下げ、あいさつをした。

『それじゃあ、レディーフアイト!!』

実況の合図とともに、五人全員が腕を振り上げる。

敵は、四人。

それに勝つ方法があるとすればだ。

これしかないだろう。

俺は大きく息を吸い、そして

「わっ！！！！！」

凄い大声を出す。

それゆえに、みんなが一瞬固まる。

今だ。

俺はじゃんけんを始めた。

「じゃんけんぽん！！！」

俺の声を聞き、慌ててみんなが出す。

みんな知っているか？

考える暇を与えず、しかも驚いた状態だと、複雑な形をしたチヨキはあまり出さない。

いや、出せないのだ。

すぐに指先をを動かす事など、できない。

俺の言葉で、早く出さなきゃと言う事だけが頭を支配する。

そればかりが頭に残り、何を出すのかを考えるのが、0・数秒遅れる。

それで充分だった。

チヨキの確率は低い。

すなわち、パーを出せば負ける事はない。

これらの事を踏まえていただくと、この結果にも満足していただけだろう。

俺、秋、小学生はパー。

それ以外はグーだ。

「くそー、もうちょっとだったのに」

とても悔しそうな中坊。

「あんなら、負けてしまったわ」

と、意外と平気そうなおばちゃん。

たった数秒で、すべての苦勞が水の泡と化す。

これがじゃんけん。

俺に手加減という文字はない。

残るは、小学生ともう一人。

秋だ。

すると、秋が不敵な笑みを浮かべて言った。

「お前の考えそつなことなど分かっていたぜ」

…ならなぜ、お前もパーを出した。

思いつきり惑わされている証拠だろ。

するとその時、秋が唱える。

「じゃーんけーん」

くそつ、秋のせいで行動に移せなかった。

これが作戦か。

俺に考える時間を与えないため。

もうだめだ。

ここは、勘でいっつ。

「ぼん」

秋の声に合わせて、俺は手を出す。

俺と秋はグー。

小学生はチヨキだった。

その結果を見て、秋が俺に言い放つ。

「お前との一騎打ちか。断わっておくが、俺は負けるつもりはない」

そんな秋に、俺も負けじと言い返す。

「もちろん俺もだ。俺は俺の戦い方で、挑ませてもらう」

お互いに、真剣だ。

たとえるなら、侍同士が、敵の様子を見る為に、間合いを取っているかのよう。

緊迫した雰囲気、公園全体を支配する。

そして、動き出したのは秋だ。

「じゃんけんぽん!!」

俺もそれに合わせて、出す。

お互いにチヨキ。

あいこだ。

次は俺が動く。

「秋。俺は、グーを出そうと思う」

俺は言った。

「なら俺は、当然パーを出す」

秋も、それに返してくる。

なかなか手ごわい。

最後の相手には、ぴったりだ。

「……。やっぱり、お前には小細工は通用しないみたいだな。」

まったく、つられない。

秋には、どんな手も通用しなそうだ。

「ああ。長い付き合いだからな」

俺と秋。

お互いに不敵な笑みを浮かべる。

だが秋。言ったはずだ。

俺は俺の戦い方でやると。

行くぞ秋！！いざ、尋常に勝負！！

「じゃん！！」

長かった戦いが。

「けん！！」

今。

「ぼん！！！！」

……………。

場に、沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは、俺でも、秋でもなかった。

『ついに、今。この長かった戦いが、おわりの時を迎えましたあ！』

そう。

勝ったのは。

『優勝者は、エントリーナンバー39。山空 海選手です!!!!!!!!!!』

その結果を聞いた他の参加者達から、『うおおお!!!!!!!!!!』と、歓喜の聲が浴びせられる。

俺は勝ったのだ。

「嘘だろっ!? なんで……!!」

驚きを隠せない秋。

そんな秋に、俺は言い放つ。

「残念だったな。お前はまんまと、俺の手のひらの上で転がされた訳だ」

俺がじゃんけんと、唱えるとき。

秋はずっと俺の顔を見ていた。

いや、俺が仕向けた。

俺が心理戦に持ち込もうとした時。

秋はつられなかったが、若干俺が何を出すか分からなくなったはずだ。

そこで、秋はどう出るだろう。

俺は、顔に出やすいタイプ。

秋はそれを見て、俺の考え。つまり、俺が出そうと思っている手を  
読み取るうとした。

普通ならそこで、表情に出ないように必死になる所だ。

だが俺は違った。

あえて見せる。

嘘の考えを、秋に読みとらせたのだ。

そのあとは、もう簡単だ。

俺が思ったのと、違うのを出せばいい。

俺があのととき思ったのはパー。

当然、俺がパーを出すと思っている秋はチヨキを出す。

そこに俺は、グーを出した訳だ。

俺はすべてを秋に説明した。

すると秋は。

「…やられた。海。お前はやっぱすげーよ!!」

落ち込むと思っただが、そんな事はなかった。

理由を知った秋は、とても感心した様子だ。

俺はそんな秋に、告げた。

「長い付き合いだからこそ、使える作戦もあるんだぜ」

この作戦は、俺の事を良く知っている、秋が相手だからこそ出来た事だ。

俺のそんな言葉を聞き、秋は、どこか満足そうな顔だった。

そのあと俺は、みんなの歓声を背中を感じながら、賞金の十万円を受け取り、その場は解散となった。

賞金を手にした俺は、今までずっと応援をしてくれていた、かける君のもとに駆け寄る。

どうやらお母さんが来たみたいだった。

俺は、あいさつをする。

「あの、かける君のお母さん。これ…かける君に。」

そういつて、俺は一万円を差し出す。

当然、かける君のお母さんは、驚いた様子だ。

「あの…これは？」

「俺は、かける君に励まされました。俺に負けた後も、ずっと応援してくれて。だから、これでかける君にゲーム機を買ってあげて下さい。かける君、ずっと欲しかったみたいですから。」

俺は、優しく微笑み、お辞儀をする。

そして、かける君の頭を、軽く撫でた。

「気持ちありがたいです…でも『かける君は頑張っていました！』遠慮して受け取らない、かける君のお母さんの言葉に、俺はかぶせました。」

そして俺は、かける君のお母さんの手に、無理矢理一万円を握らせる。

そのあとに、俺は静かに告げた。

「俺からの、かける君への気持ちです」

その言葉を聞き、かける君のお母さんが静かに頭を下げてる。

そして、言った。

「…ありがたく、受け取らせていただきます」

…これでよし。

約束は、守ったぞ。

俺は最後に、力強く。

そして優しく、かける君に言った。

「おいかける。買ってもらったら、ちゃんと大事に使わなくちゃダメだぞ。」

俺が言つと、元気良く頷いてくれた。

俺は、二人にあいさつを済ませ、琴音達のいるベンチの方に歩き出した。

もうすっかり人はいない。

後かたづけをしている、町内会の人々が数人いるだけだ。

そんな事を思いながら、俺は琴音の所に着いた。

「海兄い。お疲れ〜」

ベンチに座っている琴音が言った。

すると、琴音の隣に座っていたエメリーヌも、俺に言った。

「カイ、お疲れさまなんヨ!！」

とても元気だ。

俺はそんな皆に、提案する。

「この九万なんだが…、武藤さんに渡そうと思う」

そんな俺の提案に、驚いたようだ。

特に秋が。

「え？なんでだよ!？」

「なんだよ、その『鳩が豆鉄砲食らいました』みたいな顔は。俺は最初からこのつもりだったぞ。」

ちなみに、武藤さんは、このじゃんけん大会を企画してくれた人だ。

賞金も、武藤さんが全額出している。

俺の手元には九万。

丁度武藤さんが出した分と同じ額だ。

俺は多分、はたから見れば、バカだと思われるだろう。

ただの自己満足かもしれない。

だがそれでいい。

俺がしたいと思うのだから、仕方がないのだ。

「まったく、しょうがねえ奴だな。それはお前のだ。好きにしろ」

「私も賛成」

「ウチはどっちでもいいんヨ」

そんな俺の提案に、みんなは優しく了承してくれた。

そんな訳で、俺たちは、後かたづけをしている武藤さんの所に向かう。

走って来る俺たちに、武藤さんも気付いたようだった。

武藤さんは、作業を中断すると、優しく言った。

「あら、海ちゃんじゃないの。優勝おめでとう」

俺はそんな武藤さんに、きりだす。

「あの、その事なんですけど…これ、武藤さんにといいまして」

そういつて俺は、九万の入っている封筒を差し出す。

それを見て、驚いた様子の武藤さん。

「あら、なんで？」

「一万は訳あって使ってしまったが、九万円あります。ちょうど武藤さんが、自腹で払った額です」

俺の言葉に驚きつつも、やはり断わって来る。

「いいのよ、気にしなくても。それはあなたのなんだし、好きに使いな」

さすが、大人って感じた。

相手を傷つけないように、断っている。

そんな武藤さんに、俺は真剣に言う。

「俺がこうしたいからしてるんですよ。受け取ってください」

俺は頭を下げる。

そんな俺の言葉に、付け足すように秋が言った。

「こいつ、一度やるって決めたら、テコでも動きませんよ」

それに続き、琴音やエメリーも、武藤さんに言った。

「私も、武藤さんに受け取ってほしいです」

「ウチもなんヨ」

みんなの言葉に続けて、最後に俺が言った。

「今日はとても楽しかった。俺はそれだけで満足です。」

俺たちの言葉を聞き、武藤さんの目は涙で潤んでいる。

「あんたたち。泣かせるじゃないか…わかった。そこまで言うなら、ありがたく受け取る事にするよ。ありがとね。」

武藤さんが頭をさげてる。

「こちらこそ、ありがとございました!」

そんな武藤さんに俺は、お礼を告げる。

そして、俺たちは自転車置き場に向かった。

自転車置き場に着くと、大量にあった自転車が、すっかり無くなっている。

俺たちは、それぞれ自転車にまたがり、エメリーヌは秋の後ろに乗りみんな一斉に漕ぎ出した。

それから約30分ぐらいで俺の家に到着し、秋と琴音とはそこで別れた。

俺は家に入ると、スキップをして上機嫌なエメリーヌにお礼を告げる。

「今日参加しなかったのって、琴音の為だろ？ エメリーヌありがとな。」

俺がいうと、顔を赤くしているエメリーヌ。

「べ、別にカイがお礼を言う事はないんヨ。ウチが好きでやったんヨから…」

そっぴいなながらも、顔は真っ赤だ。

コイツ照れてやがるよ。

可愛い所もあるじゃねえか。

「お前何照れてんだよ」

俺がそういうと、エメリー又が、むきになって否定してくる。

「う、うるさいんヨ！照れてなんてないんヨ！！」

「嘘つけよー。顔真つ赤だぞ？」

「酔っぱらっているんヨ！！」

「お前、いつ酒なんか飲んだ。嘘をつくんじゃない！！」

「うるさいんヨ！！」

「ごういづふうに、みんなでバカやったり。

ふざけあったりするのが一番楽しい。

ああ、今日も平和だ。

平和が一番。

俺は、平和なこの毎日を、静かにかみしめていたのだった。

第十四話  
完

## 第十四話の終幕！じゃんけん大会（後書き）

追記：

どうもです^^^

始めに、俺日！十四話ご愛読ありがとうございます^^

と、いうわけで、じゃんけん大会編終わりました。

クッソ疲れたww

もうね、後半の進みがとても速かったのは、俺の体力の限界だからですww

でもまあ、とりあえずは、お疲れ様でした ww

もうちょっと、秋と海の戦いも書きたかった気もするけど……まあいいか

あと、今気付いたんだけど、雨止んでるww

じゃんけん大会に行く前までは、ふってたのだが。

まあ、十三話でババ抜きとかしてたみたいだし、その時に止んだのでしょうww

てなわけで。

次回をお楽しみにね!!

第十五話 俺とオタクとメガネとデジャヴ (前書き)

どもです^^

いやー、頑張ったよ。

心が折れかけまくったけど良かったよ。

それでは、どぞ

## 第十五話　俺とオタクとメガネとデジャヴ

朝。

温かくて優しい光。

「くそつ、まぶしいな」

俺は、そんな朝日を浴びて目覚める。

重たい体をゆっくりと起こし、目覚まし時計を見る。

6時半。

目覚ましは、七時半にセットしてある。

いつもより早い起床だ。

俺の隣では、エメリィヌが静かに寝息を立てている。

パジャマ姿で、ほんのりとシャンプーの香りが漂う。

なにぶん、俺は一人暮らしだったもんで、布団が一つしかない。

ソファで寝ようにも、朝起きたら体が痛くなる。

それは嫌だ。

しかも、ベッドの大きさがシングルときた。

とても狭い訳だ。

一応、エメリイーヌを壁側にして寝かせている。

寝返りうって落ちたら困るし。

俺は俺で、寝返りは打てない。

少しでも動いたら、落ちるかエメリイーヌを下敷きにするかのどちらかだ。

だけど、それにもだいが慣れた。

多分唯一の救いは、エメリイーヌの寝像がとてつもなくいい事だろう。

エメリイーヌは、本当にきれいに寝ている。

布団をはがすような事もなければ、俺を蹴っ飛ばしたりする事もない。

寝ている間は、とてもおとなしい。

寝ている間だけは。

とりあえず、腹減ったから朝食でも作るか。

俺はそう思い、布団から出る。

俺が布団から出た事により、エメリイヌにかかっていた布団が一緒にめくられる。

それを俺は静かにかけ直し、部屋を出て、一階に下りた。

そうそう、実は俺、今とても気分が良い。

なぜなら、スッキリと。何事もなく目覚められたからだ。

普段は、エメリイヌが基本早起きだ。

自分が起きるとすぐに、俺を巻き込む。

あるときには、水をかけられたり。

またあるときには、顔を踏まれたり。

そして一番ひどいのが、階段から落とされた事だ。

超能力があれば、俺を運ぶ事なんて造作もないだろう。

まあ、さすがに、階段から落とすのは危ない。

そんな訳で、すぐにやめさせた。

普段寝坊してた俺が、そのおかげもあって寝坊しなくなった。

ちゃんと八時前には目が覚めるし、十時を過ぎれば眠くだったなる。

こんな健康的な生活を送れるのは、あいつのおかげだ。

それだけは、感謝をしている。

日ごろの感謝もこめて、今日は俺の好きなオムライスにでもするか。

一応、あいつも好きだと思っ。

なにせ、俺が好きなのだから。

…っと言うのは冗談で、この前作ってやったら、とてもつまそうに食べていたからだ。

一階に降りた俺は、早速準備にかかる。

10分後

「いやあ、つまそうだ。」

具たくさんなチキンライスが、ふわふわとした卵で包まれている。

だが何かが足りない。

何だろう。

…そうか。

何もかかってないや。

そう思った俺は、冷蔵庫を開ける。

そこでふと思った。

ケチャップとデミグラス、どっちがいいのだろうか。

だが俺は、すぐに考えるのをやめた。

大体ケチャップかけとけば美味い。

そんなノリで、ケチャップをかけ始める。

その時、俺は思いついた。

エメリーヌの所に、ケチャップでなんか書こう。

そう思った俺は、『バカ』とだけ書いた。

あいつがどう反応するのか、気になったからだ。

出来上がったそれらをテーブルに並べ、俺はエメリーヌを起こしに二階に上がる。

「エメリーヌ。ちと早いが飯だぞー」

そっいいながら、エメリーヌが寝ているであろう、自分の部屋のドアを開けた。

「俺とオタクとメガネとデジャヴ」

エメリーヌを見ると、まだ静かに寝息を立てている。

起こすために俺が、エメリーヌに近づいた時だった。

とてつもない勢いで、ガバツと跳ね起きるエメリーヌ。

そして言った。

「メシなんヨか!？」

どうやら、俺が運んできたほのかな香りにより、目覚めたようだ。

「つかエメリーヌ。言葉遣いが悪いぞ。」

メシはないだろうメシは。

せめて朝食とか。

最低でもブレックファーストと言いなさい。

「そんな事言うような奴、日本にはいないんヨ!…」

俺の考えを読み取ったかのように、ツッコんでくるエメリーヌ。

なんだよ。

「そんな事言うなら、俺が毎朝使ってやるよ。」

オシヤレだからな。

俺はオシヤレが好きなんだ。

「どの口がほざくんヨ」

あきれ果てた目で、俺を見るエメリーヌ。

お前。口悪いな。

ほざくとか。

まあいいか。

「とにかく、ブレックファーストが冷める」

俺が言うと、エメリーヌの表情が、なんか凄い事になっている。

すぐく引いてるようだ。

え、なんでだ？

なんでそんなに、怪訝そうな顔をする。

もしかしてあれか？

うん。あれだ。あれしかない。

俺は、大きく息を吸い、そして…

「breakfast」

「イヤアアアア！！！」

おい！？なんだその悲鳴は！？

発音じゃないのか？

発音がいけなかったんじゃないのか？

なんだよその目は！？

今のは完ぺきな発音のはずだぞ！？

なんか間違ってたか！？

そう思い、もう一度自分で確認する。

「breakfast」

「イヤアアアアア！！！！！！！」

なんだよ！？

その犯人が人を殺害しているのを見てしまったような悲鳴は！？

breakfastの何がいけない！？

もしかしてあれか!?

よし、任せろ!!

俺は再び、大きく息を吸う。

そして…

「breakfast!!」

「イヤアアア!!!!エクスクラメーション・マークなんか付け足し始めたあああ!!!!!!」

おいこら。

『!マーク』を正式名所で呼ぶな。

頭がおかしくなりそうだ。

つてか、冷める。

オムライスが冷める。

とりあえずあれだ。

一階に連行だ。

俺は、ムンクの叫び状態のエメリィーヌを抱き上げ、オムライスのある部屋に向かう。

そのオムライスを見た瞬間、エメリーヌがトビウオのごとき瞬発力でかぶりついた。

おいこら！

それは俺のだぞ！？

お前がそれを食ったら、お前宛に書いたメッセージはどうなる！！

ブーメランでもないのに、俺のもとに帰ってきちゃうだろ！？

俺は自分に対してバカって書いて、何がしたいんだよ！！

自虐趣味を持つてる、ただの変態じゃねえか！！

っと思っただが時すでに遅かった。

無我夢中でパクついているエメリーヌ。

最悪だ。

もうこうなったらトイレ行くしかねえよ。

「ちょっとトイレ行ってくる」

俺はエメリーヌにそう告げて、トイレへと向かった。

「くそっ、なぜこんな事になった」

そう愚痴りながらトイレをすませ、手を洗う。

そして、観念してバカと書かれた憎たらしいオムライスでも食おう。

そう思い、俺はオムライスのもとに向かう。

だが…

俺のオムライス。

そう、俺のなのだから、俺が食べるのは当然。

の…はずなのに。

俺の目の前で、どんどんとなくなっていく。

俺はただ、啞然とするしかなかった。

するとその時、エメリィヌと目があった。

その顔は、とても焦っているようだ。

エメリィヌ。お前がどんなに誤魔化そうが、俺の怒りはもう止まらない。

覚悟しやがれ。

俺のオムライスに手を出した罪だ。

俺はこぶしを握りしめ、静かに近寄る。

エメリー又は、苦笑いだ。

そんなエメリー又はに構わず、俺は腕を振り上げる。

そして、いまだ気付かずに食べ進めている奴の頭に振りおろした。

「なんでテメエが食ってんだよおお!!!」

『ドコッ』

「いつ……つてええええ!!!!!!」

住居不法侵入に、朝食泥棒。

両方現行犯となると、これは通報するしかないだろう。

「何すんだよ!?!」

「何するんだよはこつちのセリフだ!!!なんでテメエがいるんだよ  
!秋!!!!!!」

エメリー又は、『あーあ』と、言わんばかりの顔だ。

まったく。こんな朝っぱらから何やってんだよ。

暇人かコイツは。

そんな事をしていると、家のインターホンが鳴りだす。

くそっ、なんと間の悪い。

俺はぶつぶつ言いながら、玄関のドアを開く。

「あ、朝からごめんね。秋兄いが来てるみたいだから…」

そこに立っていたのは、琴音だった。

あー。琴音も来たわ。

この暇人兄妹が!!

悪態をつきながらも、琴音を家にあげる。

早くこのゴミを処理してくれ。

すると、秋を見た琴音が言った。

「秋兄い！ 自分のわがままで周りを巻き込まないの!!」

「あ、琴音。来たのか。」

叱られているにもかかわらず、まだオムライスを食い続ける秋。

とりあえずだ。

「何で来た」

俺は聞いた。

そう思うのは当然だと思う。

意味もなくこんな事されているのなら、俺は多分暴れ出す。

すると、秋が話し出した。

「いや実はな、俺、今日は早く目覚めてしまったわけよ。」

「それで？」

「んで、腹が減ったもんだから、琴音を叩き起こしたわけよ。」

『起こされました』と、隣で聞いていた琴音が付け足す。

「だけど、琴音がキレてさー」

「当然だ。」

「やっと琴音にも反抗期が来たのかと思って、お袋に頼む事にしたんだ」

「それで？」

「なんと、お袋にも反抗期が来たみたいでさー」

ずいぶん遅い反抗期だな。

このダメ兄貴が。

「自分で作れとか言い出すんだよ。」

「当然の受け答えだな」

「でもそこは俺。どうせ朝作るんだから、今作っても変わらないだろ！と、ビシツと言ってやったわけさ。」

「いや、おかしい」

「そしたら、ブチ切れだしてさー。」

「当たり前だ」

「んで、仕方がないからお前ん家にきて、ごちそうになったってわけだ。」

「ごちそうになったってわけだ。じゃねえよ！！ごちそうした覚えねえよ！俺完全に無関係じゃねえか！！」

くそっ！こんな奴に breakfast！！ を取られたなんて！！

最悪にもほどがある！！

そして琴音が言った。

「それで、私がそれを処理するよう言われたんだよ」

うわあ、とことんダメ兄貴じゃねえか。

もうお前、兄貴やめちまえ。

俺が呆れていると、唐突にエメリィー又が言いだす。

「みんなで公園に行きたいんヨ！！」

「許可する！！」

俺は、すぐに賛成した。

なぜかって？

もう、俺が暴れ出しそうだったからだ。

そのあと二人が、俺に続くように答える。

「俺は構わん！」

「私も構わん！」

秋の口真似をしながら言った琴音。

正直、引いた。

まあ、仲がよろしい事はいいことだ。

俺は何もいうまい。

このあと、俺とエメリィー又は用意をし、公園に出発した。

エメリーヌの要望で、行った事のない公園に行くことになった俺達でも、俺たちは公園には詳しくないので、適当に探しまわる事にした。

結構時間かかるかと思ったが、なんかすぐ見つけた。

俺の家から徒歩五分。

走って三分。

チャリ一分。

まさかこんな近くにあったとは。

俺は少々驚きつつも、その公園に足を踏み入れたのだった。

そして。

「うわあ、めんどくさそう」

なぜこのような発言をしたか。

皆さんも、この状況だとそういうに決まっている。

なぜなら。

銀髪の青年が、目の前にいるからだ。

いや、いるだけではない。

なんか踊っている。

見た感じ、俺たちと同じくらいか。

銀髪で、シヨート。

四角い黒ぶち眼鏡をかけている。

なかなかのイケメン。美男子だ。

だが、一番いけないのが、それらを帳消しにするほどの装備。

イヤホンをつけ、イヤホンのコードが胸ポケットへとつながっている。

そして、その付近のベンチには、折りたたまれたノートパソコン。

そんな銀髪の青年が、キラキラと汗を散らし、さわやかに踊っているのだ。

そんな銀髪の青年は、俺達が来た事に気付き、踊りをやめる。

だが、恥ずかしいとかそういうのではないらしい。

真顔だ。

イヤホンを外し、胸ポケットにしまいこむ。

おいおい、よく見ればうちの制服じゃねえか!!

まさか、同じ学校にこんな痛い奴がいたとは。

違うクラスだと思う。見たことない。

その銀髪の青年が、静かに俺達の方に歩み寄って来る。

琴音が、ゆっくりと秋の後ろに隠れる。

さすがのエメリィーヌでさえも、硬直している。

そしてとうとう、銀髪の青年が目の前にやってきた。

と、思ったら、俺の顔をじっくりと見てくる。

当然、俺は聞いた。

「なんだよ…?」

すると青年は。

「きみ、山空か?」

……え?

何で俺の名前を知っているんだコイツ。

俺がそう思っていると、秋が俺に聞いてきた。

「お前：知り合い？」

「俺の記憶が正しければ、知り合いではない。」

だって見たことねえモン。

だが、青年は違ったようだ。

俺にずっと問いかけてくる。

「山空か？…山空か？…山空か？…やまぞ『うるせえよ！』」

俺はつい、いつもの調子で怒鳴りつけてしまった。

面倒くさいので、とりあえず名乗っておく。

「山空ってのは、確かに俺の事だ」

すると青年の中で、想像が確信へと変わったようだ。

「ああ、やっぱり。昔から変わってない。」

昔？

えー、誰だっけなあ？

俺が思いだそうとしていると、青年が言ってきた。

「ほら、僕だよ。小学校の時の…まあ、半年で転校したし、覚えてないのかもしれないけど」

小学校？

半年？

うん。わからん。

…ちよつと待てよ？

かすかに記憶が…

俺は、じっくりと青年の顔を見る。

…あ！？

このメガネ。このオタクっぷり。

まちがいない。

「お前、オメガか！？」

「ああ、そうだ。オメガだよ。」

あーあーあー。

いたなあ、こんなの。

でもあれ？

昔は確か…

「オメガ、黒髪だったよな？」

俺は聞いた。

「ああ」

ああって。

何でそんな髪色になったんだよ。

俺がそう思うと、やはり伝わったらしい。

「この小説、黒髪や茶髪が多いからね」

は？何言ってるのこイツ。

まあいいや、とりあえず。

「懐かしいなあ！！元気だったか？」

「見ての通りだよ」

俺達が、感動の再会を楽しんでいると、秋が言った。

「なんか盛り上がっている所悪いんだが、どういふことだ？」

ああ、忘れてた。

とりあえず、紹介しとかなきゃまずいよな。

そう思った俺は、オメガに頼んだ。

「オメガ、悪いが自己紹介頼む。」

俺が紹介してもいいんだが、なんかヤダ。

そんな俺のわがままを、快く引き受けてくれた。

え？何でオメガって呼んでいるのだった？

そんなあわてなくても、すぐに分かる。

オメガは、自己紹介を始める。

「僕は、ナルサウ鳴沢 キョウウヘイ恭平。山空とは、古い友人だ。そして…」

オメガが大きく息を吸う。

やはり変わってない。

オメガの覚醒が始まる。

「二次元と少女をこよなく愛する！！マナーが入ればマツハな速度で秋葉原！！悲鳴が聞こえりゃマツハな速度で駆けつける（少女達

にのみ)!!三次元の女なんてクソ食らえ(三歳以上十五歳未満は除く)!!美少女達は僕のもの(十五歳以下のみ)!!誰が言ったか二次マスター!!未来の明るい少女たちの目指す先にはいつも僕がいる!!見た目は無敵!頭脳(妄想)は無敵!!幸せ振りまく女性の味方(十五歳まで)!!その名は…鳴沢 恭平だ。」

メガネをクイツと上げ、秋を指差し、ポーズを決めるオメガ。

「見ての通りの変人だ」

と、俺が付け足す。

律儀な奴だ。カッコやカッコ閉じまでキツチリ言うなんて。

ちなみに、オメガの由来はというと。

もうお気づきだろう。

オタクメガネ。

【オ】タク【メガ】ネ。

オメガ。だ。

俺は、オメガにみんなを紹介する。

「コイツが、親友の秋」

「そして、その妹の琴音」

「最後に、エメリー又だ」

俺がいうと、まるで人形のように、コクコクとうなずく秋達。

みなさん抜け殻状態。

あと、琴音に言っておくことがある。

「琴音。一人の時は、背後に気をつけるよ」

って、聞いちゃいねえか。

俺が紹介し終わった途端、オメガが琴音に話しかける。

オメガ。通報だけには気をつけてもらいたい。

「琴音ちゃんていうんだ。いい名前だね。良かったら僕と結婚を前提に付き合ってみないガグフォー!!」

琴音の手に触れた瞬間。

オメガのあごに膝がクリーンヒット。

そのあと、みぞおちに正拳突きが綺麗に入る。

その衝撃で、綺麗な円を描いて宙を舞うオメガ。

あれ？なんかデジャヴ。

しばらく吹っ飛んだ後、首から地面に着地する。

『グキユリ』と嫌な音を立てて。

そんなオメガに、琴音が顔を真っ赤にして怒鳴りつける。

「この変態ロリコンバカ！！！」

おいおい、すげーな。ははは。

俺は一応、その辺に落ちていた枝で、オメガをつついてみた。

「おーい。大丈夫かー」

するとオメガは。

「なかなか過激な女の子じゃないか…悪くない。」

「死ね。変態」

「グホッ」

俺は、思いつき蹴っ飛ばしてやった。

いやー、それにしても。

いい天気だ。

こう天气が良いと、メガネ取りたくなるよねー

俺はなぜか、唐突にメガネが取りたくなった。

なので、オメガのメガネを盗もうじゃないか。

俺は倒れているオメガに、そっと手を伸ばす。

そしてメガネに触れた。

その時、オメガが気づいたようで、慌てて止めてくる。

「や、やめる！！メガネには触れるでな…！！？」

俺は、お構いになしにメガネを取った。

すると…

「はっはっは、俺様の制御装置を外してしまったようだな！！愚かな人間よ！！この私の前にそのまま跪くのだ！！！！！！」

「はいはい、ぶっ倒れたまま何言ってるんだ」

「いやあ、こういう路線も、この小説にはないからな。もっと色々なレパートリーも兼ね備えております。」

色々なレパートリー？

なんだそれは。

「どんなのがあるんだ?」

「たとえばさっきのが、メガネを取れば性格が変わる奴だ」

「それは確かにありそうだな」

よく、アニメでも見かける。

「次に思いついたのが、メガネがないと妄想が止まらなくなり、ついでに鼻血や唾液があふれ出るという」

「パクリじゃねえか」

マニアックすぎる。

多分大半の方たち理解できてないよ!!

気になる方は、知ってそんなお友達に聞いてみよう!!

あとググろう!

「そしてさらには、目からビームが暴発してしまうという設定のものもある」

「どう表現するんだよ」

「声で」

声!?!えっと、こんな感じ?うわあ目があ!目があ!ビーみたいな?

「ちがう！！チユドンだ！！」

あー、さいですか。

まあ、とりあえずどうでもいいわ。

俺がそんな話を話していると、後ろから秋達がやってきた。

「おい、お前ら何楽しそうにしてるんだ。まさか海、お前も同類の

…」

「ちがう！！！けして俺にそんな趣味は！！！」

「海兄い、さいてー」

「俺にそんな趣味はねええええ！！！！」

あれ？またデジヤヴ。

…と、こんな事をしている場合ではない。

エメリィー又と遊びに来たんだった。

遊んでやらなくちゃ。

そう思った俺は、ずっと口を開きっぱなしのエメリィー又に声をかける。

「とりあえず、エメリィー又遊ぶか？」

「…っヨ!?何かとてつもない変人を見ていた気がするんヨ!!!」

おいおい、お前が言うなよ。

まあ、当たってるけどな。

そんなやりとりを聞いて、急に跳び起きるオメガ。

そしてまた、懲りずに話しかけている。

「山空がエメルと遊ぶなら、琴音ちゃんは僕と一緒に遊びません…  
ガハッ!!!」

それを見ていた俺と、秋。

そして琴音。

皆同時に、オメガを殴った。

顎、腹、脇腹。

三点同時に食らって、オメガはうずくまっている。

俺たちは、無視して遊び出した。

オメガがエメリィヌの事をエメルなどと呼んでいる事は無視して。

「ほら!エメリィヌ。ボールが行ったぞー」

「分かってるなんヨー!!」

「……」

「琴音！パスなんヨー!!」

「アホ！！琴音は敵チームだ!!」

「エメリイちゃん、ボールありがとう」

「……」

「一応気になったが言っておく。無言は消して俺じゃないぜ!!」

「何言ってるんだ秋？」

「べつに、なんでも」

「カイ！！ボール行ったんヨー!!」

「おう!!」

「……」

カー。カー。

「おい、そろそろ帰るぞー」

「後もうちょっとで、山が作れるんヨー!!」

「……」

「エメリイちゃん。もう暗くなってきたし、お夕食の時間になっちゃうし」

「俺もそろそろ帰らないと、お袋がキレルんだけどー！」

「ったく、しょうがねえな。夕飯ハンバーグにするつもりだったんだが……」

「早く帰ろうなんヨ」

「切り替え早ー！」

「……」

「じゃあなー、秋！琴音！」

「さようならなんヨー」

「うん、また遊ぼうねー！」

「じゃーなー」

「……」

「じゃあエメリイヌ。夕飯の材料、買って帰るぞ」

「了解なんヨ！ウチ、チーズハンバーグが良いんヨー！」

「わかった、チーズな」

「やったーなんヨ!!」

「……」

シーン

「なるほど。僕はそういうキャラになった訳か。面白いじゃないか。覚悟しろ山空!!僕を無視できると思うなよ!?!ハーツハツハツハ」

一方その頃。海はというと。

（海の自宅）

「よっしゃ、出来たぞエメリィヌ!」

俺は、ハンバーグを皿に盛りつけ、最後にエメリィヌの要望通り、とろけちゃうぞチーズを一枚のせる。

ハンバーグの熱気で、見る見る内にチーズがとろけて行く。

とてもうまそうだ。

ちなみに俺は、目玉焼きハンバーグ。

俺はどうやら、卵が好きらしい。

出来上がったハンバーグを、食卓に並べる。

半額で買ったサラダも付けた。

とても美味しそうな夕飯だ。

「いただきますなんヨ!!」

「おう、食べ食べ。熱いから気をつけるよ?」

俺がそう言ったのだが、もう遅し。

「あっちゃ!」

エメリー又は勢い良く頬張ると、熱かったときに良くやる、謎の行動を始める。

口の前に手を持ってきて、指をなんかもじやもじやさせてる。

これはいったい何なのだろうか。

とりあえず俺は水を差しだし、エメリー又はそれを奪うようにして飲みます。

どうやら、おさまったようだ。

俺はエメリー又到、

「ちょっとトイレ行ってくる」

と告げ、トイレに向かった。

トイレをすませた俺は、手を洗いハンバーグのもとに向かう。

すると…

デジャヴー!!!

俺のハンバーグが、オメガに食われていたのだった

第十五話 完

第十五話 俺とオタクとメガネとデジャヴ (後書き)

どもです^^

てな訳で、俺日！第十五話。ご愛読ありがとー！！！！

いやあ、新キャラですねーww

いいキャラしてるぜ！

この小説にいなかった感じのキャラを考えると、こんな感じになってしまつて。

オタク。メガネ。変人。変態。その他もろもろを詰め込んだ結果、恭平が出来上がりました。

それらの方が、苦手な方にとっては、最悪なキャラになっているでしょう。

どうぞけなしてください^^

だが、あいつの暴走は止まりませんがね！！

てな訳で、次回もお楽しみにね！！

第十六話〱オメガがいると、朝はこうなる〱（前書き）

どうもです！

誰か読んでくれている人いるのでしょうかねー W W

まあ、いいや。

読んでくれている人！！応援ありがとう！！

それでは、どぞ。

第十六話　オメガがいると、朝はこうなる

八月。

そう、とうとう八月になってしまった。

夏休みになったばかりのころは、色々な期待を膨らませていた。

だが、実際はそうじゃない。

エメリィヌと出会って、オメガとも出会って。

思い返せば散々な事になっていた。

盛り上がったのはじゃんけん大会ぐらいだろう。

これではだめだ。

高校生活二度目の夏休み。

無駄には出来ない。

せめて一度。

一度だけでもいいから、どこか出かけた。

山か？

いや、エメリィヌがいては体力的にきつい。

川か？

いや、最近は事故が多いからな。やめとこつ。

宇宙？

これは夢があつていい。でも不可能だ。

うーん。分からない。

後でみんなにでも相談しようか。

俺が考えこんでいると、いつの間にやらオメガが完食したようだ。

俺の夕飯なのに。ハンバーグなのに。

## 第十六話

くオメガがいると、朝はこうなるく

「ごちそうさま」

オメガが、ハンカチで口を拭きながら言った。  
こういう事は、無駄に紳土的だ。

すると、オメガが急に立ち上がる。

それと同時に、『ガッッ』という凄い音。

どうやらぶつけたらしい。

オメガが足を押さえて苦しんでいる。

…だっせ。

しばらくもがき続けると、おさまったみたいだ。

ゆっくりと俺を見つめ、唐突にオメガが言った。

「お前の家の庭を借りたいんだが…」

は？なぜだ。

芋でも焼きたいのか？

「何分だ？出来たら俺もいただきたいのだが…」

夕飯食ってないからな。

誰かのせいだ。

そういえば、朝食も食ってないな。

遊び過ぎて、昼も食ってなかったような…。

そんな俺たちを見上げながら、静かに食べ進めるエメリーヌ。

コイツは喧嘩を売っているのだろうか？

すると、オメガが言った。

「何分って…出来れば、無期限で。」

「無期限！？お前、そんなに芋を焼き続けるのか！？」

さすがにやり過ぎだろう。

近所にも迷惑だ。

俺が言つと、オメガは否定した。表情を変えずに。

「何を言っている。僕は芋など焼かない」

芋を焼かないだと！？

なんだよ。オメガにはがっかりだ。

「僕がなぜ芋を焼くと思ったんだ。理解に苦しむよ」

うわぁ！オメガに呆れられた。

心から落ち込める。

てか、芋を焼くんじゃないんだとしたらいったい…

「何のためにだ？」

「住むため」

「ああ、なんだそうか」

住むためねえ。

住むため…って。

「はあ！？何言っちゃってんのきみ！！」

住むって、ここ俺ん家だぞ！？

するとオメガは、こんな時まで冷静に答えた。

「安心しろ。食料と寝床は、僕が用意する」

「いやいやいや！？おかしいだろ！！」

「山空に世話になるのは、庭だけだ。…あと、電気と水道とガス。」

「馬鹿野郎！！最後がおかしい！！いや、最初も変だけど最後が特別におかしい！！」

「何か問題でもあるか？…まあ、それらの代金はすべてお前持ちだが…」

「問題しかねえよ！！もう事件だよこれ！！」

ふざけるなよ！

何で俺がお前の使った、ガス、水道、電気の代金まで払わないんだ！！

「あ、やはり食費もヨロ。」

「ヨロ。じゃねえよ！！軽いなお前！お前が食費まで払わなかった

ら、お前は寢床だけじゃねえか!!」

「何を言っている。庭に住むのだから、寢床もお前が用意したようなものだ」

「なんだ、そうだったのかー!! って納得できるかつ!!」

ゼエゼエと、荒い呼吸をする俺。

くそっ、俺は秋じゃないんだぞ。

何が楽しくて、こんなことになるまでツッコまねばならん。

「しょうがないな。なら僕が、エメルの面倒をみるよ」

「黙れ変態!! ロリコン野郎にエメリィヌが渡せるか!!」

何されるか分かったもんじゃない。

俺が怒鳴りつけると、オメガが呆れた表情で、静かに言い放った。

「山空。良く言うじゃないか」

「なんだよ?」

「萌えにときめけ!! 二次にきらめけ!! って。」

「死にさらせ変態!!」

もうだめだ。

コイツは終わっている。人間として。

しょうがない。

もうめんどくさい。

もう勝手にしろ。

「もういい。その代わりエメリー又は置いてけ」

「それは無理だ」

「帰れ。」

「すまん、冗談だ。…今の全部。」

「今の全部？」

「僕は人に迷惑をかけるほど、酷い人間ではない。生活費は僕が払う。」

「なんだよ…。まあ、それなら許す。」

「だが、風呂と食事はよろしく頼む」

「はあ！？…くそっ、さっきよりは条件がだいぶ軽くなったからな。許す」

「すまない」

食事と風呂位ならなんとかなるだろう。

風呂は残り湯。

飯は残飯ってところか。

てかそういえば。

「庭ってどうなんだ？」

いくら夏とはいえ、夜中は冷えこむだろう。

風邪でも引いたら困るし。何より、俺の印象がやばい。

人を庭に放置なんて。

するとオメガが言った。

「安心してくれ。ちゃんとテントを持ってきた。毛布もあるぞよ」

「おお、なるほど」

なら大丈夫だな。

最後の『ぞよ』が気になるが、それ以外は問題ない。

「じゃあ、後は適当にやってくれ。俺は寝る」

「うむ」

「ウチもこれ食べたら寝るんヨー!」

俺はオメガにあいさつをして、二階へと向かった。

一日中動き回って、もうヘトヘトだ。

今にも倒れそう。もちろん、半分は空腹で。

とりあえずあれだな。秋たちにも報告しなくちゃな。

特に琴音。あいつにとって、俺の家は危険すぎる。

そう思いながら、俺はベッドに倒れこんだ。

成り行きとはいえ、凄い事になってしまった。

…まあ、いいか。

そんな事を考えていたつもりなのだが、俺はいつの間にか眠ってしまった

次の日の朝。

「カイ!!!朝なんヨ!!!起きるんヨ!!!」

エメリー又に体を揺すられる俺。

うるさいな。

俺はまだ眠いんじゃないボケ。

俺はエメリー又を無視して、二度寝を決め込むために布団に深く潜る。

これは意思表示だ。

俺はまだ寝るんだぞアピールだ。

その時、突然謎のセリフが俺の耳に飛び込んできた。

「早く起きないと、お・し・お・きしちゃうんヨ」

「はあ!？」

今の声はエメリー又だ。

きつとオメガが余計な入れ知恵でもしたに違いない。

じゃなきゃエメリー又がそんな言葉を言うわけがない。

変な事を教え込んだオメガに頭に来た俺は、オメガに説教するため布団から飛び起きた。

「やっと起きたんヨ!!もう。お寝坊さんなんだから」

「やめんか!!」

恥ずかしがる様子もなく、いつもと変わらない感じのエメリィヌ。

オメガめ、こんなふざけ切ったセリフをエメリィヌに言わすとは  
!!

ゆるせん。

少し可愛かったじゃねーか! あんがい悪くないかも…  
…つい、いや違う! なんて事を教えてるんだ。

「オメガはどこだ!!」

「僕はここにいるが」

「あ、いたのか!! お前、エメリィヌに変な事教えるんじゃないか  
!!」

部屋の隅に立ち、PCで何かをしているオメガ。

相変わらずのクールさだ。

俺はそんなオメガに、俺のプライドを守るために言い放った。

するとオメガは。

「コノヤロウ!! こんな可愛い少女と一緒にいて、お前は何も感じ  
なかったのか!! 失望したぞ山空。昔はあんなに、気があったとい  
うのに」

「やめろ！昔の話を持ち出すんじゃない！！確かに少し可愛かったけども！！！」

「っな！何言ってるんヨ！！そそ、そんなことあ、あるわけないんヨからしかし…！！！」

俺の言葉を聞き、エメリィー又が顔を赤らめる。

なんで怒ってたんだ？

「どうしたんだよ？顔真っ赤だぞ？」

「そそそそそ、そんな事はないんヨ！！！」

「なんだよ、キモいな」

そんな俺の言葉を聞き、静かに呟くエメリィー又。

「……カイのアホ」

「ん？なんか言ったか？」

「な、なんでもないんヨ！！！！カイのマヌケ！！！！」

「は！！？なんだよ！！意味分かんねー！！！」

なぜ俺がキレられなくちゃいけないい。

心配して損したぜ。

「うむ。山空は鈍感にあたる部類だな」

ん？オメガまで何言ってるんだ。

お前ら二人して意味が分からん。

ずっとPCと向き合っているオメガと、突然不機嫌になったエメリーヌ。

そんな二人を見て、俺は怒る気が失せたのだった。

とりあえず飯だ。

俺は昨日から食ってないからな。そろそろ餓死する。

てか、この前からずっと、飯のことしか言っていない気がする。

俺は食いしん坊ではないのだが。

俺はとりあえず、二人に問う。

「朝飯。何が食いたい？」

「…ウチは何でもいいんヨ」

まだ不機嫌そうのエメリーヌ。

本当に何があっただよ。

…まあいいか。

「オメガは何が食いたい？」

「魔法の城に住んでいるセビイちゃんを作った、かつお節ラーメンがおいしいかな」

「俺が作る時点で、もうそれは無理だな」

大体、かつお節ラーメンって何だよ。

味が想像できない。

セビイちゃんについては、スルーで行く。  
いちいち気にしてられるかってんだ。

とりあえず、丼物がいいな。

ガッツリと行きたい。

するとオメガは、俺の考えを読んだかのように言ってきた。

「朝から丼物はないだろう。僕は納豆でいいよ」

「納豆！？お前、意外とあれなんだな。俺は絶対パンかと思ってた」

「日本人は米だろう。セビイちゃんも言っていた。」

またセビイちゃんかよ。いったい誰だ。

しかも、さっきかつお節ラーメンとか言ってたはずだろ。米じゃな

いじゃん。

まあ、気にしない方向で行こう。

エメリィー又は何が良いのだろうか？

そう思った俺は、ずっと顔をそらし、不機嫌そうなエメリィー又に聞いた。

「エメリィー又はなにがいいんだよ。」

「ウチは何でもいいって言うてるんヨ!!」

「じゃあ、お前も納豆でいいな？」

「嫌なんヨ!!」

おいおい、どっちだよ。

なんでもいいんじゃないかったのか。

とりあえず、目玉焼きなら食うたる。

「エメリィー又には目玉焼き作るから。じゃあ作って来るわ。」

「うむ」

「…分かったなんヨ」

とりあえず俺は、早速準備するために一階へと降り、料理を開始す

る。

オメガは納豆なので、白米を茶碗に盛り、納豆を置いておく。

これでオメガの分は完成。

次はエメリー又だ。

油を敷いたフライパンの上に、卵を綺麗に一つだけ落とす。

後はふたをして放置。

しばらくしたらふたを開け、皿へ。

味付けは、しらん。

あいつに任せる。

続きましては俺だ。

まず卵をスクランブル！！それからどんぶりに白米を山盛り！！

スクランブルしたエッグをかける！！

ひき肉投入！！色が変わるまで炒める！！

程よくなったらそのまま丼へ！！

これが男の二色丼だ！！

たまごとひき肉の二色の併せ持つハーモニー。  
これはうまそうだ。

完成したので、二人を呼ぶ。

「できたぞー！！」

すると、階段の降りる音が聞こえ始め、そのあとすぐに二人が下りてきた。

テーブルに並べられたものをみて、オメガが一言。

「納豆だけは寂しいものがある。なにか、もう一つあったらうれしかった」

「うるせえ！！なら食つんじゃねえ！！」

ホント、わがままだ。

残飯じゃないだけ感謝しろ。

やれやれ、といった感じで、席につくオメガ。

なんだよその態度。

「…おおー！！おいしそうなんヨー！！」

エメリー又は、目玉焼きを見たたん、いつもの調子にもどった。

「違うエメル。昨夜教えただろ？」

は？教えた？

「そうだったんヨ！あら、美味しそうな朝食でございますコト」

「やめなさい」

まったく。なんて事を教え込むんだ。

油断も隙もない奴だな。でも、可愛いから許す。

でもまあ、機嫌が直ってよかった。

それぞれが席に着き、皆が違う朝食を食べ始める。

それは、とても新鮮な光景だった。

その時、オメガが納豆のふた開ける。

そのあと、懐から何かを取り出し始めた。

それは、良くハチミツとかを入れる容器。

ほらあれだよ、先端から出るようになって、すぐにかけるやつ。

これで何となく伝わったはずだ。

だが問題なのはそこじゃない。その中身。

ハチミツが入っていても嫌だが、中にあるそれはハチミツとは程遠い色だ。

なんとなく見た目で分かるのだが、信じたくはない。

俺が目を疑っていると、謎のそれを納豆にかけるオメガ。

おい。うそだろ。何で平気な顔してかけられるんだ。

それ…チョコレートだぞ!?

そんな俺の表情を見て、何かを察したのだろう。  
オメガが言った。

「いやじつはね。サビイちゃんの姉のセイビイちゃんがやっていたんだよ。美味いらしいからね」

おい。正気かよ。大丈夫か？

俺の見る限り、とてつもなくまずそうだぞ。

そんな俺の心配もむなしく、見事に納豆に絡むチョコレート。

そしてそれを、茶碗の中の汚れ無き白米へと…

あー、やっちゃった。これもう人間の食べ物じゃないだろ。

バレンタインとかにこれ貰ったら、100パー嫌われる。

そんな物体を、口の中に運ぶオメガ。

「……………」

オメガは無言だが、分かりやすいほど脂汗が噴き出す。

うわぁ……。絶対失敗だよ。拷問だよ。生き地獄だよ。

多分不味いんだろうなーとは思いつつも、オメガに感想を求めてみた。

「オメガ…どうだった？」

「…う、うん。なかなか…美味しいと思う…」

「本当は？」

「全力でミスッた……ゴホッ」

だろうな。

そうだと思っただよ。

人間が食えるもんじゃない。見た目で分かる。

ん？人間？

そうだよ。エメリィーナならもしかして食つかも。

突如そう思った俺は、エメリィーナに地獄のバトンを渡す。

「……エメリィーナ」

俺は、とても優しい視線をエメリィーナに送り続ける。

「な、なんなんヨか……」

「お前。食べ」

「ゴメンナサイ」

早いな。だがもしかしたらというものがある。

「頑張れ。お前なら食える」

俺はオメガから茶碗を預かり、そこからこの気色悪いゲテモノをスプーンですくう。

箸は無理だ。汚れる。

そしてすくった物を、エメリィーナに近づけた。

すると、凄い勢いで拒否し続けるエメリィーナ。

「無理！！本当に無理なんヨ！！冗談抜きで！！」

「大丈夫だ。味はオメガが保証する。」

「冗談じゃないんヨ！！そこで青い顔している奴なんかには保証されても困るんヨ！！見てみるんヨ！！キョウヘイの状態を！！」

そういつて、オメガを指差すエメリィヌ。

するとそこには、青白い顔し、いまだ苦しそうなオメガ。

「ゴホッ！！オエッ……」

「……大丈夫だ」

「間！！今の間はなんなんヨ！？ちょっとお！！」

「すきあり！！」

「ヨ！？」

エメリィヌのかすかに開いた口に、すかさずチョコ納豆。

エメリィヌは、半泣きだ。

「……どうだ、エメリィヌ？」

泣きながらも、しっかりと味わっているエメリィヌに俺は聞いた。

「……」

やはりエメリーヌも無言。

そして、大量に脂汗。

その時、やっとエメリーヌが口を開いた。

「…こんなに簡単に毒を作る方法があったんヨか……ガクッ」

そういつて、エメリーヌは倒れた。

うわぁ、やっぱり駄目だったか。

まあいいや。その内復活するだろう。

俺は、二色丼を楽しもう。

そういつて、俺は二色丼のひき肉の部分を口に運ぶ。

その時だった。

「すきありなんヨ!!」

エメリーヌの声と同時に、ひき肉ではない何か俺の口の中へ。

…おい、まじかよ。

「味はどうなんヨか?…ゴホッ」

「……」

とても負傷しているエメリーヌ。

味なんてものは、分からない。

まだ、来ない。

それ故に、一瞬無言になる。

…あれ？意外と平気。

そう俺が思った瞬間。

！？

来た。来やがった。

そうか。これが皆を苦しめた元凶か。

それを味わった瞬間、望んでもないのに脂汗が吹き出る。

やばい。

もうこれやばい。

味？

言葉に出来ない。

でもあえて言うなら。

チョコレートに納豆のあの嫌な風味だけがしみこんでいる。

そして、納豆の粘り気とチョコレートのとろみが、俺の舌に張り付き逃がしてくれない。

とりあえず、水だ。

俺が水を求め、席を立とうとした。が。

オメガとエメリイー又に、がちり捕まり身動きが取れない。

「おい！！何ずんだ！！離せ！！！」

涙目の俺。

やばい。とてつもない吐き気が…

本格的にヤバいぞ。

俺を抑え付ける二人の目が、恨みと憎しみにより、とても恐ろしい。

ちょっと待て。エメリイー又は分かるが、オメガはおかしいだろう。

俺何もしていない。

だがそんな事はどうでもいい。

俺に水を!!

「カイ。貴様だけ逃げるなんてずるいんヨ……ウッ」

「一緒に苦しもうじゃないか……オエ」

お前ら!!

何やせ我慢している!!

ふざけんな。

俺を見つめる皆の顔は、とても人間とは思えないほど。

その口元は怪しくニヤけて、ニタニタと薄気味悪い笑顔を振りまいている。

だれか。俺を解放してくれ!!

「おい!皆で水を飲もう!!そしたら楽になる……うおえ」

くそっ!皆と同じ症状が現れ始めやがった!!

「そ、そつだな」

「賛成なんヨ!!」

俺の提案に、二人は賛成のようだった。

どうやら、みんな限界らしい。

あの基本無表情なオメガでさえも、苦しい表情をあらわにしている。

それほどに拷問なのだ。

みんなが一斉に動き出す。

台所の水道を、オメガが確保。

くそっ！！あいつ早いな！！

運動苦手そうなくせして。

水を口に含んだオメガは、とても幸せそうな顔だった。

「おいオメガ！！早くそこをどけ！！」

お前のその、開放感に満ち溢れた顔など見たくない。

だがしかし、オメガから衝撃の一言。

「僕が先に取ったんだ。きみに譲る気はないよ」

はああ！？何言ってるんだコイツ！！！！

「そんな下らない事言ってるので、早くどけよ！！！！」

「…お願いします…は？」

「ぶつとばすぞー!!」

何でこんな時に、こんな変態に頭を下げなくちゃいけない。

しかも俺の家で。

だがしかし、オメガの裏切りは止まらない。

「ほら、いいなよ。こんな事になって申し訳ありませんってね。」

「ハア！？それはお前のせいだろー!!」

何で俺が謝らなくちゃいけない。

意味が分からねえ。

「ふーん。なら別にいいんだよ？」

「こんのっ!!くそ野郎!!!!」

もうしょうがない。

謝れば済む。

納得いかないが、今は水だ。

コイツはそのあとに…。

覚悟を決め、俺はオメガに頭を下げる。

「こんな結果になってしまいましたすみませんでした！！お願いですからそこを譲ってください！！」

くそっ！！最悪だ！！

何でこんな奴に、自分の家の水道の使用許可を得らなくちゃいけない。

だがまあいい。これで、地獄から解放されるんだ。

俺のそんな間抜けな姿を見て、オメガが言った。

「なるほど。良く出来ました」

「じ、じゃあ」

「だが…自分が楽になりたいだけで、大事なプライドを捨てるような奴には、この場所は譲れないな。」

「っざけんな！！！！」

もうお前には頼らん！！

洗面所だ。

オメガの華麗な虐待に耐えながらも、俺は洗面所に向かった。

だがそこにも…

「エメリイーヌー!!どいてくれえ!!」

すっかり元に戻っているエメリイーヌ。

この存在に誰よりも早く気づき、一人で確保していたのだろう。

そしてやはり、エメリイーヌもあいつと同類だった。

「カイ、ここを貸してほしいなら、今日の事全部謝るんヨ」

ふざけんな。

まあ、俺も悪かったし。

それなら謝っても気分は悪くない。

「悪かったよエメリイーヌ。本当に悪かった。許してくれ。」

そんな俺の言葉に、エメリイーヌが少々驚いた様子で言った。

「何があったんヨ!?素直すぎて驚いたんヨ!!」

エメリイーヌは、本当に驚いているらしかった。

「まあ、俺が全部悪かったからな。」

エメリイーヌにこんな物食わせてしまった。

とても可哀そうな事をしたと思う。

「じゃあ、許してあげるんヨ」

そんな俺の言葉を聞き、エメリィヌはその場所を離れてくれた。

そのエメリィヌの顔は、とても嬉しそうだった。

俺はすぐさま水を口に含んで、うがいを始める。

すると、すぐにはいかないがとてもスッキリした。

ふいー。助かったぜ。

俺はとてつもない開放感に、オメガへの怒りもなくなっていた。

すると突然、エメリィヌが顔を赤くしながら言った。

「えと、その、カイが朝言っていた事は、本当…なんヨか？」

「朝？何の事だ？」

てか、今も朝だろ。

何言ってるんだこいつは。

「だ、だってさっき謝ってくれたんヨから…本当はどっちなんヨか  
なって…」

「ん？何言ってるんだよ。どっちもこっちもないだろ。無理矢理食わせてしまったのは俺だしな。」

そんな俺の言葉に、エメリーヌがとても驚いた様子で聞いてきた。

「ヨ！？じゃあ、朝の事謝ってくれたんじゃないんヨか！？」

「はあ？何いてるんだよさっきから。俺が謝ってるのは、お前に無理やりチヨコ納豆をだな……」

俺が言うと、エメリーヌがとてもキレる。

「カイのドアホー！！ウチが謝ってほしかったのは……その……」

「どうしたんだよ？」

「う、うるさいんヨ！！なんでもないんヨ！！」

そういつてエメリーヌは、リビングの方向に走って行ってしまった。

いったいなんだったんだ？

最近の宇宙人の考える事は分からん。

昔の宇宙人も知らないけどさ。

とりあえず俺も、リビングへと歩き出した。

するとリビングでは、エメリーヌとオメガが、朝食の続きを取っていた。

そんなエメリーヌの後ろ姿は、どこか小さく、寂しそうだった。

そして気になった事が一つある。

「オメガ。それ俺のじゃん」

俺の二色丼だぞ。

するとオメガは真顔で答えた。

「食つものがなかったもんでね」

「もうお前帰れよ!」

「鈍感なお前には、食つものなど必要ない」

「またそれか!!意味が分からん。さっさと返せ!!」

「ん」

そういつてオメガは、空っぽのどんぶりを見せつけてくる。

こいつ、全部食いやがった。

その時、ふと気付いた。

そう、あのエメリーヌが一言も喋っていない。

ずっと丸くなったまま、何も喋らない。

俺のせいなのだろうか？

…多分そうだろう。

なんでなのか。

何に怒っているのか。

全く分からない。

だけど、あいつが悲しそうにしていると。

エメリーヌに元気がないと、なんか落ち着かない。

俺は寂しそうなエメリーヌの背中を見つめ、静かに言った。

「エメリーヌ。大丈夫か…？」

理由も分からぬまま謝ったとしても、それは本当の意味での謝罪ではない。

だから今の俺には、これしか言えなかった。

だがエメリーヌはずっと黙ったまま。

その時、俺はエメリーヌが震えている事に気がついた。

…泣いている。

あのエメリィーヌが。

そう思うと、俺はとてつもなく悲しくなった。

俺は、そんなエメリィーヌを見続ける。

ただそれが辛い。

苦しい。

そう思った俺は、一言だけエメリィーヌに告げた。

「エメリィーヌ、ごめん…」

俺のそんな言葉に、少しだけエメリィーヌの体が動く。

そして。

「…ヨ」

何かをつぶやくエメリィーヌ。

だがよく聞き取れない。

「エメリィーヌ？ごめん、良く聞こえなかったんだが…」

「…たんヨ」



「いやあ、すまない。僕とした事が、柄にもなく大笑いしてしまった。山空も必死だったんだよな。エメリイーン、ごめん…とか言うて…っぷ」

「ヨ？いつたいなんの事なんヨ？」

「いやあ実はね。山空が…」

「黙れ！！それ以上言ったらゆるさねえぞオメガ！！」

楽しそうにからかうオメガ。

何の事だか分からず、ずっと『？』なエメリイーン。

オメガにからかわれて、顔を真っ赤にして反論する俺。

何年ぶりぐらいだろう…

そんなに朝から賑やかなのは。

騒がしいほど賑やかだ。

でも今の俺には、その賑やかさが…どこか心地よかった。

第十六話  
完

第十六話、オメガがいると、朝はこうなる。(後書き)

というわけで、俺日！十六話。ご愛読ありがとうございましたー！！

…言っな。言わなくても分かっている。

秋と琴音ね。

全く出てこなくて申し訳ない。

出そうとは思ってたんですけどね^^；

出すタイミングを逃しまして…。

二人のファンの方、申し訳ない！！

でも、次回は大丈夫でしょう。

きつと。

あ、そうだ。合計アクセス数（PV）で、1500人突破してました！！とても驚きました！！

ありがとうございます！！

見てくれている人いるんですねー。

初めて見た時、カウンターのバグかと思いましたww

皆さん、本当にありがとうございます！！

嬉しすぎます！！感謝感激！！

てな訳で、次回をお楽しみに！！

第十七話 〱 デパートで大惨事 〱 (前書き)

文字数半端ねえ W W

ではいつてらっしやい

第十七話　デパートで大惨事

「オメガー！ちょっといいか？」

「うむ」

「お前、秋達の事よく知らないだろ？」

「うむ」

「しかも、琴音には嫌われているだろ？」

「ええ！？」

「そんな訳だから、より仲良くなるためにも、みんなで買い物に行こう」

「うむ」

「じゃあ、デパートに行くぞ。お前荷物持ち」

「うむ」

「よし。荷物持ち確保。とりあえず、エメリィーヌも喜ぶしな」

「うむ」

「ついでに、秋達と仲良くなるう作戦。あと、荷物持ち。」

「うむ」

「琴音に今以上に嫌われないように気をつけるよ？」

「僕は嫌われているのか!？」

「まあ、そういうわけだから、これからデパートに出発だ。あと、お前は荷物持ち」

「うむ」

## 第十七話

〈デパートで大惨事〉

上記の会話を見てくれただろうか。

見てくれたなら、説明はいらないだろう。

今俺たちは、デパートの入り口前にいる。

このデパートは結構広く、色々なものが置いてあるらしい。

なので一度来てみたかったんだ。

今回は一応、エメリーヌ用の布団だな。

それを買いに来た。

でもここまで広いと、他の物まで買ってしまいそうだ。

エメリィーヌもいるしな。

で、今何をしているかというと、秋達を待っているんだ。

現地集合という事だ。

なので、今現在ここにいるのはエメリィーヌとオメガのみ。

「シユウ達、遅いんヨねー？ラーメンでも食べて待ってしようなんヨ！！！」

とてもはしゃいでいるエメリィーヌ。

子供って元気だなあ。

「そろそろ来ると思っただけどな」

ちなみに、今は午後二時。

このデパートは、俺の家から40分程度の距離だ。

つまり、結構遠出だな。

「遅いんヨー。しょうがないからラーメン食べるんヨ」

「いちいちラーメン食わなくてよろしい」

駄々をこねるエメリィヌ。

おいおい、俺たちが着いてから、まだ五分ぐらいしか経ってないだろつ。

飽きるの早いぞ。

「そんなことより、山空。僕もせっかくだし見たいものがあるんだが……」

イヤホンを外しながら、唐突にオメガがいった。

「ああ、好きに見てくれ。だけどあまりあちこちに行かれると、後々面倒だからな。なるべく離れないように頼む。」

「うむ」

そういつて、またイヤホンをつける。

何かの音楽を聴いているようだ。

かすかに漏れる音から、アニメソングだということが伺える。

オメガつて、基本無口なんだな。

少女たちがいるとよく喋り出すくせに。

エメリィヌもいるのだが、宇宙人という事を教えたら急に大人し

くなくなった。

といっても、たいして変わらないのだが。

琴音の時と比べるとえらい違いだ。

まあ、家にいる時はエメリー又とずっと話してるけどな。

俺の存在は消されているみたいなの？

まあ、俺の家だし？元々一人暮らしだから別にいいのだが。

一緒に住んでいる以上、俺を話し相手として見てくれてもいいと思う。

いるのにほっとかされると、少し寂しいものもあるしな。

秋の事はすっかり忘れ、自分の事ばかり言う俺。

そんな事を思いながら、二人を待つ。

「むう、シユウはなにをやっているんヨか！もう疲れたからラーメンを…」

「食わねえよ」

どんだけだよ。昼食ってきたろっつが。

「まあ！？下僕のくせに主人であるこの私に逆らうっついの…!?」

「俺は下僕でもなけりゃ、お前に主人になってもらった覚えもない」

「うーん、カイのいけずう」

「やめい」

まったく。すっかりオメガに汚染されやがって。

お前いったい何キャラだよ。

何を目指しているんだ。

「おお、エメル。きみも分かってきているじゃないか!」

急にテンションが変わるオメガ。

お前ら元気だな。俺は疲れたよ。

「キョウヘイはいったい何を聞いているんヨ?」

「フフフ。よくぞ聞いてくれた。魔法少女プリティーマジックの主題歌だ。しかもフルバージョンですぞ?」

「お前、なんてもん聞いてんだよ。一緒にいるこっちが恥ずかしくなる」

「ウチも聞かせてなんヨー」

「いいですぞ」

そういつて、エメリィヌの耳にイヤホンをつけるオメガ。

それを聞いて、ノリノリでダンスを始めるエメリィヌ。

それを見ている周囲の人から、くすくすと笑われているのを聞き続ける俺。

なんとという生き地獄。まるで晒しものだ。公開処刑だ。

秋よ。今ほどお前に、早く登場してほしいと強く願った事はないだろう。

たのむ。俺を解放させてくれ。

そんな俺の願いが通じたのか、秋達到着。

「わりい！遅れた！！」

「いやあ、ごめんねー。…ってこの前の変態！！」

オメガを見て、琴音がメチャメチャ驚いている。

あー、言っておくの忘れてた。

「こいつな、今俺の家にいるんだよ。居候ってやつ？なんか色々あるらしくてさー。つまりはだな……」

俺は適当に説明する。

俺がオメガから聞いたすべてだ。

オメガも所々相槌を打つ。

秋達は、以外と平然としていた。

「なるほどな。まあ、どうでもいいわ」

「うん。そんな事より帰りたい」

ちよ、ここまで来て帰りたいと言っな。

琴音のそんな言葉を聞き、秋が説得に入る。

「せっかく来たんだ、楽しく行こうぜ」

「やだ。無理。帰る。」

「琴音。嫌なのは分かるが、少し我慢ぐらいしてだな…」

「秋兄い。もう私帰る」

「子供かよ！？お前見てみる！！エメリィー又だっってこんなに悲しそうな顔に…」

そういつて、秋がエメリィー又を指差す。

だが、エメリィー又は楽しそうに踊っていた。

おいこら、エメリィー又空気を読みなさい。

そこで嘘でもいいから悲しい顔をしなさい。

そんな俺の思いむなく、琴音が軽快なダンスをしているエメリイ  
ー又を見てしまった。

「…私にはダンスをしているようにしか見えませんが？」

「はははー。ですよねー。」

すっかり負けた秋。

なんだよダメ兄貴だな。

しょうがないから俺がフォローしておこう。

「あれは、エメリイー又特融のかなしさアピールなのだよ」

「なんでやねん！！」

おい秋！！なぜお前がツッコむ。

全部台無しじゃないか。

琴音の顔を見てみると、険しい表情でずっとオメガを見ていた。

おい、そんなに嫌なのか。

っーか琴音。

「お前、人見知り大丈夫なのか？恥ずかしくないのか？」

なんか普通に話しているけど。

「人見知りは何とか平気だけど、一緒にいると違う意味で恥ずかしい」

「同感」

琴音がとても、なんか冷たい。

オメガ、相当嫌われているらしい。

でもまあ、本人があれだからな。よしとしよう。

とりあえず、そろそろ買い物だ。

そう思った俺は、みんなに、特に琴音に言った。

「そろそろ行くぞ。時間がなくなる」

「おう。」

「なんヨー」

「うむ」

「帰る」

おい。面倒くさい奴だな。

まだそんな事言っているのか。

ああ、めんどい。

いつまでもわがまま言っている琴音に、俺は言った。

「帰るな。もし帰ったら、俺の家に泊らせるぞ。オメガ大喜びだぞ。」

「…ほら行こうよ、エメリイちゃん。」

そっいつて、エメリイヌの手を引き、勝手に店内へと入っていく琴音。

とても効果があったようだ。

とりあえず良かった。

「オメガ、今日は琴音に手を出すんじゃないぞ。絶対にだ。」

「大丈夫だ。僕は手を出したことなどない。」

「嘘つくな。とにかく、絶対にだ。」

「わかった」

オメガに強く言い聞かせた俺は、琴音を追って店内へと入った。

後から、秋、オメガも続けて追って来る。

それにしても広いな。余裕で迷子だな。

店内を見渡すと、とても広かった。

エレベーターやエスカレーターもある。

やばいぞ。エメリーヌを連れてきたのはあれだったな。

…まあ、琴音と一緒にいれば大丈夫だろう。

そんな事を考えながら琴音に追いついた。

「琴音、迷子になるから先に行くな」

「ああ、ごめんなさい。ちょっとノリで」

「はた迷惑なノリだな。」

「おい海！お前も迷惑だよ。走るんじゃない」

どうやら秋達も追いついたようだ。

走るなっただって、しょうがないじゃん。

「とりあえず、何買いに来たんだよ？」

秋が聞いてくる。

あ、言ってなかったっけ。

「いや、エメリイーヌの布団だよ。」

「じゃあ、二階だな」

そういつて、壁に貼ってあった案内板を指差す秋。

なるほど。案内板があるのか。これなら迷いそうもない。

俺が案内板を眺めていると、後ろの方から突然『ドコツ』という音と共に、誰かのうめき声が聞こえた。

おい、まさか。

俺は、恐る恐る後ろを振り向いた。

するとそこには、腹を押さえているオメガと、明らかに殴りました。のように、拳を前に出している琴音。

あーあー。やっちゃったよ。

どうしてくれる。

店の中だぞ。勘弁しろよ。

なんでだよ。オメガ最低だな。

少しは辛抱しろよ。

それらの事が頭の中を駆け巡った俺は、とりあえずオメガを叱る。

「おいオメガ、お前何してくれる。入店から五分足らずで手を出さ  
つて。お前最低にもほどがあるぞ。」

俺が言つと、必死に言い訳を始めるオメガ。

「いや違うんだ。肩に埃がついていたものだから。」

「ものだから、なんだ？」

「これはチャンスと思つたわけさ」

「やっぱり最低じゃねえか!!」

もうコイツ駄目だ。最悪だ。

そんな事をされて、琴音が帰るとか言い出すのかと、おびえながら  
俺は見守る。

でもそんな事はなく、琴音は無言で歩きだした。

もちろん秋も驚いたらしく、琴音に聞いた。

「あれ？琴音怒らないのか？」

すると、琴音が言つた。

「もう気にしない事に決めた。」

「あ、そうなんだ」

うん。琴音はえらい。

もう感激。

それに引き換えオメガという奴は。

俺が、あきれ果てた目でオメガを見る。

でもオメガは、何食わぬ顔して歩き出している。

もう疲れた。帰りたい。

元と言えば、オメガと二人を仲良くさせる為に連れてきたのに。

俺の負担を考えるの忘れてた。

だがまあ、しょうがない。

とっとと買い物を買わせて、帰ろう。

俺は強く思った。

「取り合えず、布団だ。二階行くぞ」

俺はみんなに告げ、歩き出す。

そんな俺について来るように、皆も歩き出す。

「琴音ー。先行くなよ」

「わかったよ」

琴音が立ち止まる。

そして、俺が琴音を追い抜かず。と、琴音もそのあとについてきた。

「ところで。この人はどこの芸人なんですかい？」

オメガが唐突に言い出す。秋を指差しながら。

「はあ！？ありえないだろう！！芸人ってなんだよ！？」

秋の鋭いツツコミ。

そんなキレのあるツツコミしているのだから、間違えられても当然だな。

「え？芸人の方じゃなかとですか？じゃあ一体……初めて見るんですが」

「なぜだ！！俺はそんなにも影薄いのか！？忘れ去られる存在なのか！？琴音の兄貴だよ！！隣にいただろ！！初めて会った時も！！」

とても必死の秋。

だがオメガはふざけている様子ではない。本当に覚えていないのだろう。

その時、オメガは思いだしたようだ。

なるほど。のポーズをしている。

「ああ、いましたね。確か…緑原 清さんか。」

「ミドリバラキヨシ!? 誰!? そのお方誰!? キヨシってだれ!?  
そんなだと、琴音も緑原 琴音になっちゃっうよ!?!」

「何の事が分からないな。琴音は、鳴沢 琴音だろう。」

「ナ、ナンダッテ!?!」

とても驚きまくる秋。

おいオメガ。何を言っているんだ。

ほら見ろ。琴音がキレそうだ。

さっきまでの会話を静かに聞いていた琴音が、とてつもない表情で、  
オメガを睨んでいる。

そして。

「ふざけないでよ!?! いくら私でも怒るよ!?!」

「っヨ!?!」

突然の琴音の怒りに、エメリィヌがビビっている。

エメリィヌがビビるのも無理はない。

琴音があんなに怒っているのを初めてみた。

俺もビビったよ。

だが当の本人は。

「ですよね琴音ちゃん。この緑原って人がしつこいんですよ。でも大丈夫。琴音ちゃんは僕が守ってあげるから!!」

『ブチッ』

あ、琴音の何かが切れた。

もうだめだ。オメガ。さようなら。

琴音って、怒ると無言になるんだよねー。

怖い怖い。

「こ、コトネ…手が痛いんヨ…」

エメリィー又の声が震えている。

エメリィー又初めてだよな確か。琴音がキレル所を見るの。

あーあ。二人とも可哀そうに。悪いなエメリィー又。

俺は逃げるぞ。

心の中でエメリィーヌに謝罪し、俺は全力でその場を離れた。

秋はすでに、俺よりもはるか先にいる。

逃げ足速いな。

「ここなら大丈夫だろう。」

そう思った俺は、その場で立ち止まり琴音たちのいる方を見る。

といつても、商品の棚とかに隠れて見えないのだが。

俺たちぐらいになると、そこだけ不穏なオーラに包まれているのが分かる。

しばらく眺めていると、何の音もせずにはオーラが消えていく。

「あれ？何があつたんだ？」

いつの間にか隣にいた秋が驚いている。

本当だよ。いつもなら、悲鳴の一つや二つ聞こえてきても、おかしくはないのに。

って、自分でいってて恐ろしいな。

でもあれだよな。オメガもなかなかやる奴だ。

普段だったら、琴音は恥ずかしくて、どんなにムカついても我慢するタイプなのに。

琴音があんなにキレるって、ある意味認められているようなもんだぞ。

俺だって、初めてあの琴音とご対面したのは、琴音と出会ってから一年後ぐらいだったのに。

それを二回目のご対面でこなすとは。オメガ。良かったな。

「てかおい、恭平の馬鹿は大丈夫なのか？」

と、秋が言った。

恭平の馬鹿って。お前は。

まあいいや、様子でも見てくるか。

悲鳴をあげる暇もないまま、殺害されているかもしれないし。

とりあえず俺たちは様子を見に向かった。

するとそこには……

無表情の琴音と、無傷なオメガ。

エメリー又は相変わらず震えているが、何事もなかったようだ。

何でオメガは助かったんだろう。

やはり秋も気になったんだろう。

オメガに聞いている。琴音に聞くのが怖いのだろうか？

「おい恭平。お前、何かしたのか？」

「ああ、緑原か。」

「緑原じゃねーし！！俺は秋だ。竹田秋！」

「わかった。琴音兄でいいか？」

「もうどうでもいい」

「じゃあ、お義兄さんと呼ばせてもらう。」

「やめろよ！！寒気がする！！しかも同じ年だし！！」

「いや、僕の方が月日の都合で下だ。現に、僕はまだ十六だしね」

「おい、おかしい！お前何キャラだよ！！急に喋り方変更するなよ！！さっきまで俺様クールタイプだったじゃん！！何急に僕っぽくなってるのさ！？」

「いや、なにをいっているんだい。僕は最初から僕だ。」

「なんとなくか合わないんだよねー。なんか俺って言いそんな感じがする。」

「理解不能だ」

「って、お前ら下らねえ事言ってんじゃねえよ。早く話を進める。」

俺は、話がそれた二人に言った。

俺も気になってたんだ。下らない話なんかで時間を無駄にできるか。

俺が言うと、秋がわりいと言いながら、話を進める。

「どんな魔法使ったんだよ？あの琴音を黙らせるなんて。」

「そうそう。俺もそれが聞きたかったんだよ」

「いやなに。ただちよこつと貼っただけだよ。精神安定シールを」

「はあ？成人漢検セール？なんだそれ。」

成人を迎えた人たちが、漢検に挑戦できるセールなのか？

意味が分からん。

「意味が分からねえのはお前だよ。精神安定シールだぞ。」

「ああ、精神安定シールね。なるほど。それで？」

それを使うとどうなるんだ？

「うむ、僕が作ったんだけど、それを貼るとたちまち精神が安定するんだ。」

「まんまじゃねえか」

そのままの効果に、俺は少しがっかりした。

「ってかおい！！お前が作った！？お前天才じゃん。」

と、秋が言っている。

確かに、天才だな。

てか精神安定って、そんな無理矢理安定させてもいいのか。

俺は気になったので、オメガに聞いてみた。

「それって大丈夫なのか？なんかデメリットとかあるんじゃないか……」

「おい海！！何怖い事言ってるんだ！！」

「なんだよ秋。だって気になるだろう。」

「そうなんヨ！！」

うわっビックリした。

いきなり出て来るなよエメリィヌ。

びっくりしただろう。

一応後ろを振り向くと、琴音は向こうの方で商品を見ている。

なんの商品かは分らんが。あれは醤油か？

まあいいか。

「とりあえず話を続けてくれ。」

俺はオメガに言った。

すると、オメガが衝撃の一言。

「デメリットはある。」

え！？あるの！？

「おい恭平！！デメリットって何だよ！！！！」

秋がとても慌てている。それはそうだろう。

だって一応こんなんでも兄貴だからな。

心配だろう。

そんな秋を見ても、やはり冷静にオメガが言った。

「さて、落ち着け。デメリットといっても、大した事はない。僕が  
琴音ちゃんを大事にしているのは分かるだろう。」

「ああ、たしかに。」

とても大事にしていると思う。

間違った方向で。

だが、秋もその言葉で納得をしたようだ。

少し落ち着きを取り戻したみたい。

秋が落ち着いたのを確認した後、オメガが言った。

「そう、デメリットとは、上手く感情をコントロールできない訳ですな。」

「……へ？ちよっと待ってくれ、それだとどうなるんだ？」

秋が困り顔で聞いている。

「つまりは、性格の一時的な変動みたいな感じ？」

「みたいな感じ？と言われても、あんまりピンと来ないぞ」

「ウチもサツパリなんヨ。」

なんとなくは伝わったが、やっぱり意味がよく分からない。

それは秋も同じのようで、この世でもっとも困ったような顔をしている。

そんな俺たちの表情を見て、オメガが何かを思いついたように言った。

「じゃあ、分かりやすく言うと、悲しい話をしたときに、本人は悲しいと感じず、逆に楽しい感情が表にだな…」

「あーもう、わからん！！サッパリわからん。そんな理屈っぽく話されても困る！！」

と、秋が頭を悩ませている。

ちよつと落ち着いたらどうだ。今は俺でも分からんかったが。

なんとなく伝わった。

俺は、オメガに確認を取るように聞いた。

「つまりは、今秋が困っているけど、もしそれが今の琴音だとしたら、困っていると感じず、逆に違う感情が表に…」

「やめる！！意味分からん！！俺には理解が出来ない！！」

「キョウヘイは宇宙人なんヨか！？」

「いや、僕の記憶が正しければ、生物学的には宇宙人ではない事になる。が、他の星、つまり地球ではない所の人たちから見れば、宇宙人に相当するだろう。つまり、結論を言うと分からないだ。」

「おいオメガ。お前冷静に分析を開始するんじゃない。ゴンドラポールのスカウンターか！」

「良いか山空。ドラ ンボールのスカ ーターではない」

「うるせえな分かってるよ！俺がせっかく名前を変えているのに、堂々と発表するなよ！！」

「おい海！世界観がめちゃくちゃだ！！」

「これでは混乱が始まるんヨ！！」

「…うつ、しょうがない。今回は俺が引こつ。」

「えらいぞ海！！」

「立派なんヨ」

「うん、なんかよく分からんが良かった。」

まったく。意味が分からん。世界観って何だ。

皆はいつたいなんの話をしている。俺は皆が怖いよ。

俺が落ち込んでいると、オメガがさっきの話の続きらしい事を言った。

「とにかく、琴音ちゃんについては、分かっただろつ。」

「全く。」

「さっぼつ」

「デラックスなんヨ」

「なるほど。ならば分かりやすく実践してみよう。」

「え？おい恭平！デラックスはスルーなのか！？おいスルーなのか！？デラックスだぞ！？おかしいだろ！！DXだぞ！！」

秋が必死にエメリーヌの言葉に突っかかる。

そんな秋を無視して、琴音の方に歩き出すオメガ。

ん？何をする気だ？

俺たちはよく分からないままオメガを見守る。

するとオメガは衝撃の行動に出た。

「琴音ちゃん！あんなダメ兄貴すてて、僕と駆け落ちでもしようじゃないか！！」

「馬鹿野郎！！そんな事したらまた殴られるぞ！！」

「俺の事をバカ兄貴とは失礼だろ！！せめてちょっと賢くないお兄様とか！！ってふざけんな！！」

「シユウが乗りツッコミしているんヨ。しかもカイよりもキレがあるんヨ。」

おいエメリーヌ。どさくさに紛れて俺をけなしやがったな。

後でシメるぞ。



その一言で、秋の脳内で大爆発が起こる。

もちろん、俺も絶賛大混乱中だ。

「ちょっと、琴音がおかしいんヨ！」

エメリーも異変に気付く。

だろうな。だって明らかに不自然だ。

琴音が、あんなこと言はずがない。

やばい。秋が。秋がやばい。

大丈夫かお前。

「うそだ。…琴音が…コトネが…ことねが。うわああ…!!!…!!  
嘘だ  
あああ…!!!」

「しゅーう…!!!…!!!」

「シュウまでおかしくなつたんヨ…!!!」

頭を抱えて、その場で跳ねながらぐるぐる回っている秋。

どうしよう。秋がいかれた。

ぶっ壊れた。精神崩壊。

…ん！？おい秋！！砂糖なんか持ってどうする気だ！！

やめろ！！弁償しなくちゃいけなくなる！！

俺が慌てていると、エメリィヌが言った。

「ウチに任せるんヨ！！」

そういつて、オメガの方に走り出すエメリィヌ。

そして、至福の時を迎えているオメガと話をしている。

しばらくすると、エメリィヌが秋の方に走り出し、顔をひっぱたいた。

俺は唾然とするしかない。

だがそのおかげで、秋が落ち着きを取り戻した。

「おいエメリィヌ。お前何した？」

当然気になる。あの秋が一瞬にしておとなしくなったのだから。

すると、エメリィヌが俺の方に何かを差し出す。

いや、見せてるようだ。

「なんだこれ？」

その手にあったのは、白くて丸いかたちをして、二本の曲線と、

本の直線で描かれた、寝ている顔かな？それっぽいものが描かれている。

エメリーヌが、説明しようとする。

「これはえつと、せん…しんあえ…たす？『精神安定シールだ。』」

もたついているエメリーヌの言葉を遮り、オメガがこっちに来ながら言った。

しかも、琴音と手をつないでいる。やばい。

「…てか、これが精神安定シールか。なるほどな。エメリーヌにしてはやるじゃないか。」

「えへへー。」

満面の笑みのエメリーヌ。

よく見ると、秋をひっぱたいた所に、これと同じシールが貼ってある。

琴音の手にもだ。

ん？て事はだよ。

「これをはがせば、元に戻るんじゃないのか？」

俺はオメガに聞いてみた。

でもやっぱり。

「不可能だよ。はがせる事にははがせるが、このデメリットは後遺症のようなものだからね」

「あ、やっぱりね。でも、元には戻るんだろ？」

「うむ、一時間ぐらいで。」

「なげえ！ーおいどーすんだよ！ーずっとこのままか！？一時間ずっと！ー！」

「まあ、そういう事になる。でも、僕は嬉しいね」

うわぁ最悪だよ。

どうするんだよ。秋はともかくとして、琴音が可哀そうすぎる。

悲惨すぎるだろ。

って、ん？なんだこの歌は。

急に歌が聞こえ、俺はその方向を見た。

するど。

「ぼっぼっぼー。鳩ぼっぼー。スズメもぼっぼー。マロぼっぼー」

「……………」

「これは後遺症だな。」

「おい！―どうすんだよ！―秋がおかしいよ！―」

「ぽっぽっぽー鳩ぽっぽーススメもぽっぽーマロぽっぽー」

「エメリィヌ。歌うな。なんか悲しい。」

「ぽっぽっぽー…」

「って聞いちゃいないし。」

「恭兄い。一緒に遊ぼうよ。」

「そうだね琴音ちゃん。何して遊びたい？…あっそうだ、アイスでも買ってあげようか？」

「ありがとう！恭兄い大好きっ！！」

そういつて、オメガに抱きつく琴音。

「琴音！もやめて！！お願いだから！！」

「うるさいのよ海兄い！！黙っててくれないかな」

「……はい」

「これが妹萌えという奴か。うむ。悪くない」

琴音が怖いよ！―どうすんだよ！―やばいよ！―！

しかもシールはってないのに、オメガまで壊れてきたよ!!

もうだめだあ!! エメリィー又助けて!!

「ぽっぽっぽーソイヤ!! 鳩ぽっぽーチエケラ!!」

うわぁー!! 秋がやばいよ!!

もうゆるしてー!!

こうして俺は、謎の集団の中に取り残されたのだった。

「さーで、来週の俺日!! 『山空苦戦』『山空崩壊』『山空一人旅』の三本です。来週もまた見て下さいね!! じゃんけんぽん! うふふふふ」

「オメガぶっ飛ばすぞ!!」

……俺はこの地獄から、抜け出す事が出来るのか。

そして、みんなを救う事が出来るのか。

最後に、ここが店の中だという事を忘れてはいないだろうか?

「それでは、また次回でお会いしましょう。じゃあね!!」

「オメガのバツキャロー!!」

第十七話  
完

第十七話〈デパートで大惨事〉（後書き）

どうもですー！！

まず初めに、俺日！十七話。こゝ愛読ありがとうございますー！！  
というわけだね。

メチャクチャなってしまいましたが。

夜中のテンションって怖いですねー！。

それと、オメガは発明が得意だったんですねーw。

てな訳で、次回をお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7592w/>

---

俺の日常非日常

2011年10月29日05時07分発行